

大正二年

八月號

偶然といへば極めて偶然、當然といへば當然、今茲におなじ「創作」の名のもとに再び諸君と相見ゆるに到つたことを、甚だ因縁深く思ふ。去る五月、郷里を立つて東京に入る迄、私は三四十日間を多くは舊友訪問の旅に費した。その途中、行くさきさきで出逢つた人々のなかにはもとの「創作」の誌友とも見るべき人が多かつた。その人たちは確實な理由としては無ささうであつたが、何故だか私が再びもと、同様の雑誌をいつかしたら發刊するにきまつてゐるといふやうな甚だ漫然な、しかも根深い信念をおほかた懐いてゐた。そしてそのため各自の作物をも發表することなく、安んじて私に信頼してゐるといふ容子であつた。私はこれらを見て内心大いに苦痛を感じざるを得なかつた。然し、その時は私にはまだ何等本誌復活の腹案も何もあつたのではない。事

は殆ど偶然に私の上京後約二週間を経て、私の身を並ならず氣づかつてくれてゐる某氏との會談の末に起つて來たのであつた。私は背後に少なからぬ危懼の念をば懐きながらも、歡び勇んでその話をお受けした。それから僅々三週間のうちに、寧ろ驚くべき速度で仕事は進んで、いつの間にかやらもう一冊の編輯も首尾よく済んでしまつたといふわけである。初め六十四頁で切り上げるといふ豫定が他愛もなく頼れて辛うじて九十頁で踏み留つたといふ一事に見ても、斯般の消息は窺はれると思ふ。今更ながら世の同情の厚いのに私は胸を動かさざるを得なかつた。私も今度は眞に身を入れてこの事業に従ふべく決心してゐるのである。事の困難なのもこれまでの経験から充分覺悟してゐる。然し、どうともしてそれを切り抜けねばならぬと心を躍らしてゐるのだ。あらためて、此上ともの後援をわが誌友諸君の前に依頼したいと思ふ。双方の努力相俟つて初めて斯の困難な事業が進み得るのである。

編輯はもとより、發送販賣の經營にいたるまで悉

く私一個の手でするのである。以前の「創作」とはこの點が違つてゐる。

一面、方今の詩歌壇は實際睡つて居る。何といふことなく深い隋眠を食つて、敢て自ら不安をも感じてゐないらしく見ゆる。恐るべく、驚くべきことではないか。

一度斯うして起つた以上、我等は單に無意味に我等が事業を存在せしめたくない。ちからに及ぶだけのことをば斯界のために捧げたいと思つてゐる。自他のために、快く最上の努力を勵まねばならぬ。會心のこと、思ふ。

理論上の理解といふものは殆どいまの私の頭にない。けれども、いまのまゝでは、詩にしる歌にしる、どうしても満足できない。そしてこの不満足な心を今少し押し進めて行つたら其處に我等の求めてゐた境地があるらしく信ぜられてならない。斯うした心

を懐いてゐるのは私一人でないのである。不徹底ながら皆さう考へてゐるらしい。この考へのためにも充分雑誌を使つたいと思つてゐるのだ。

とにかく、本誌來號を一大評論號として、種々な形に據つて居る日本の詩歌に對する各専門家の意見態度を聽いて見度いと思ひ立つた。俳句短歌長詩その他、日本語の韻律の關係、それらの詩形が含む内容の特質、改革すべきか其儘にしておくべきものか、など此等の諸問題はなか／＼一朝一夕で解決すべきものとも思はぬが、何等か多少の暗示刺戟を與ふることでもあらば少なからぬ幸福であることを思ひ、敢てこの擧に出でたのである。唯だ何事も一人の手によること故、この思ひ立ちの完全に進むこと甚だ覺束ないのを悲しんでゐるものである。

不眞面目らしくも受取れぬ破調の歌などが本號の投稿中に大分あつた。右の企ては自然目下の問題になつてゐる破調云々のことにも接觸して行くであらう。

希くば來九月號をして現今詩歌壇に對する一大警

鐘たらしめたいものである。

尙ほ來號は右評論數篇或は數十篇を掲ぐるほかに本號同様名家と社友との創作を掲載すること無論である。本誌復活に際し久しぶりに作つたといふ社友もあつた、それらの人々によつても來號は更に一段と精彩を帯び來ることを信じて疑はぬ。本誌掲載の諸作品に對しては種々の意味に於て特に注意して精讀せられむことを私からお願ひしておく。

よくある例だがまた投稿家一部の人々によつて優待不優待の愚痴を聞くことであらうと思ふ。くだらぬことである。かりに私の眼が暗かつたとしても見ること三度四度と重なるうちには眞の佳品を全く見逃して了ふことはあるまいではないか。そして、私は過去の經驗からその方面に關しては可なりの自信を持つて居る。安心して苦心の作を寄せられたいものである。また、優待々々といふうちにも時には雑誌の體裁やら世間の義理から來たものがないでもな

いことを述べておく。

これは經營の話であるが、先づ本號を見て多少なり我等のこの事業に同感し同情してくれた人々があつたならば、私は折入つてその人にお願ひする。即ち、各自一冊づつ自分以外の人に本誌購讀を勧誘してほしいことだ。さうすれば本號が百部賣れたとして來號は忽ちその倍額賣れることになるからである。言ひにくい話であるが、創作社の事業繼續のため進んで御依頼する。自分の周圍に一人の同志を作ること甚だ易々にして且つ愉快なことでもあらうと思ふ。

全国各地の書店へは大概粗山書店より廻してある筈であるから、それらの店で御買求めを乞ふ。若し、その地の書店に出てゐない地方の個人または團隊の註文は直接創作社にてねがひたい。目下振替貯金加入出願中であるが、今號印刷の済む迄に許可の通知があつたら裏表紙裏附の所へその番號を記入

しておく故、みなそれに依つて註文して頂き度い。若しその許可が本號に間に合はなかつたら普通の爲替によらねたい。指定郵便局は小石川區大塚町郵便局。本號發行の廣告をば不充分とは思ひながら萬朝報と東京朝日新聞とに漸く小さいのを出すことにした。尙ほ厚意ある誌友諸君の種々の方法によつて各地方に本誌復活のことを吹聴して頂くことが出来れば幸甚である。

本號の編輯も印刷も本當に案外速く進行した。印刷だとして今日既に五十九頁まで校了した。多少まごついたものと見え、行數または頁數の違算がちよいと計算してゐたことだ。豫算より超過しなかつたのだから先づ便利だつたやうなもの、そのため九十六頁のつもりが九十頁で終つた。馴れ、ば斯んなへまはやるまい。本號の編輯校正は最近上京中の和田山蘭君に加勢して貰つた。來號は評論號の企てから二倍も三倍も忙しいこと、思ふ。下野の高鹽背山君、

奥州の丹羽洋岳君、その他越後北海道あたりから遊びに來ぬかと招かれてゐるが今年はその好きな旅行もとても出來まいと思ふ。少し仕事がまとまつてきたら、各地方へ創作社の團隊旅行なども面白いことと思ふ。早くさうなりたいたいものだ。夏、琉球へ渡り、冬、樺太へ航するなど、考へるだけでも不愉快ぢやない。

來號投稿に添へて先づ一度だけでもい、から、各自の年齢職業及び生活の狀態などを記して送つて貰ひたいと思ふ。兼て私はこの誌上に於て各誌友お互ひの消息を通じ合つて、單にその作物を通じて知るのみならず、今少し世俗的にも直接間接相知ることを得たらば、種々の意味に於て興味深く且つ相益すること多からうと思つてゐたのだ。さし當り、先づ形式だけでもい、から來號から右の企てを試みて見たい。諸君の方でも自ら進んでこの計畫に賛成であらうと思ふ。甲君が十何歳の少女であり、乙君が男女六人のお父さんであり、丙君が鐵工場の職工で、

である。

暑氣激甚の折柄、お互ひ健康に注意したい。私も先づ達者の方である。(七月廿六日印刷所にて)

九月號

評論號と銘打つて先づ満足に本九月號を諸君の前に提供し得たことを歡びとする。見る人すべてが既に感じたこと、思ふが本號所載の諸家の評論感想が、現時の我等にとつて、また一般詩歌壇にとつて、如何に有意味のものであるかは、寧ろ豫想外のことであらうと思ふ。まことに編輯者として多大の満足を感じると共に、各執筆諸家に對し厚く謝意を申し述べねばならぬ。

而かも、評論號と殊更に名乗ることは、實はあまり心が進まなかつたのである。一時に聲を大きくして一舉に我等が素志を遂げ、全然眼覺めたる詩歌を獲ようとすることは、それは餘りに慾が深く到底成就し得べきことでないと思つたからである。それ故本號を以て慊れりとせず、更に號を逐うて此の方面

丁君が汽船の機關長であつたりするなど、いろ／＼あるであらう。社會生活、内生活、我等は實際半道樂のいはゆるうたよみであり得ない。是非、實行したいものだ。模様によつてはまだ此方面にいろいろの計畫をも考へてゐる。山に棲む人、海に浮ぶ人、市街の底に働く人、少い誌友のなかでも随分と意味深い色別けが出来るであらう。

私の近くに居る人々、または遠く離れて地方に在る人々、それらの人々より私の今回のこの舉に對し寄せられた同情厚意を深く感謝する。これらの深い厚意に對し、敢て背かざらむことを誓ひたい。

今日本文だけは校正済になるかと思ふ。廣告や表紙畫が明日、それから印刷製本、第三種郵便物の認可が先づ二三日、斯んなに急いでも一冊となつて世に出るのは月末であらう。赤インキで染められた校正刷を見てゐると、何とも言へぬ感慨が胸の奥に動いてくる。早く一冊となつて、面々相會したいもの

に力を盡すつもりである。際立つて豫告することをしないが來月號はまた一種の評論の評論號といふ風のものにならぬとも限らぬ。充分に満足出来るまで是を先輩諸家に聴き、同時に我等自身の疑惑懊惱を披瀝し、往く所まで往つて見度いからである。

本號印刷に間に合はず、來號に廻した原稿に、蒲原有明氏の散文詩「山の修多羅」あり、水野葉舟氏の評論「階上の書齋より」あり、古泉千樫氏の「伊藤左千夫先生の事ども」がある。小生の感想文「我が破調の由來並びに雜感」及び「創作社の事業」の二つは双方で十數頁を超えてしまつたので頁の都合から見合せることにした。特に初めの評論は、その言はむとするところが原田實君の「聰明嚴肅なる生活批評」と酷似して而かも原田君の方が遙かに要を得てゐると見たので、全てを印刷所へ廻したあとに遅れて届いた同君の原稿を小生のと引換へに入れて置いたのである。尤も小生の書いたもの、方には、原田君と似通つた内容論のほか、形式に就いて述

べた所が多かつた。その結論だけを引用すれば、今まで單に「歌」と稱してゐた所謂破調の歌を今後普通の短歌と引離して別種のものとする、短歌には短歌の特質あり、引離した新形式の歌にはまたそれ獨特の境地あることを述べたものである。この事はまた來號改めて書く筈である。其處で、本號には一切破調の投稿歌を載せなかつた。來號、別欄を新設してその中に收むるつもりである。その名稱について今尚ほ惑つてゐるのであるが、單に「長歌」又は「新長歌」としたいと思ひ「短曲」又は「短唱」と名づけやうかとも言ひ合つてゐる。何れとかきまるだらう。されば來號より改めてその種ものを募集することになつた。進んで志ある人々は投稿するがよい。これも頁數の關係から普通の短歌か、此の方か、何れか一方のみ定めて貰ひたい。念のために言ひ添へておく、單に新奇を珍しがり、またはだらしないのんべんだらりと作れるものと心得てこの貴重なる新詩形を濫用してほしくないことである。今一つの小生の感想文はそのまゝ來號へ掲載す

る。重に雜誌「創作」の執つて進むべき方針、原始的の意味に於ける宗教の取扱つた範圍に我等の事業を置きたいといふことについて記したものである。

重立つた同人の歌の組みかたを普通の創作詠草にしてみたり、右のやうに自身の論文を外したりしけれど、見らるゝ通りの頁數になつてしまつた。これで定價三十錢は素人商賣のものにしては思ひ切つての勉強であるのだ。

來十月號を新自選歌號といふものにするのは豫告の通りである。現代日本短歌の生粹をこの一冊に結晶させたいものだ。一般の投稿をも念入りに詠んでほしい。丁度時季もいゝし、佳作と認めればこれを機會にぐんぐん引立て、行きたい。本號の山梔君井田君等の歌はやや掘出しものゝ觀がある。來號は更にこの種の多からむことを希望する。

別に廣告欄にもあるやうに、來年の春季或は夏季を期し誌友大會を開く。今まで斯る企ての行はれた

ことをも聞いてゐないので定めし異様に感ぜらるゝであらうが、是は小生が多年の希望の一つであつた。そして案外たやすく實行出来ることである。單に東京見物を手軽くやると見てもいゝし、同志相會して握手するといふ意味に見られてもいゝ。それ以前に一寸上京したい人などは、成る可くはその大會の時まで延ばしておいて貰ひたいと思ふ。何しろまだ何ヶ月かさきのことである。ゆるゆると準備その他に手を盡し得らるゝので、出来るだけ完備した、意味深く興味豊かなものにした。何か然るべき希望思ひつきがあつたら申込んでほしい。失禮な申し分だが、平常金錢に餘裕のない人なども今から用意に着手すれば事は意外に容易に成し遂げ得らるゝであらう。往復の旅費に懇親會の會費（かなり旺盛にやつてみたいつもり故）位あと見てもいゝ。それにしても一時も早く春か夏かを定め度いものだ。來號から出席申込者の氏名を列記して行くことにする。

前の「創作」でやつてゐたやうに、初心の人々の

ために歌の評釋又は作法注意めいたものを來號より載せて行くことにした。小生の通信教授の原稿をこちらに廻すことにしてもいい。尙ほ他に少しづつ研究的の記事をも入れたいものだ。

復活號は却つて氣恥しいほど諸方で歓迎せられた模様である。この事に關しては各誌友諸君の個人紹介も大いに力があつた、がわけても各新聞社の新刊紹介欄擔當記者諸君の盡力が更に效があつたかと思はれる。東京より地方の方が特に強かつた。記して厚く御禮を申述べらる。

然し、何を云つても手が廻りかねるので、評判とは反對に販賣の方では成効してゐない。印刷した三分強も賣残りがあつた。僅かの部數しか刷らないのにこの有様では甚だ心太からぬ次第である。今一層奮發してこの方面に特志家諸君の盡力を希望したい。自ら進んで幾人も購讀者を紹介せられ、又は長い手紙をわざ／＼榎山書店主人に宛て、「創作」のための盡力を感謝し更に一層のそれを願望せ

られた人などもあつた。實際、涙の出るほど熱心に親切に本社のために盡力して呉れる人々があるので嬉しくてならぬ。

各地方の書店にして本誌が出てあらず、而して四五部でも賣れさうな見込のたつた所では盛んに書店の主人をせき立て、取寄せさせることに力めて頂きたい。五部以上取纏めた團體の直接註文に對しては相當の割引をする。

雑誌をやつてゐると日のたつのが實に速い。單に雇はれてやつてゐる仕事か何かなら、さうでもあるまいが、殆ど自己の身體一つを唯一絶對の資本として、何か意味のある事業を成し遂げて行かうとするには、なか／＼人知れぬ苦心苦勞を要してゐる。それであつて平氣で馬鹿な酒も飲めば、雜誌者の對手にもなつてゐる。内心我が身の精力に驚いてゐる姿である。秋にでもなればこの元氣をして今少し質を細やかならしめたいものと心がけてゐる。秋と云つても、もうこの數日來めつきり秋らしくなつて來た。

くの百三十四頁から七十二頁までの間より」としてあつた。

競詠二十四家集は濃淡はあるがみなそれ／＼各自の個性の表れてゐるのを快く思ふ。自選歌とくらべて讀み味つてみるのも面白い。現代青年の心の傾向の視はるゝ心地もする。歌としては、どうも多少行き詰らねばいゝがと掛念せらるゝのが多いやうだ。

今度の編輯には實に苦勞した。初め、集つただけの原稿のページ數を計算して見たら百三十頁からになつた。發行所としての方針から本誌はどうでも百頁で切りあげねばならぬことにきめてあつたので、厭でも應でもその三四十頁を割愛せねばならぬ始末となつた。さてそれがなか／＼容易に行はれ得べき仕事でない。三頁五頁ならまだしもだが、何しろ數が纏つてゐる。とつおいつの末、殆ど眩暈を覺えつつ決行して行つた。歌を消し、「不平なく」「みなかみ」その他數種の新刊批評及び散文類を抑へ、小生の「短歌講義」及び「作法添削」等を次號に廻し、

そんな有様で、當面のことにのみ私の貧しい精力は全部注ぎ盡されてゐる。なか／＼おちついて葉書一本書く餘裕もありはせぬ。願はくば毎月のこの雑誌を即ち私よりの私信とも見て、暫く無沙汰を見逃して頂きたい。事業の基礎の整ふまですつかり事務家にならねばならぬ。

(中略)

では 左様なら。

また來月面目を新たにして相見えよう。(八月廿四日)

十月號

自選歌掲載の順序はその到着順によつた。題のつけてあるのも無いのもあつたので、體裁上みな單に自選歌としてしまつた。つけてあつた題目及びその斷り書きは次ぎのやうなものであつた。島木氏は「今年の秋」、金子氏は「近き過去の作より」、武山氏は「心の記録より」、西出氏は「あきらめへ」として「明治四十三年夏——大正二年夏」と、斷つてあつた。土岐氏は「第二の手」が題で、「不平な

四苦八苦の結果漸く百頁に迫込むことを得たのである。なかでも最も残念であきらめられないのは或る匿名にかくれた某氏の「創作九月號短歌批評」であつた。實に理解に富んだ、聰明な辛辣なものであつて、このために被批評者たる創作社誌友がどれだけ啓發される所が多からうと小生は無上に嬉しがつてゐたのである。六號活字三段ものにして八頁を越えてゐたので、それにまた不幸にも経費と印刷所との都合上六號活字を多く使用することを許されないのので、とうとう掲載することが出来なかつた。來號また改めて執筆して貰へればこの上もないことである、と新しい望を起してもある。それもこれも不本意な遺憾なことが多かつた。深く執筆者及び誌友諸氏にお詫びを申上げる。

來號から少々雑誌の内容を改めて見たいと思つてゐる。要するに、もつと我等の日常生活に直接に行きたいのである。或はよほど一般的な通俗的なものにならぬとも限らぬ。とてもすべての氣に入る

やうには出来ないから不平も起るであらうが、出来るならば月の初めごとにこの雑誌を見ることによつて、心がくつきりと洗はれて、淨められ豊かにせられて、今一步深く各自の生活に歩を踏入れて行かねばならぬといふやうな欲望を起さしむるものにしたと思ふのだ。うはの空の純藝術的や道樂的やには到底耐へられなくなつた。幼稚でもいゝから何より先づ信實の人間に返つて、其處から確かな歩武を踏み出して行き度い。

我々の短歌が從來のものに比し、遙かに生活といふものに接近して來たのは疑もない事實である。

けれども、よく見ると實はそれもほんの表面上形骸上に限られてゐて、まご／＼すれば昔の俳句や川柳の取扱つた極く淺薄な材料及び態度の方面に墮ちて行かぬとも限らぬ状態に在る。

わが身を知り、わが身を味ふといふこともそれが單に表皮だけに留つてゐるのならば、却つて淺薄な、半可通な、誠に見苦しい一生を送つて行くといふ結

果に終り易いと思ふ。全然さういふことに風馬牛である人達の方が不知不識のうちに却つて意味饒かな一生を送り得るかも知れない。

我等は如何にかしてその惨しい境地から脱して、完全な隙間のない生活を營み度いものではないか。我等のこの片々たる雑誌刊行の事業をすらもまた充分にそのために使したいと思ふのだ。

さうしてあるうちにまた自つと眞實の歌といふものにも痛いまでに接觸して行くことになるのである。

さういふ見地から競詠廿四家集でも第五十頁内外邊及び其他の歌などを能く見詰むるとその輕重など誰の眼にも直ぐ解つて來ること、おもふ。理論では多少耳に馴れてゐた生活對詩歌の問題を、我等はいま實地に行はうといふのである。我等の生きを自覺せしめ、生長せしめ、而して歌はしめよといふのである。

本誌編輯者として、内面より外面より、そのため遺憾なき手段をつくしたいと、いま私はあせつてゐる。次號から逐次徐ろにその願望を形の上に表して行き度いものだ。

田波御白君の死去は、前號の欄外に（印刷後にその事を耳にしたので）取敢へず報じておいたが、悼しいことであつた。小生も同君とは同君がまだ岡山に行かぬ前のころ親しく往來して一緒に廻覽雜誌などを作つてゐた。本誌には内藤君の追想記を載せ（來號また金子薫園氏のそれが出る）たので、小生のをば内藤君の「抒情詩」に書くことにした。同君の遺稿、（本誌廣告欄参照）も出るので、それによつて夭折した詩人の面影をよく偲んでほしいと思ふ。

曾て新詩社の「明星」の盛んであつたころ、一方の雄と仰がれてゐた前田翠溪氏も田波君と同じ病氣で郷里に於て先頃逝去せられた相である。佐々木信綱、與謝野寛氏及び其他故人の舊知諸氏によつて遺

稿「翠溪歌集」が出版せられ、小生にもその一部を贈られた。讀んでゆくうちにも不遇な地位に沈んでゆく才人の面影があり／＼と見えて来て、言ふ様なく苦痛であつた。遠い近いに係らず、自分とほほ似通つた境遇に在る人の死んでゆくといふことが、單にあはれといふでなく此頃は一種の痛苦を覺えさせられるやうになつた。不知不識自身の上に引き比べようとする傾向が生じたのではないかとも思ふ。生を盡せ、命を悉せ、斯ういふ心が、速く／＼と自らをせき立てるやうになつたのではないかと思ふ。そして、それは直ちに轉じて自己の現在を咒ふの眼ざしとなる。

今二十七日、故人のために故人の母校たる高等師範學校に於て追悼講演會が開かれ、與謝野寛、平木白星諸氏の講演があるといふ。創作社よりも太田水穂出席同じく「文藝と教育」といふ題で講演する筈である。

去る二十四日、江東秋寺に於て故落合直文氏の紀

念碑除幕式が行はれた。残念にも差支へがあつて小生は出席するを得なかつた。百四五十名とか集られた故人の知友諸氏の氏名を新聞で見て、所謂新派和歌の歴史も短時日のうちに案外な複雑を生んだものだと思つた。

一人で三人も五人も勧誘してほしいといふのではない。一人で唯だの一人に購讀勧誘をやつて貰ひたいといふ夙うからの希望が、いまだに一向受取られてゐないのを、寧ろ不思議にも齒痒くも思ふ。今少し經費の融通がきかなくては、何をやらうとするにも不自由で仕様がなない。それが出来れば、今度なども頭をぐらぐらさせて三十頁切り縮めの悲劇を行はなくとも濟んだわけだ。さほどの困難もないと思ふ事ゆゑ、早速思ひ立つて事を運んでほしい。わざわざの註文が手數ならば近所の書店に交渉をつけて其處から大賣捌の方へ申込まして貰ひたい。

評論號は景氣のいゝ方であつた。印刷した殆んど

大部を賣捌店へ廻したので、本社宛の註文をばあとの方ではお断りせねばならなかつた程である。(本社宛に九月號を註文して送品を受けられなかつた人たちに——來月初めには評論號の返品が賣捌店の方から返つて來るが、遅れたけれどそれを送りませうか、それとも評論號を抜きにして十月號から送りませうか、御返事を待つ、御返事なき方には評論號を送ることにします)本號は一層その上にも多く出てほしいものと思ひ、改めて販賣方の加勢を御依頼する次第である。

直接註文で、先月特價號の特價分不足の人は自身で記憶してゐてついでの方に追加送付を乞ふ。都合では來號も特價になるかも知れぬ。追加など甚だ面倒ながら諒とせられたし。

誌友大會も豫定以外の好景氣である。案外に遠い土地からの申込の多いのに驚いてゐる。近い所はこれからであらう。春と夏とでは今のところ双方相半ばしてゐるが、或人のいふには春は春夏は夏と二度

やつたらどうですとのことだ。人員の都合ではさうしても宜しい。

講演會、懇親會、市内見物などのほかに地方ではなか／＼聴くことを見ることの出来ない優れた新しい音楽や演劇などにも地方の人々のために特に何とかわたりをつけて見たいと思つてゐる。

全國に涉つた文藝中心の斯ういふ會合は日本では初めての企てであるさうだ。

今日校正が終つたらすぐ上野の音楽學校の土曜日演奏會に行くつもりだ。郷里に歸つてゐたため久しく聴くことを得なかつたものを久しぶり聴くことが出来る。ありがたいわけだ。校正よ早く終れかし、頭もへと／＼疲れて來た、早く、早く！(九月二十七日午前十一時印刷所にて)

十一月號

▽社告の通り、本號に限り創作詠草の殆んど全部を休掲した。それを待つてゐた人たちに對しては實にお氣の毒に思ふが、來號をたのしみにして我慢して

ほしい。然し、本號にも充分その代りの材料をば收め得たつもりだ。自作一回休掲の代りにそれらを充分熟讀して、靜かに自省し修養して頂きたいものと思ふ。單に詠む作る一方にのみ夢中になつてゐることは自然自己を靜養する上におろそかになりがちなものだから、斯ういふことをこれから年に一二度づつやつてみたいと思ひ立つたのである。

▽歌を作る人の悪い癖の一つは、歌にのみ親しんで殆んど他を省みぬ傾きがある。そのため自己の内容が極く狹隘になり淺薄になり營養不良になり、析角の歌そのものゝ影が次第に稀薄になつてゆく現象を私は度々見てゐる。昔の俳句や和歌といふものがあるゝいふ風に一種の遊戲に墮落して行つたのなども多少斯ういふ所から來てゐるのではあるまいか。いまは歌といつても他と隔離し獨立して存在してゐる藝術品では決してない。單に歌といふものに對する理解しか持たぬ人々は自然却つて眞實の歌といふものから見棄てられて行かねばならぬ。

▽私はさういふ人々に深く讀書をお勧めする。歌に

類したものに限らず、汎く一般の讀書を御勧めする。酸素や米鹽が我等に必要なごとく、我等の内生活に對して缺く可からざる營養品——鮮血の源泉となるものとして取りあへず讀書をなさい。文學の書籍、哲學の書籍、繪畫音楽に關する書籍、科學の書籍、讀むべきものは實に豊富である。本誌々上にも出來るだけその方面の參考になるやうな記事を載せて行きたいと思ふ。本號の批評講義など、その初めだと見ても宜しい。更に此方面に關して或る具體的な成算もあるのだが追つて發表することにする。

▽右は多く單行本に就いての話である。これを小にして毎月の我等がこの雜誌そのものを單に所謂歌の雜誌と見ず、内外生活のための雜誌と見るやうにしてその心を持つて編輯して行つたら如何であらう。豫め諸君に相談したい。

▽吉江孤雁氏の「モウパッサンの晩年と水の上」の一項は同氏譯「水の上」から轉載したものである。單行本に出たものを全部また月刊の雜誌に引くなどは一寸考へれば可笑しくも聞えるが、是には私に少

々考へがあつた。一體方今の短歌の甚だ表面的で報告的で不徹底である一面の理由として私は例の自然主義の影響を心ひそかに數へてゐた。「在るがまゝ」といふ一のモットーを極く安價に鵜呑みにして、思索も内省も徹底もあつたものか、自己は、社會はたゞ在るがまゝのそれサ、といふやうな淺薄な粗雑な獨斷的な考へを處生處世の上に置き、それが移つて短歌の方にまで影を投げたと見て強ち差支へはないと思ふ。一ころ流行つた物質の表面のみを見て他を知らぬ所謂實感歌にもそれが見えた。今のさうですか歌は過半これらから來てゐる。所が、自然主義者中の偉人モウパッサンは果して人生といふものを如何に見てゐたか、また考へてゐたか。充分とは言へまいが吉江氏の研究になつた右の一文を見ればほゞ了解が出來ると思ふ。さうして、轉じて右いふ如き人々が作歌の態度を今後如何に探るべきかの問題も大方見當がつくことゝ信ずる。偶然にも一面この機會を作つてくれた吉江氏に感謝すると共に、誌友諸君に同文並びに同書の熟讀を希望する次第である。

▽那山君が忙しい中にわざ／＼譯してくれた「ドストエフスキイ論」もまた右の見地から私が乞うて掲げ得たものである。今後五六回は續くであらう。

▽同じく研究ものとして、太田水穂氏の「紀記歌集講義」も以後續載の見込である。これは謂はゞ我等の祖先が初めて作つた自己表現の具、藝術品——歌の源とも見るべきもので、祖先の生活並びに我等が言語の使命、生ひ立ち等を知り、當時の歌のいかに尊くも純なりしかを味ふ上に我等に資するところが蓋し少くないと信ずる。當時にあつては、歌は實に彼等の宗教であつた。政事と祭神とを一途に見てゐた彼等は殆んどそれと同じ意味に於て自己の心のありかを専らこの歌といふものに宿してゐたのである。

▽私の講義や批評は幼稚極るものであるが、これは専ら初心の人々のために筆を執つてゐるがためである。纏つた感想はまた感想として別に書くことがあるであらう。

▽歌も次第によくなつて來るやうである。まだ内容

にも、形式にも、内容と形式との交感にも随分不純さや不整頓が混つてはゐるが、決して死んではゐない、みな生きた作物である。ほんやりやぐづぐづは此際禁物である。眼を開き、惻々として進まねばならぬ。

▽社告の通り、來號には誌友を主とした短歌を多く載せる。來號分としては矢張り平常通りの歌數をよこして頂きたい。今度選んであるのと一つにして出す。

▽唯だ然し、いつもいふやうに、歌を作らむがために生活してゐるやうな淺間しさを呈してほしくない。歌を製造することをお止しなさい。自然と出て來るやうな生活にお進みなさい。

▽投書といふことを考へずに歌をお詠みなさい。流行に追はれたり、一時の氣まぐれでなくして歌といふものを考へて下さい。取りあへず、自己生活の營養物として歌といふものに親しんで御あなさい。私はさういふ心境から湧いて來る多くの歌を迎へてきたまらぬ。

▽同じやうな歌の雜誌などが方今甚だ多く出てゐるので、自然生じ易い黨派心といふやうなくだらぬ私情に陥らないやうに深く注意して置きます。少くも我等だけはそんな所から離れて居たい。そして眞の藝術を追ふ純粹な孤獨な心をそれらのために汚し度くない。我等は一面深山の古木の如く、海底の巨巖の如く愚鈍でありたいものである。

▽本號から表紙畫を改めた、茨木猪之吉君の筆に成つたものである。來十二月號をもこれで行つて、都合では來年一月號をまた改めて見度い。

▽普通の創作詠草のみならず、平常一頁組などにする人々の歌をも六七分通り今號はお預りにした。毎號相變りませず押並ぶより時々は斯う息抜きをやるのがどうもお互ひ健康によさ相である。

▽それでゐて編輯後到着や頁數の具合で來號廻しになつた原稿が十數頁分ある。福永挽歌君の散文詩「雨の日の希望」及び上總屋太兵衛氏の人物評「歌壇二禿頭論」等その他である。之等は凡て惜しいものであるが何れも來號の誌上を飾ることになる。

▽講讀勸誘同志勸誘に關する諸君の熱心な努力を深く感謝する。強ひてその事の行はるゝは我等の甚だ喜ばざる所であるが、好意の存する邊に一步々々我等の主義意嚮を擴めて行くことは實に愉快な仕事である。内外相應じて共に益々事の成就を謀り度いものと思ふ。

▽來る十一月九日(第二日躍)、誌友互ひに一日相集つてゆつくり談笑したい。表立つた會合とせず、たゞ郊外散歩とか遠足とかいふことにして、心おきなく遊び度い。で、取りあへず次ぎのやうな約束をきめておく。

集合場所 中野停車場(舊甲武線電車終點)

時 日 十一月九日午前正九時

會 費 金一圓(他に各自晝食持參)

晴 雨 晴雨に係らず集合

天氣が好く餘り寒くもなかつたら中野から青梅街道によつて小金井に出で櫻紅葉を見、更に餘力あら

ば國分寺附近の廣漠たる雜木林を横切つて立川に到り、多摩川の秋を掬ひ、夕食に一杯傾けて車中賑かに歸京するも可からうし、天氣が好くとも風が出て遠行に不都合であつたらあの邊をぶら〜と堀の内のお祖師さまあたりに參詣して一緒に晝食でもたべることにし、若し雨天であつたら、近くの新井藥師に詣で、藥師前の栗飯屋で栗飯料理の出來る間、湯にでも入つてゆつくりと半日を遊びたい。會費一圓ではさう御馳走もたべられまいが、さんざ歩いた揚句の田舎料理で却つて風味があるかも知れない。若し夫れ豫定以外に大いに飲み大いに食はむと欲する面々は時に宜しくその用急に及ぶべきである。希くば天晴れ上天氣にして右武藏野横斷の遠足がやつて見度い。とにかく時日を間違へず集つた上、この上の打合せをばすることにする。

▽過勞と云ふも仰々しいが近來頭の具合が悪くて困つてゐる。十二月になればまた忙しくなるのでその前に一寸小さな旅行を企てた。明廿六日夜航の汽船

で靈岸島を出て翌廿七日伊豆の下田港へ着き、廿八日の便船で下田港外の海中にある神子元島燈臺といふへ赴くつもりである。この神子元島といふは樹木といふ樹木すら生へてゐない一個の岩礁で、其上にこの燈臺だけが置かれてあるのである相だ。その燈臺に私の舊友が燈臺守となつて行つてゐる、その友人を訪ねて行くのである。そんな所だから便利極めて悪く月に僅か五回か六回燈臺專屬の便船が通ふだけだといふので到着後その次ぎの便船まで六七日間滞在、それからまた下田へ渡つて、都合では天城山を越えて見たいと思つてゐるが遅くとも來月五六日には歸る。本號の校正もまだ少し残つてゐるのに甚だ心残りのわけだがそれをば確かな人に頼んであるので安心して出かける。秋風の吹き荒んでゐる海中の燈臺がどんなものであるか、行つて見ないことには想像も起らない。歌が出来たら歌、歌が出来なかつたら日記か紀行を書き來號諸君に紹介したい。しらすらと四方から寄せて來る岩礁上の浪に私はどんなところで相對することであらう。(十月二十五日、

創作社にて)

十二月號

短歌號とはいひながら、歌だけ總計五十頁位のもの考へて編輯にかゝつたところが選了後數へて見れば三段組だけで四十三頁かになつた。驚いても一度見直して漸く見らるゝ通りのものとしたのである。そのため、本號分詠草のうち、來號分と一緒になつたのが多少あつた。來號は頁を増して全部掲載する。

で、歌以外の何物をも載せられなかつた。本欄の餘白中にも書いておいたが、あの以外にまだ來號廻しがたくさん出來た。小生自身のものにしても、行人獨語中の他の二篇の「秋風の海及び燈臺」「短唱に就て」短歌講義中の「歌の詠み初め」等がそれである。本號は然しその代り多少見ごたへのするものが出來るだらうと思はれる。(本號の行人獨語は元來大見出しの名であつてそのなかに「苦言一束」と右の二章があつたのだが、前者一つだけになつたのである)。「苦言一束」は少々言ひすぎてゐるが、折しも

年未の腹深へに未練なく言つてのけた氣持である。煤拂ひの節、破れはたきの役にでも立つてくれ、ば幸ひだ。

久しく出さなかつた誌友消息をも纏めて見たのだが、これは頁の都合でなく、見合はすることにした。初めのうち一二度のはいかにも正直で素朴でよかつたが次第にそれが大仕掛になり、たいへん臭いものになつて來た。これは寧ろ一般に發表するといふより小生獨りで拜見するに留めておくがよからうと思つて、さうすることにした。お互ひに斯うやつて永く睦んでゐるうちには、不言不語のうちに我等の間に深い正しい了解が生ずること、思ふ。寧ろ黙してその期を待たうではないか。

來年の誌友大會は、とにかく春季に一回催すことにする。而して春に出席出來ぬ人々のためには再び夏季に催すといふことにしたい。

これも、初めは大分仰々しいお祭騒ぎ式のをやつてみるつもりでもあつたのだが、その後そんな

事より、もつとおちついた靜かな會合にしたいといふ氣になつて來た。人數も無理に狩り集めた大衆より、自ら進んで出席したいといふ熱心な人たちだけでやりたいものだと思ひ出した。さういふ見地から出席の如何を定めて頂き度く、重ねて希望するものである。懇親會、講演會、花見、市内見物、芝居博覽會見物等のプログラムは思ひ立ち通りに遂行すること無論であるが、たゞその心持が少し變つて來たのである。これは然し大切なことだと思ふ。

期日は來年三月の末から四月の初めにかけて、ある。本誌來年第一號よりそれに關する具體的の記事を掲げることにする。それまでに出席の如何をきめておいてほしい。來號にその會係り専門の幹事を發表する。

その後の出席申込者は

春季 印田 巨島(三重縣) 平島 澄月(福井縣)
柳澤 茂樹(長野縣) 小林 哀花(鹿兒島)
伴田夢之人(福井縣) 丸山 東郊(群馬縣)
大和英一郎(長野縣) 西山 洋助()

の諸君で、夏季には村井幽果君(愛媛縣)があつた。概して東北の方面に少いのはどうしたものかと思つてゐる。東京在住の諸君よりも夙く申込を希望しておく。

小生の神子元島行きはまことに意味深い旅であつた。歌のほかはその紀行とも雜觀ともつかぬものを書いたのであつたけれど、來號廻しになつた。當時にあつては、寧ろ他を思ふことに急で、歌といふものが殆んど出来なかつた。歸つて來てから心ゆくばかり詠み出るつもりで痛いやうな樂しみを待つてゐたのであつたが、歸來匆々病氣やら、編輯やらで、相變らずざわ／＼のなかに起臥することになり、その時の澄み切つた境地に心を置くべく全然駄目であつた。本號所載の歌はその時のノートの中やおちつかぬ追想のなかなだから拾ひ集めたものである。そして、右の痛いやうな樂しみをば、まだそのまゝにそつと心の底にしまつて居る。

小生は今すこし如何にかせねばとても居た、まらない氣がして來た。この五月郷里から懐いてやつて來た希望をば、今からでも追々事實にして行かうと思ひ立つた。希望などと言ひ立てるほどの事ではないのかも知れぬ。とにかくもつと實着な人間になりたいと思つてゐるのである。

さうしたら、或は自づともつと歌らしいものも生れて來るやうになるかも知れぬ。自分は自身の過去の作品に對して殆んど何の執着を持つてゐない。これこそ自分の作だと大きな聲で言ひ放ち得る何物をも持つてゐない。そして夫等のいづれより自分もつと、もつとしたものであらねばならぬと信ぜられてならぬ。あては無いが、せめてその心の赴くかたへ今また痛い鞭をあげたいと思ひ立つた。

今度は少しづつでも自分の日常生活から變へてかゝらうと思ふ。茲にいらぬことだがとほい友人たちへ手紙に代へて書き添へておく。

いつもせか／＼とこしらへてゐたのであつたが、本誌もこれとてかくまる五冊出來上つたわけである。そして、この次ぎは／＼とあせて來た身にとつては今更ながら極めてわびしい回顧である。六冊目といへば、雜誌としてもそろ／＼しつかりして來て好い時である。ほんとは來號來々號あたりからは、徒勞ならぬ多少なりとも自他の心奥に觸るゝものを編んで見度い。それには幾らかの抱負もあり、さまざまに出來難くないこと、も思つてゐる。何はあれ、先づ第一小生自身からしつかりしなくてはならぬ。我等の來年をまことによき來年であらしめやうではないか。

本誌が今までの経過は先づ順當であつたと言つていゝであらう。編輯は、よしあし共に諸君の見らるる通りであつた。販賣では殘念だがどうも成功したと言ひ難い。もつともこれは前から覺悟のことと驚くわけでもないが、決して好い氣持はしない。特に今號は十二月だといふので、色々の意味に於てまた別種の苦勞をした。頁數を少々減じたのも、交換廣

告を斷つてわびしい思ひをしたのも、みなそれからである。不愉快な事であつた。

賣れないのは内容の如何よりも、まだ一般に本誌の事が知れ渡つてゐないのと、各地の小賣店に行き渡らせ得ないとのためであるかと思ふ。各號とも殘本はたくさんある。それを見本として新誌友を募り度い。若し諸君のうち、誰ならばといふ心づきの人を知つてゐる人があつたならば、その所と名前とを小生宛通じて頂けまいか。そして諸君からも直接その旨を先方に通じておいて貰へば小生よりその方へ見本を送ることにする。尙ほ、本屋の不便な地方にあつては多少の手數をしのぐんでも、大賣捌店なり本社なりへ直接購讀方申込んでは頂けまいか。その方が月々の賣れる賣れぬにむらが無くて仕事やりよいかである。我がまゝをいつてすまないが、出來るなら成る可くさうして頂きたい。

不景氣だとはいひながら、多少に係らず、月ごとに數が増して出てゐるので、先づ樂觀していゝ。來春になればやゝ思ふやうな編輯が出來るかと思ふ。

る。

新年號は特價ものになる。面倒ながらこの事を直接注文の人々に記憶しておいて頂きたい。多分三十五錢になるであらう。

我等がための第一年であつた本年をよく記念し、更に第二年に深い祝福を捧げたい。お正月など、いふものは、はつきりと意識はせずとも、好い機會である。これをきつかけにぐつとよい生活に入りたいものだ。(十一月二十八日)

大正六年

二月號

私が相模の三浦半島に移住したのが一昨年三月であつた。ほんの三四ヶ月もあつて引き上げるつもりなのが、一年と十月あまりも腰をすゑて、漸く先月の廿八日一家して東京に歸つて來た。そして、この二月から本誌を出すことになつた。

元來私には全く相離れ相異つた二つの性質があるやうである。一はずつと物の表面に出て行きたい方、あと構はずに乗り出して行き度い方、一はまたその反對に極く隱遁的な、あらゆるものに觸るゝ事なしに靜かに自分一個を保つて他をたゞ遠く眺めてゐたい方、さうした両面を持つて居る。大勢と一緒に飲んだり唄つたりして騒ぐことの好きなのや、幾度も手を焼きながら斯うした雑誌發行などを思ひ切れぬのなどは前者から出てゐる。そしてさういふ事をや

つた後から〜と苦い悔を感じて執念深く自己を呪つたり、ともすれば人目を逃れて藪の蔭か山の奥に引込んでゐたりするのは後者から出てゐるのだ。今まではそれが極く單獨に部分的に身に表れてゐたので、つまり浮れる時は専念に浮れ沈む時は専念に沈むといふ風になつてゐたので、後はとにかくその時だけは何れにせよ誠にいゝ氣持であつた。が、今はさうでなくなつた。年齢のせるか境遇のせるか、一方だけ飛び離れて動き出すといふことが無くなつた。相異つた二つの性質が同時に眼を開き頭を擡ぐるといふ風になつてゐる。で、何にまれ、オイソレと手を着くことが出来なくなり、單にいゝ氣持一方で事に處する事が出来なくなつた。

私は夙うから雑誌(言ひ得べくば新聞も)の編輯發行といふ事に事そのものとして深い興味を持つて居る。單に計畫としてならば割合に、うまい計畫を立て得るかと思ふ。がそれを事實の上に經營して行く事は大の不得手である。つまり頭ばかり働いて手や足が動かないのだ。單に怠けるといふのみでなく性

質としてそれに耐へ得ないのだ。で、頭の面白味に誘はれてツイ手を出しては今まで二三度失敗を繰返して来て居る。今度本誌を興すに就いても先づその事が頭に上つた。そしてあゝか斯うかと考へ悩んで居るうちに四圍の事情はいつしか既う私を斯うした事實の裡に運んで来てゐたのであつた。

實際私は彼の海岸の何處か氣に入つた山かげあたり掘立小屋風の小家でも作つて一生靜かに讀み書き三昧に入らうかとも考へた。朝夕の散歩にもさうした心持で丘の恰好や海の眺望などを見廻はした事がよくあつた。が、全然隱栖的になり得ない、割合に娑婆氣の多い私はどゞのつまりまた斯うして歌壇とか社會(?)とかいふものゝ表面に出かけて来たのである。

でも、以前とは違ふ。斯うして今になつてまでまだ心を苦しめてゐる態度などは曾て從來の私になかつた事である。それだけ前後を考へて事に當る、謂はば質實さを加へたものと自ら恃んでゐるのである。社友諸君、ことに今回新たに入社せられた社友諸君、

そもその初めから斯うした愚痴めいた話を聞いて必ず心を痛めて呉れ給ふな、これはたゞ事の此處に到つた由來の打解けた内輪話にすぎないのである。よしまた萬一どんな失敗を繰返さうとも今度の諸君の好意を無にするやうなことは決してせぬことを改めて誓つて置く。いかなる方法かでそれに酬ゆることをするつもりである。

唯だ雑誌が出して見度いといふやうなことの外に、その根源をなすものは矢張り歌の事である。實際、昨今の歌は私には面白くない。大家の歌も、中家の歌も、ちつとも身に響かない。私自身に感激が失くなつたか、歌を見る眼が曇つたのか、それとも倦んだか、どうだか知らないが兎に角少しも心に泌みて來ない。そして、兎に角現在の状態に在る私自身の心に泌み響くべき歌の境地が必ず何處にかあると信ぜられてならぬのだ。自身も其處へ行きたいし、一緒に往かうとする人があるならば一緒に急ぎ度い。そして一日も速く今少し面白い、見ごたへのある、

經營といふ方便のみのために満たされつつある。

よしあしの理屈無しにその前に自分の頭の下つてゆくやうな歌が見たいのだ、作り度いのだ。そのためその欲求、謂ひ得べくんば自分の抱負を實現せんため、幾多の不安を懷きながらも斯うして立ち上つて來たのである。

近頃はだいが研究といふ事が盛んのやうである。誠に結構なことである。まつたく身知らずにはなしのなくなつてある方今新派歌壇がこのため餘程戒飾されることと思ふ。が、それは矢張り私の柄ではない。私は唯だ自分の思ふまゝを前後顧慮せず、自由に歌つて行き度いのだ。さうして作つたものが駄目であつたら駄目でよし、幾らかものになつてゐたとしたら、よしあしにつけ誰かまた相當の人が何とか研究して呉れることであらうと思ふ。

では早速お前の歌を見せてみる、と言はれては困る。これはたゞいま斯う思つてゐるといふだけのことで、全身を打ち込んでさうした氣持に於ける自分の歌をうたふ機會はまだ來ない。少くともこの雑誌が今少し落ちつくまでは來ない。いま、私の心は雑誌

作歌どころか、好きな編輯にすらまごついた。最初出來るならば八十八頁あたりで切り上げて置きたいと思つたのであつたがイザ投稿歌の選に着手して出來上つたものを調べて見るとそれだけで既にその頁数を越してゐた。再選三選して辛くも斯の通りに切り詰めたのであつたがそれすら印刷の時にまた數人分を次號廻しとせざるを得なかつた。で、今號は兎に角初號の事で勢揃へとしても社友全部の作を並べ度かつたのだが、次號よりは其人の其時の投稿が餘り出色の作で無いと見たならばその旨批評を附して返送(若しくは私信)したいと思ふのだ。もつとも是は諸君の意見にも據る事で、それより本號通り是非掲載する方がいゝとならばそれでも宜しい。面倒でも次號分投稿(十日限)の際各自その意見を申出て欲しいと思ふ。本誌には特に初對面の人が多く、唯だ一回の投稿を見たばかりではその人の眞價が解り兼ねるので殆んど全部を同じ程度に待遇して置い

た事をもお含み願ひ度い。二回三回と重なるに従つて眞價あるものは覆ひ難く次第にその光を發して來ること、楽しんで居るのである。優待不優待の事は暫く忍んでゐて欲しい。本號中に「莫告藻」といふ一欄を設けたのは、主としてその人の從來の地位とか年齢とかいふことに敬意を表して特に名を變へて出して置いたのだが、それとても私の知つてゐる範圍内のことであるから或は氣拙い思ひをさせる人がこの外にあるかも知れない。が、それは許して貰ひ度い。莫告藻といふのは萬葉の誰かの戀歌にどうかするまでは汝が名のりそといふのがあつたのを思ひ出して附けたのだ。

表紙畫は中川一政君（この人も本社創立當初からの人である）に描いて貰つた。同君も特に骨を折つて製版などまで自分自身で作つて渡して呉れたのであつた。

社友名簿はこの前の本誌が初號を出す時これと同じことを企てたのであつたが方式を一定しなかつたため後で不眞面目になつたりなどしたので中止した

ものであつた。今度は『海紅』でやつてゐる方式に準つて改めて募集することにした。毎號なるだけ多數を掲げて行くことにする。

私も今少し何か書き度かつたが、矢張り不馴の雜務に追はれて書けなかつた。本號の「創作社夜話」は頁の都合から途中で切つたりしたので間の抜けたものになつた。これは本誌の歌を主として、折にふれた私の座談である。毎號續ける。それから來號より「現代歌人研究」といふのを書く。來號には先づ尾上柴舟氏の歌に就いて私の意見を述べるつもりで居る。

元來私が本誌再興を愈々決心したのは昨年十一月の廿八日で、直ぐ運動に着手をばしたものの、實を言へば（いろいろの事情があるが）餘りに突然な、無理な企てであつたので一切がてきばきと運ばなかつた。それに運悪く十二月に當つてゐた、め社友募集の上にも種々な不便が多かつた。

それにも係らず各地方に於ける同情は實に私自ら

つた以前に比べて、餘程事が樂になつた。これを機として尙ほ一層の後援を改めてお願ひしたいと思ふ。そして早速第二回の募集に着手したい。

本誌が諸君の手に渡つた時、たとへ瞬間でも、新鮮な、いゝ心持になつて貰へれば私は満足である。編輯其他、何かお心づきのことがあつたら注意して欲しい。

各地とも今年は格別に寒さが酷いと云ふ。幸に健在ならむ事を祈る。私も亦た忙中閑あり、この新春を樂しみたいものである。（一月二十五日創作社にて）

三月號

特に計畫して斯うなつたわけではないが、偶然にも本號は社中同人及び社友の競詠號のやうな形になつてしまつた。初めから終りまで、社中の者のみの歌を以て埋まることになつてしまつた。そして思ひ切つて他の多くの原稿を來號に廻して了つた。

前號にも書いた通り、私は唯だらしなく歌を並べる事が嫌ひで、なるだけそれを引き締め度い方針

意外とする程で、いろいろなそれらの手紙を読みながら落涙したことが幾度もあつた。そして幸に今では第一回募集としては寧ろ豫期以上の社友をも募り得て居るのである。支社から云つても青森市に一つ、盛岡市に二つ、岩手縣郡部に二つ、福島市に一つ、下野の喜連川に一つ、信濃には松代町、松川村、布施村に各一つづつ、三河の福江町に一つ、松江市に一つ、大阪市に一つ、東京市に二つ（これはまだ幾つも出来る見込）、都合十五個所に設けられた。その外特に維持社友となつて下さつた人も随分ある。（支部の報告なども今號に載せる筈であつたが載せ得なかつた。）

斯ういふ同情應援に會ふごとに私は言ひ難い感激を覺えて居る。そしてそれに酬ゆるには先づ雜誌をよくものにするに若くはないと心ひそかに期して居る。二號三號と重つて行くうちには何れその期待が實現せられて行くであらうと信じて居るのである。

無理ながらも兎に角此處にこの雜誌が生れた。我等の仕事が形を成したものである。まるで形の無か

のだが、サテ本號分の歌の選に着手してゆくうちに自分ながら意外な、誠に、氣持なことになつてしまつた。それぞれの歌が案外にみな佳く見えて来たのである。幼いのもあり、拙いのもあるが、みな相當にはつきりと面目を備へてゐるのを感じたのである。それ／＼の歌がみな私に相當の感銘を興へた。僅か一號を出したゞけで俄かに進歩したとは幾ら慾目にも思はれないが、それでも前號發刊によつて可なりの刺戟を興へたことだけは確かであるらしい。そして、その刺戟が直ちに私を逆襲して來たのである。選んで行くうちに次第に私の方で昂奮して來て、あれも佳し、これも悪くないといふ風に、とう／＼斯んなことになつてしまつた。少し甘過ぎたかとも思つてゐるが、まだその昂奮の消えない私には、さう信ずることが出來ないである。

一つは體裁のことを考へたせもあるが、それぞれ私に見る所によつて種々な欄に分けて置いた。それ／＼注意して讀んで欲しい。中でも私の興味を持つて居るのは「岫雲抄」(あまり感心した題でもない

が、とにかく前號を逐うて)の中の人たちである。海のものとも山のものともまだ解らず、そして、何れもみな一癖ありげの人だちのみである。女性のみの作を集めた「麗日集」も同じ意味に於て注目にすると思ふ。

いよ／＼編輯を終つて、一尺高さに積み上げられた原稿をじいつと眺めてゐると、何だか大きな植林にでも對してゐる様な氣がしてならなかつた。

個人としては先づ最も菊池野菊君の作が眼に着いた。苦しみ／＼選をして行きながら此人の作に出會ふと、私の胸は忽ちすつきりした。埃を浴びてゐた樹木が思ひがけぬ雨に合つた氣持である。遠く溪川の水音が聞えて居る氣持である。いかにも自由な、凝り固まらない、濁らない歌ひぶりを誠に尊く思ふ。然し讀んでしまつていつまでも胸に何物かを留めて置くのは小川水明君の作である。かなりの臭氣を伴つて居りながら、それから面を背くことを許さぬ親しみを彼の歌は持つて居る。加藤和田兩君の作は

或る意味に於て堂に入つたものである。特に加藤君に於てそれを思ふ。この人の作などにはもう普通いふよしあしがつけられないやうだ。しいんと澄み入つた境地、君の好きな雪の後の月夜の眺め、さうした歌境はわが社中君を措いて他に一人もない。其處に行くと、似ては居るが和田君のにはかなりたつぷりの色氣がある。即ち玲瓏たる色氣である。前號の歌の中で世評に従へば矢張り加藤和田兩君の作が一番評判がよかつた。それを聞くごとに私は何といふことなく難有い心地がしてならなかつた。

斯うして一人々々の作を引き出して來ると何とも言へぬ親しみや尊敬やを懷くのであるが、サテ、一步離れて單に歌といふものとして見るとなると矢張り私には抑へ難き不満があるのである。自身を初め、誰のも彼のも、まだ決して眞の歌の境地には入つてゐないと思はれてならぬのである。詳しくは言ひ得ないが誠に苦しい心地である。

前號で戀歌の惡口を言つたのに發奮せられた譯で

もあるまいが本號にはかなり眼につく戀歌があつた。木下範章君のなど、幼稚ではあるが、心を惹いた。鋭くして而して純真無垢、さうした戀歌を大いに見せて貰ひ度いものである。女性の作にそれらしいのが多くあつたが、要するにらしい程度のものであつた。女性といへば閨秀作家の影を絶つてゐる昨今(あるにはあるだらうがみな造花式の貧弱なものばかり)、大いに努力してほしいものである。少々見えを切る形はあつたが本號の潮みどり子女史などは才人らしい。熱田女史は自身でもさう言つてゐたが本號は少し落ちた。

特別募集の課題歌も先づ好成绩であつた。これは嚴に十日で締切つたゞめ、後れて來たのが随分あつた。來號分には注意して欲しい。本號當選の人たちには數日中私共の短冊を送ります。金蘭簿もなか／＼面白い。短いあれだけの中に矢張りはつきりとその人の面目の見えるのが可憐しい。出してゐない人は忘れずに出してほしい。

面目ない話だが、私は今月、即ち初號を出してから今日まで、ぐつぐつと忘れてしまった。見かけによらぬ意氣地なしの私は、初號を出すと共に、がつかりしたものをらしい。落ち着いた手紙は勿論、所要の返事さへ書くのが辛かった。悪いとは思ひながら多くはすつぽかしてしまつた。他のことも何一つ勉強もせず、運動もせず、まつたく碌々として時を消してゐた。實に不愉快なことであつた。來月は努めてこの償ひをするつもりである。何も爲なかつたといふ回顧ほど不快な、苦しいことは無いのである。

初號の出來て來たのが二月一日の午前であつた。その三四日前調べて置いた發送部數よりはかなり澤山な數を持つて來たのであつたけれど、いざ發送になつて調べてみると其後の申込がまた以外に多いことを發見した。そして持ち込んだだけの雜誌では早速に足りなくなつた。初號の事ではあり、新聞雜誌などには思ひ切つて多數發送する積りで豫め定めて置いた數だけべたべたと寄贈の印形を捺したのであ

つたが、わざ／＼の申込者を残してまでも寄贈するわけに行かず、印形を捺したのを其儘に右の新しい申込者や其他に送り出したのであつた。金を出して註文したのに對して『寄贈』の印の捺してあるのが届いたので驚いた人たちが随分あつた様だが、右の事情と悪しからず御諒察願ひ度い。その事の問合せにも返事をば出さなかつたが、これも許して下さい。決して差上げたわけではなかつたのです。

其後にも初號の申込が斷えなかつたので、如何しようかと惑ひながら終に再版することに決心して、その出來て來たのが十七日であつた。其間黙つてお待たせして置いて誠に濟まなかつた、何も彼も私ものぐさ蟲がよくないのです。以後大いに慎しませます。

もう一つ面目ないことに前號には切手を四錢はつて出しました。二月の一日いつばいかつて(右の寄贈一件などで手間どつたのです)漸く包紙に包み終り、車に載せて郵便局へ持つて行き、兎に角これで一安心と其日加勢に來て呉れた人たちと湯などに

も入つてからすつかりいゝ氣持になつて先づ一杯と飲み始め、悉く祝意を盡して夜遅く寢てしまつた。そして翌朝眼がさめると枕許に小石川郵便局から葉書が來てゐる。曰く、御差出しの雜誌重量が三十五匁ある、二錢では行かない、もう二錢はれといふのである。元來二錢はる(三種郵便物として出せば一錢で濟む)のさへ馬鹿々々しいのに、もう一枚はらねばならぬのかと思ふと、まつたくげんなりして、もう起き上る勇氣も無かつた。泣くにもなかれず、其儘に棄て、おくわけにもゆかず(イヤ、いつそ其儘にしておいて諸君に四錢づつ不足税を取らせやうかと考へぬでもなかつた)にや／＼笑ひながらまた郵便局へ出かけて行つたのでした。二錢追加の郵税のことより、まるで雜誌事業に素人か何かのやうに斯うしたものに四錢はるといふ事が耻しいのであつた。實際、局でべた／＼と青い切手をなめながらはつてゐる間、私の背から額からし／＼と汗が流れて止まなかつた。

再版が出來ると直ぐ三種郵便の認可を出願したが

いろ／＼のことで、どうしても許可が出ない。止むを得ず、本號も亦た四種郵便として送り出します。また四錢取られるのが怖しさに前號より紙質を少し落しました。紙だけは少しいゝのが使ひたいのだけれど、我慢せねばなりません。

印刷所を變へました。ポイントの活字が使ひ度いのと、私の宅から近いのとのためです。印刷所の變更や編輯の遅れた／＼め、多分大丈夫とは思ふが或は一二月遅刊するかも知れません。因果なことに今月は廿八日きり無かつた。

越前翠村君の東北旅行に就き、各地共盛大に歓迎して頂いたことを誠に難有く思つてゐる。私よりも厚く御禮申し上げる。その土産話にあてられたわけではないが、出來たら私も四月の初め東海道から畿内近所を歩いて來たいと思つてゐるが、何しろ雜誌といふものを背負つてゐるので果して實行出来るか如何かと思つてゐる。旅行、と思ふだけでも直ぐ胸の痛むやうな憧憬を感じる。それに丁度季節もいゝ。

どうかして出かけたものだ。

其後、朝鮮の京城、青森の五所川原及び神戸に支部が出来た。今頃になつて漸く本誌の復活を聞いたと云つていろ／＼問合せて来る人もある。一般に知れ渡るまでにはまだなか／＼容易でないことと思ふ。紋切形だが、此後とも社友購讀者募集に御盡力願ひ度いものである。一人で一人づつ募ると云ふこと、あれを何卒實行して下さい。

四月 號

かつらぎや高間のさくらながむれば夕ある雲に春
雨ぞふる (金槐集)
さくら花散らまく惜しみうち日さす宮路のひとぞ
まどみせりける
やま風の櫻吹きまく音すなり吉野の瀧の岩もとど
ろに

櫻の咲く時となつた。

けふ、餘りによく晴れたので久しぶりに植物園に行つて見た。此處の門をくゞれば何となく静かな氣

持になるのが私の常である。門を入つて直ぐ左に曲

ると、大きな落葉樹の蔭に小さな古池が二つ三つと並んである。見るともなく眼をとめると、ちよろちよろとその古池に流れ入る水のきれいなこと！附近の樹木の根から湧くものらしく、市街にゐては見ることも出来ぬ地から浸んだばかりの水のすがたに心を動かされて、その側にしやがんでみると、その小さな流れにかすかにうす青葉を動かしてゐる芹をも見出でた。これはまた思ひがけない事だったので一層心をときめかして、さてはと自分のめぐりを見廻すと、果して浅い枯草のそこ此處に散らばつてゐる野蒜を見付けた。池にはきたない藻草の蔭に二三尾の鮒が靜かに尾鰭ををさめてゐる。藻草のさきの僅かに動いてゐるのは藻ではなくて小さな鰻の群であつた。

芹や野蒜を見てゐると遠い故郷の深山の中で母や姉について摘んでゐた自分の姿、または昨年一昨年の春、或る半島のだんだらの田の畔で妻や妻の妹を伴れながら摘んでゐた自分の姿、さういふものが

次第に眼の前に見えて来るのでふらくと私は立ち上つた。落ちつきのない濁つた心が次第に澄んで、ぼんやりと「過去」のすがたの映つて来るのは、今の私にはなつかしいといふよりは苦しい事ばかりである。

ずつと奥の池まで行つて、私は上へ登つた。上の廣つばには日がうら／＼かに照りそゞぎ、子供がいつばいに散らはつて遊んでゐる。黒い洋服、眞紅の袴、笑ふ聲、罵る聲、下とは打つて變つた光景で、その間にとび／＼にまん／＼とや椿や辛夷の花が咲いてゐる。温室附近の西洋花の畑にはそちこちと何やら黄や赤の花が咲きそめてゐる。一時あまりに靜かに澄んで行つた私の氣持も、いつかまた次第に平常の自分に返りかけツイ其處のベンチに腰を下しながら煙草など取り出した。ベンチの前には櫻の老木がずつと立ち並んでゐる。今日まで氣もつかなくかつたが、よく見ればもうよほどその蕾が大きくなつてゐるのだ。

櫻雲鬢鬢といふ時がもう直ぐだな、と私は更に新

しい一本の煙草に火を點しながら思ひ出した。上野の櫻、向島の櫻、荒川、小金井の櫻、それからそれと考へて行くうちに何だかも眼前にそれらの花が咲き亂れてゐる様にも感ぜられて來た。そしてツイ手近にずつと枝を地に垂らしてゐる一本の木の側に歩み寄つてみると、成程もう赤みを帯びてまでふくらんでゐる。蕾の多い小指ほどの枝を摘み折つて掌に弄びながら、やがて私は園を出たのであつた。

東京の櫻はいかにも綺麗には綺麗だが、どうも私には例のわか葉がさきに出る山櫻がなつかしい。ほの／＼と咲いてゐる、うら／＼かに咲いてゐる遠山のそれなどを眺むる時、私は漸く眞實に「ひさかたのひかりのどけき春の日に……」の思ひにうたれるのだ。

さくら花咲きにけらしな足曳の山のかひよりみゆるしら雲

の趣きも長閑だが、私は寧ろこの山櫻をば溪間で見たい。而かも巖床の、水が糸を亂したやうに浅い、若しくは藍を湛へたやうに深いほとりに一本二本な

ど咲いてゐてほしい。私の郷里、而かもその峡谷にこの花が非常に多かつた。

とにかく櫻の咲く時になつた。斯うして原稿紙をひろげて居る漆黒の一閑張の机の上にいま植物園で折つて来た蕾の枝のころがつてゐるのを見てゐても南の國北の國と遅れ先きだち咲き出づるこの花のことが考へ出されて心が次第に明るくなつてゆく。

本號もまた純然たる仲間同士の作で全誌を編んだ。「漂泊行」「冬菜畑」「貧しさと勤め」となどと順次に讀んで行つてほしいものと思ふ。甘いのも、拙いのも、だらけたのもまだ随分残つてゐるだらうが、漸く足並の揃つて来たらしい喜びから、それ／＼の人の歌の數もなるだけ多くし、全然没書にすることを力めて避けて、見らるゝ通りの本號を編んでみた。白きは白く、青きは青く、それ／＼性情の赴くまゝにずん／＼と伸びて行つて貰ひたいものである。佳いとは云つてもそれはまだほんの内輪の事である。あんよが上手になりかけた位に考へて居れば間違ひは

ないのである。

若手の人の出来榮に比べて先輩諸彦の不振は夥しいものであつた。加藤東籬小川水明一體何で斯う氣の抜けた歌ばかり作つたのだらうと私は全く途方に暮れたのであつた。加藤君のは枝葉のない全身のものではあるが、而かも極めて空疎なそれである。吹けば飛びさうなそれである。小川君のは殆んど手さき口さきの冴になつてしまつて居る。胸底から吹き出す息では決してない。まご／＼すれば、何とかかんとかなりけエリといふ道歌でも作り出すのではないかと審られた。切角この二三月異常な勢を見せて呉れたので喜んでゐた甲斐なく菊池野菊君はまたもとのもくあみに返りさうになつて来た。由來同君の作の通弊は一首それ／＼相當に目鼻を備へて平明ではあるが一向に纏つた個性の力を持たぬことであつた。それが本誌二月號の出る頃の作に見ると、今までにならぬ底力を帯びて来た。歌の表面の目鼻、道具だてばかりでなく、その蔭にひそむ作者の生命の力でぐつと押して来たのであつたが、今號のはよ

ほどまた怪しくなつて来た。出来不出来の烈しい人ではあるが中村終花君も慘憺たるものである。小川君をくすぼらしたやうな、イヤにねち／＼した詠みざまなどはまつたく頭痛のたねであつた。高鹽青山松岡朝次郎君、百年一日の如く、山下政一郎君のが正しく作歌のこつをば得て来たがそのため單に刷毛さきの巧をのみ急いでゐる形がある、石版畫の美を出で得ない。かて、加へて和田山蘭君にも今月は作が無いのださうだ。その代りに感想が来た。それによればかなりメートルが上つてゐるやうだが、正しくこれが同君の本心であるならば甚だ結構である。ひそかに恐る、或ひはそれ安易自己慰安法の一ならざるかを。因に言ふ、小川君から和田君を讀めちぎつた感想文が来てゐたが暫くこれをば預つておきたい。小川君は矢張り利いた風なことを言ふのを我慢して、唯だ黙つて自分の歌を作つてゐる人だと思ふ。若し論客として推すならば社中越前翠村君あり茅野昌栖君あり松岡朝次郎君があるではないか。少々言葉が過ぎたかと思ふが、實際私はこれらの

原稿を見てしまつて實に何とも言へず心細かつたのだ。なまけなかつたのだ。無論、自分の事を考へねばならなかつたが、何だか諸君が苦なしに平氣で斯うやつてゐるらしいのを見ると、もう耐らなくいら／＼して来たのだ。敢て、其儘に一言を呈する次第である。

何とも言ひ得ない佳い歌が見たいものである。理窟から離れた佳い歌が見たいものである。世上何ぞ歌論歌話のみ徒らに多くして而して終に一首の歌無きや。身びいきか知らないが、私は矢張りこれをわが社中の人に待ちたいのである。

歌の多いのはいゝが、どうも散文が淋しい。前號と今號とだけ斯うしておいて來號あたりから少しそれを加へて行きたいと思ふ。佳いの拙いのと云つた所で、要するにまだ諸君の作は五十歩百歩のものである。だからそれがよし五首並ばうが十首並ばうが、たいした差はないのである。若し、其中で少しでも異常に眼につく作があつたらばたとへ其人がどんな

初心の人であらうと私に馴染の無い人であらうと、ぐつと優待する（今號の山口濱雄君、初號來の末の郎子君など先づその例か）また月々の出來不出來によつては正直にその數を増減するつもりである。一ヶ月二ヶ月の事でなく暫く經つ間には次第にその人の眞價は出て來るものである。いま本誌の中堅となつてゐる小川君菊池君だちも初め雜誌の出した時は六號三段組で辛うじて一首二首づつ並べられてゐたものである。一首二首の不平組がぼつ／＼出て見えたやうだが、御勤考を願ひたいものである。私にしても一度やそこらはどうした調子で見違ひの出ることが無いとも限らぬ。が、二度三度と同じ見當違ひを繰返すことは斷じてないつもりである。要するに我等のこの一團だけはさうした眼前のごた／＼を棄てお互ひに一致した目的、誰でもい／＼から兎に角佳い歌をつくり上ぐるといふ大きな目的に向つて進みたいものではないか。

刷り上つてからでなくてはどんな體裁になるか解らぬが、「岫雲抄」一編の部には未だ會て他で使つた

ことのない新活字を用ゐてみた。歌は新派、活字は新鑄、何んぞそれ眞個新進作家たらざるを得べけんやといふ所である。六號三段をもポイントに變へてみた。

誌上發表を見合せて批評を附けて返して呉れといふ人がかなり多かつた。出來るだけさうして置いた。が、實地やつてみれば案外に手數のかゝること、數の少いうちは兎に角すつと多くでもなるとな／＼手に合はなくなると思ふ。で、以前にやつてゐた様に雜誌と離れた批評添削部を設け度いと思ふが、それも雜誌の基礎の固定しないうちは忙しくて手が廻らぬ。幸ひ和田山蘭君が個人で阿良々岐社を始めて批評添削をやつてゐるので希望の人はそちらへ申込まれてはどうかと思ふ。嚴格で親切な同君のことだから、返送期日其他極めて細密に行はれて居る様だ。

いつの間にか（ホントにさう思ふ、雜誌などやつてゐると別して日のたつのが速い）本誌も二號を重

ぬるやうになつた。明治四十三年來、休刊したのが二度、今度がその二度目の復活なのだが、今までの二回は常に背後に物質上の後援者を持つてゐた。今度は全然それが無いのである。唯だ純然たる社友だけを背後に置いて斯うなつたのであつた。而してい／＼苦しいことはあつたが兎に角さう見苦しくもないのを茲に三冊提供するを得たことを私はいま自分ながら聊か意外にも思ひ、愉快に感じてゐるのである。そしてこの機に際して改めて諸君に感謝の意を捧ぐるものである。私としても經營上若しくは編輯上に幾らか本號あたりから手心がわかつて來たやうだし、社友諸君の作物も漸く芽を吹いて來た様で、且つ私もそれ／＼の作風に馴染んで來た。

前號は意外にも遅くなつた。遅くとも三日の夜には出來ると信じてゐたのに、印刷機に故障があつたりして、六日の夜に延びた。重々相すまぬことであつた。そのため順送りになつた形で今號も或は一二月遅くなるかも知れぬ。遅刊はこれで打ち切つて來號をば諸君を驚かさす程度に早く出したいと思つてゐ

る。

今號で社費の切れる人が澤山ある。既に拂ひ込まれた人も多いが、でない人は本號着の上折り返し拂ひ込んでほしい。一ヶ月宛分納で結構である。振替貯金に加入したいのだけれど、今の宅を引越したくてゐるので、（實は今月あたり夙／＼に越してゐるわけだつたのだが、相應の家が見附からぬのだ）越してからにしたいと段々延びて來た。暫く不便でも爲替に據つて貰ひ度い。

昨年の夏あたりからどうもよくなかつた私のおなかの具合がいよ／＼わるくなつた。そして終に我を折つて醫藥をとつてゐるがぐつたり寢込む程でなくとも今まで病氣に縁の遠かつた身には事ごとくに辛いことのみ多い。で、計畫してゐた大阪行は暫く見合はせねばならなくなつた。その代り、何處ぞ胃腸に好いといふ温泉へでも出かけたかと思つて居る。多分行くことになるだらう。其處で病氣も疲勞もすつかり洗ひ落して、それこそ溪間の山櫻でも眺めながら菊池君にまけぬやう心ゆくばかり山や溪をうたつ

て来たものである。

五月號

歌の選といふことは、實をいふと、かなり苦しい仕事である。殆んど目鼻のあいてゐないのが總數の先づ半分はある。少しづつ手を入れなどしてそれを採る。それから如何にかしたらいへん佳くなりさうに思はれるのが先づ三分はある。この種類の一番私は骨を折るので、一首の採否若しくは添削に三十分四十分間を費すことが少くない。苦しいが最も楽しみなのも亦たこれである。それから何の苦なしに○符の着けられるのが残りの二分であらう。それも新聞などの斷えず人の變つてゆく投稿を選むのなら樂なものだが、自分の雑誌のものを見るとなると、たとへどんな歌にしる、さう手軽にやられない。その人の名に馴れ、その人の詠みぶりも解つて来るやうになると、次第にさうなつて来る。ハ、ア、今月は斯んなのを詠んだナ、と思ふ時などにはその歌の風貌からまだ逢つたこともない作者の顔が原稿紙の上に浮き出て来るやうな感じがするのである。つまり原

稿紙に認められた歌を相手に獨りごとを言ひながら、月の半ばを暮してゐるやうなものである。

今度もそれをやりながら半分以上を見終つた時であつた。或日私は何とも言へぬ嚴肅な寒い感じにうたれたことがあつた。斯うやつて平氣で見つてゐるが、一體何のために自分にそれだけの資格があるのだらう、と考へ始めたのである。歌を作るといふことなら、いかにも自分は諸君に對して一日或は數年の長があるかも知れぬ。が、斯うしてむき／＼に生ひ育つて行きつゝある個々の生命力に對して、自分は一體どれだけのちからを以て臨み得るのか、と考へられ始めたのだ。

その日、どういふ人たちの歌を見てゐたか記憶もしないし、またそれらの人たちの生活をそれほど偉いと思つたわけでもなかつたが、何かの拍子でそれを通して自分自身のこと省みられたのであつた。さうして、つく／＼自分ながら濟まぬと思つた、わるいことをしてゐると思つた。何もせず、ふわふわと過してゐる自分の昨今が、事新しく呪はれてな

らなかつたのだ。自分は今まで全く野育ちのまゝで大きくなつて来た。あとさき構はず、思ふまゝの生活をして此處までやつて来た。が、もうそれは出来なくなつてゐる。さうした精力も盡きたのであらうが、第一さういふことを考へるだけでもいやなやうな頭になつて來てゐるのだ。自分はこれから自分で自分を育て、行くことを考へねばならぬと思ひ立つてゐる。何か事に會ふごとに、つく／＼さう思ひ續けてゐる。

これは、斯ういふところへ書くべき筋のものではないとも思ふが、最近これを痛感したのが右いふごとく本號の選歌の時であつたし、それ以來常にさういふ頭ですべての歌をも見て來たので、何はなく編輯便りに書き度かつたので、書きつけた。私が最近に書いた手紙だと思つて讀んで頂いてもいいし、どういふ氣持で私が歌を選むかを知つて貰ふよすがにして貰つてもいい。兎に角、それ以來諸君の歌を見るのに一層の親しみを感じたのは事實だ。諸君の方でも一層の自重を以て作歌に従つて貰へれば幸甚であ

る。

ほゞ見當もついたので、いはゆる優待といふことを少しやつてみた。せられた人には自然それだけの責任が加はつたことを自覺して頂き度い。

私の最も注意して見てゐる人たちの詠草をば先づ常に「岫雲抄」に入れて置くのだが、この人たちが案外に活躍して呉れないので、少々がっかりしてゐる形である。いまのうちからすまずことをせず、ぐい／＼突き進んでほしいものである。

質疑欄には殆んど原稿が來なかつた。來號には少しでも出させよう。尙ほ、今後諸君の日記を募つてみたいと思ふ。二十字詰四五十行の見當で書いてほしい。佳いのがあつたら少しづつ毎號でも出して行く。出さないものも、その人の手紙だとみて拜見したい。

私の歌を真似るのはよして下さい。丁度いま私は妙なところに立つてゐるので、從來の作風を續けるのには嫌いし、考へてゐる新しい境地の作風はまだ

満足に出来ないといふ場合だから、それを真似られたりなどしては誠に困る。先輩として私の歌が讀みたいといふのなら昨今のより『若山牧水集』あたりのを讀んで頂く事が無事だと思ひます。速く佳い歌を作り上げて、うんと自慢がしてみたいが、何といふことなく疲れてゐて、なか／＼出来ない。然し、靜かに／＼新しいちからが身内に生れて來つゝあるのを感じてゐる。用心して待つてゐて下さい。

川魚が、それこそ北はみちのく、西は筑紫のはてから集つた。實に見事なのがあつた。珍重しつゝ、親しい人にも分けたりなどして、いま尙ほ飽かずに頂いてゐる。誠に難有かつた。

腸も、その後ずつと用心してゐるので、大分よくなつた。矢張り時々酒を過すのがよくないらしいので、近來それをも大いに慎んでゐる。わざ／＼見舞の手紙など頂いて難有うございました。

十八日、殆んど突然（若しかすると來るかも知れぬとは思つてゐたが）郷里から老母が上京して來た。

孫娘（私にとつては姪）に助けられて、東京驛に降り

立つた白髪の老婆を見た時、實に異様に私の胸は波だつた。元來私は高等小學九歳の時からずつと他郷に出てゐたので、以來二十三年の間、殆んど故郷の家族と親しむことが出来なかつた。ことに東京に出て以來十二年間といふもの、二回か三回しか歸つてゐないので、而かもいろ／＼な不自由から遠くゐても盡さるべきことすら盡してゐないので、親に對してはいつも心苦しい思ひをのみしてゐたのだ。四五年前さうした憾みを抱きながら父を失つてからは一層その感が深かつた。そして、朝晩の鳥の啼聲にすら常に心をびくつかせられてゐたので、今度思ひがけなくその顔を見た時は、實に嬉しいとも悲しいともつかぬ烈しい感じが胸一杯にこみあげて來て、容易にはものも言へなかつた。

七十一歳にしては、それでも、幸ひに元氣である。暫くもちつとしてゐることの嫌ひな人で、來ると直ぐからやかましい孫（二人の孫にも嫁にも初對面であつた）の守をして居らるゝ。四百里近い日向の山

の中からはる／＼出て來たこの珍客を、どうして満足させやうかで、私はいま狼狽し切つてゐる。永い間、自分を棄て、顧みないこの不孝の兒に對しても、彼女はつゆ一つ愚痴を言はず、恨みを述べず、唯だ逢つたが嬉しいで、ほく／＼して居らるゝ。そして貧しい一家のもてなしに心底から満足して居らるゝやうである。何彼につけ、私には涙のみである。そして、これを機にずつとこちらに居らるゝやう勧めても、矢張り郷里のことも氣にかゝると云つて（郷里の若山家をば私は姪に譲つておいてあるので母は其處に起居して居らるゝのだ）近々のうちにまた遠く歸つて行かるゝのださうだ。これがまた今は氣がかりの一つとなつてゐる。

何にしても、嬉しかつた。

惜しいことに、母の來られた時には附近の櫻がもう大方散つてゐた。それでも、何といふ花の多い所だらうと言ひながら、とび／＼に咲いてゐる八重櫻を見て、驚いて居らるゝ。郷里には（前號にも書いたやうに）

たやうに）殆んど單瓣の山ざくらのみだから珍しがられるのも無理はないのだ。

ほんとに、もう櫻は散つてしまつた。櫻の若葉や、樺の若葉が、こまやかに日や風に光り乍らそよいでゐるのを見ると、まつたくもう初夏となつたのである。苗賣も街に出た。チャルメラの笛も其處此處の巷から聞え始めた。うす青いやうな麥藁帽子が見え出した。郊外にでも出てみたら、屹度もう國境の低い山脈の上にむくりとした靜かな雲が湧いてゐるに相違ないと思ふ。

大好きなこの若葉の季節に何事ぞ私には歌が無い。雑誌を始めれば自身に歌の出来なくなるのは私の癖ではあつたが、今度はまた別のやうだ。何だ彼だと、わけもなく疲れてゐるのかも知れぬ。然しさうしてほんやりしながら、それとなく考へてゐる事は、精氣横溢の時より却つていゝことを考へ得るやうに思ふ。私は寧ろ今のこの心よどみをわれながら嬉し

く眺めてゐるのである。

がや／＼とした周囲を冷かに眺めながら徐ろに自身歩を運ぶ味ひを私は今頃漸く知りそめた。考へてみれば従来は自分はそのがや／＼の中の小さな飛沫や塵であることを喜んでゐたらしい。自然これらの歌も本誌の編輯法も、さうした心境から出て行くことと思ふ。就中、斯の編輯法については諸君の同感を得たいと思ふのである。

大いに努めたが、どうもいかぬ。また二三日遅れさうだ。我慢して下さい。次號分投稿締切をもその割に延ませよう。

雨後の日光がやはらかな若葉のうへに照りそ、いで、風がさやかに流れてゐる。何だか初蟬でも鳴きさうな氣持だ。

六月號

十五日の朝六時すぎ、鐵道線路に沿うた小徑を朝

起きの靜かな心地で巢鴨橋の方へ私は歩いて行つた。昨日の夕方出る筈で出なかつた私等夫妻合著の歌集『白梅集』の最後の校正刷をとり、アテネ印刷所へ出かけたのである。橋を渡ると何だか其處等の様子がざわついてゐるのに氣がついた。そして肉屋と汁粉屋との間の路次を曲ると、一層の人だかりで、一面にあたりが濡れしとつてゐる。思はず胸をときめかすると同時にむく／＼と湧き立つた煙と白い尾を引いて上つてゐるポンプの水とが眼に入つた。さてはと思つて狼狽へながら見廻すと、それらしい屋根も扉もない。人だちをかき分けて近づいて見ると、矢張り其處が焼け落ちてゐたのである。しかも片軒一つ残さない程度に完全に我がアテネ印刷所は焼けて終つてゐたのである。

茫然として佇立したきり、私には全く兎角の心さへ起らなかつた。漸く家人の避難所を探ね出して行くには行つたが、喪心したやうな人たちの顔を見ると、何と言つていゝか、見舞の言葉すら能く出なかつた。混雜の中に永く居るのも如何かと思つたので、してあつたのだ。よし、時日や原稿のやりくりをば如何にかつけるとしても先づ困るのは經濟の方である。斯んな變事に備ふるだけのちからが私にはまだ出来てゐなかつた。

その日、次ぎの日、その次ぎの日、數日の間を私は全く空しい焦燥と無策との裡に過した。一つ二つ試みてみた善後策もみな失敗に終つた。そのうちに段々日はたつてゆく。いつそのこと六月だけ休刊しやうかとも考へた。が、折角無事に續いてゐるものを、たとひ一月でも穴をあけることがいかにも辛かつた。また、淋しがつた。

そして、どゞのつまり、間のつなぎとして六月號だけ、極く小さなものを作つて出して置かうと決心した。それから大急ぎでその様に運動して、新たに編輯もし直して出来たものが即ち本號である。

本號到着の日、どんなにか諸君の意外を買ふことと思ふが、前述の有様で、どうか悪しからず御寛恕を願ひたいものである。愚痴ではあるが、今月號はいろ／＼さいさきのいゝことがあつたので、私も非

私はまご／＼しながら直ぐ其處を立ち去つた。そして巢鴨橋を渡つて草深い線路の徑に足の濡るゝのを氣にしながら、ぼんやりと自宅に歸つて来た。あれほど靜かであつた數分前の心持と比べて、ほんとにどれだけの違ひであつたらう。一日前の十四日には私は二度も其處を訪ねて居る、一度は雑誌の用事で午前に、一度は歌集の用事で午後。それが僅か一夜の間に斯んなことにならうと、如何して考へることが出来るだらう。いま眼前に見て来て置きながら、どうしてもまだ私には眞實に信ぜられなかつた。

やがて眞先に頭に來たのは雑誌のことである。この印刷所は一切の組織が他と違つてゐた。第一主人が全く他のそれらの人々と違つた人で、私のこの貧弱な事業には特に心を寄せて呉れてゐた。「創作」が毎月無事に出てゐたのなども同氏に負ふところが蓋し少くなかつた。

その印刷所が焼けた。而かも十五日といへば來月一日發行のものにとつては日も迫つてゐる。現に私の雑誌も表紙其他原稿の初めの一部などをば既に渡

常に氣乗りがしていつになく選歌にも編輯にも手速く着手して、内容もまたそれにそふものにするつもりであつたのである。表紙をも今度から石版刷の少し派手なものに代へ度くその意を話して越前翠村君から幾枚も描いて貰ひ、そのなかゝら佳いのを選んで十一日か二日に印刷所の方へ廻して置いたのであつた。それらの事がみな灰になつてしまつたのである。こんな田舎に引越して來たのも一は印刷所に近くなるためであつた。そして諸事非常に楽しい氣に満たされてゐたのだが、忽ちにして夢となつてしまつた。少い時習字の手本で覺えて居る「樹靜かならむと欲して風止まず」などといふ文句が、苦笑の裡に思ひ出されたりした。

七月號は従前通りのものを出す。言ひ得べし、ば單に従前通りでなく今度の償ひをつけるだけのものを出したいと内心誓つてゐるのである。前の印刷所がそれ迄に復興して呉れ、ば一層難有いし、でないにしてもそれだけの準備を成し得る自信があるのである。これ一號に氣を痛ませない様に特にこの事を言

つて置く。

で、來月號分としては矢張りこの十日までに其後の新作を送つてほしい。焼けたのはずつと初めの方の一頁組や散文の部であつたので、大抵の人の歌稿は大部分無事に手許に残つてゐるはするが、出來るなら新しいものを送り足してほしいと思ふ。

和田露葉君の「徴兵検査のすむ頃」大村木馬君の「花吹雪」、藤澤傳君の「初夏日記」宮坂古梁君の「信州小諸に來れる島崎藤村氏」等日記文にはなか／＼面白いのがあつたが、みな焼けた。残念ではあつたが、またよろしく書き送つてほしいものである。(二十四字詰五十行内外)。質疑應答や「いろ／＼の人と歌」「特別課題の歌」等は頁の都合次號廻しとした。

私はいま非常にさびしい。木の葉のそよぎを眺めてゐる時でも、ぼんやりと麥畑の畦を歩いてゐる時でも、夜なかに眼がさめた時でも、今までに知らなかつた烈しい寂寥を感じる。

が、一面私は喜んでこの寂寥を迎へてゐる。漸次に私は意識的に自分の生活を見張つて行きつゝある

のかも知れない。

火事に就いて、諸新聞紙の報道により種々慰問して下された方々に遅ればせながら御禮申します。その當時、あまりくさくさした時など少々飲むには飲んだが、それほどではなかつたのです。自暴酒云々の記事は少しく仰山にすぎました。

八月號

矢張り、いけなかつた。何も彼も小生の不敏の致すところ、唯だ、御諒察を乞ふのみである。

従前通りのものにするつもりで夙うから濟ましておいた編輯を、とても駄目だと解つた日に、急にやり直して斯うしたものにしたため、無理に削つたもの、來號廻しにしたものなど、澤山あつた。散文では原田實君のもの、小生の物、歌では中村柊花、菊池野菊君等を初め山部仙次郎、阿部たつを、松井白花、杉本寛一、野上草夫、早川汀明、和田愁夢の諸君都合二十餘人あつた。本號所載の歌も十首を五首、九首を四首に削つて漸く收め得たのである。來號以下も或は暫くこれよりやゝ大きい程度のも

の位で續いて行くかも知れないと思ふ。それだけ眞面目な、眞剣なものになつて行く。その方が或は本誌を出す最初の念願であつたかも知れないと、いま考へられるのである。兎に角どんなことがあつても續けて行くには行く。廻響雜誌になるやうになつてゐる様な氣がして寂しくて仕様がなない。せめて周圍に良き同志伴侶を作り得るまでも續けて行く氣である。

亂雑な本號をば葉書代りにたゞ差し上げた様にも思つたが、巻末附記特價だけ申し受ける。本月分の餘分は順次に次ぎへ繰下げる。斯う雜誌が小さくなつたりなどしては不満足な人も定めし多いことと思ふ。もつともその事と思ふ。強ひて引留める勇氣が小生自身にもないので、その事は遠慮なく御自由に願ひ度い。唯だ、其旨通知だけはつきりと出して下さい。

來號分原稿は十二日に締切る。來號廻しになつた人たちも出來たなら新しいのを送り足して欲しい。

暑いと云つても、もう秋だ。充分に力を籠めて作つて貰ひ度い。誌面こそ小さけれ、本號所載の歌にもなか／＼佳いのがある。なほざりではなく讀んで頂き度い。家貧にして孝子出で、雜誌不景氣にして名人の現はれむ事を待つものである。

小生等夫妻合著の歌集「白梅集」が本號と同時頃抒情詩社から出る。小生のは一種の過渡期で（それだけ自身には意味深い集である）あるが、妻のは三浦半島時代に夢中になつて詠んでゐたものなので寧ろその方に佳いのが多いかと思つてゐる。尙ほ小生は本月中に秩序立つた歌の作法書を書き上げて春陽堂から出版する筈であつたが、暑さにまけて出来上らなかつた。それが出来上つて居れば本號の頁數ももつと増せたのであつた。

暑さに萎えながら小生はこの夏日を愛で讀へてゐる。歌も割合に出来て、八月號の「新潮」「中央公論」「文章世界」その他へ二十首位あづつ出して置いた。歌さへ出来て呉れ、ば自分はもう本望である。どうかして何のわづらひも無く一心になつて詠み耽つて

あたいものであるがなか／＼さう行かない。

歡びにまれ、悲しみにまれ、自分の前に來ては去りゆく「時」の姿を小生はありがたいものに仰いでゐるのである。一家幸に健在、諸君のまた然らむことを願ふ。（七月二十五日）

九月號

もう一月、無言の月を送る。但し、初めから大體の豫定をおいて編輯したので本號には先づ實質上收め得らるゝだけの歌をば收めて置いた。惜しいのを削つたとか來月廻しにしたとかいふのは先づ無かつたと謂つていゝ。唯だ、頁數の薄いのと散文の無いのとが淋しいが、これだけ我慢を願ひ度い。散文の無い代り、それを憾み償はうとする私のこゝろは本號どの頁にも隠れて動いてゐるつもりである。また、斯んな愚痴も、さう永くは繰返さぬつもりである。

新しい人は何故出ないのか。随分私はそれを待つてゐる。西堀花汀君もいゝ。河脇萍花君もいゝ。唯だ未だ力が足りない。河脇君には幾らか苦勞性の苦いところが出てゐるが、要するに稀薄なものである。

自分自身に對しても、歌といふものに對しても、その後常に或る淡いあきらめがつ附いてゐる様である。西堀君のは極めて明るい氣持のいゝものであるが、唯だ其處だけで止つてゐるといふことは餘りに安易である。小田一二君の尻もまだ一向に据つてゐない。山口濱雄君の作がいかにも器用で、且つ讀んで面白くもあるが、いかにも品がない。つまり力が無い。世間嘲風の愚痴を思はするものが多い。曰く誰、曰く彼、みなそれ／＼に何か持つてゐる様ではあるが、みな小さい。若しくは淡い。其處に行くと末の郎子君潮みどり女史などは、兎に角いくらか他より優れてゐるのを思はざるを得ぬ。郎子君にも腹一杯に呼吸をしてゐない様な心細さが常に伴つてゐる。河脇君と何處か似てゐるが、彼より型がやゝ小さく、そしてきめが細かい。みどりさんではその氣取つた様な感じかたや言ひ廻し（自分ではさう思はずにゐるかも知れないが）がいつでも歌を軽くさせてゐる。もう少し生一本であつてほしい。女の人で他に高橋葉子さん北町しなさんのあるのは心強

い。

要するにみなまだうは、空で歌を作つてゐる様である。それ／＼眞剣だと考へてはゐるであらうが、それは色眼鏡のそれで、まだ幾重もの殻を剥がねば眞實の光は出ては來ぬ。而してめい／＼違つた自分の芽をば出してゐるのである。斯うした、またるかしい時間が、一體いつまで續かうとするのであらうか。

私は「北國紀行」に書いた通り、今月の三日から二週間ほど旅をして來た。夏の旅は辛いのと面白いのと半分々々位のものであるが、それでも自宅でぼんやりしてゐるよりどれだけいゝか解らない。それに今度の旅は短い間にいゝ／＼の所を通つて來た。溪谷では奥羽線の赤岩から板谷峠を越す間のそれ、及び信越線の二本木あたりから柏原に到る迄のそれ、河では最上川を下つて信濃川を溯つた事になつて居り、海では酒田から新潟までの碧い／＼上を渡つて來、山では何れも遠望ではあつたが出羽の三山、及び鳥海山（これは海上からの眺めがよかつた）

信州に入つては見まいとしても其處等の名山高嶽が眼に満ちて来る。その他平原に高原に、晴に、雨に、誠に都合よく續いて呉れた。

歌が、たゞ一首も出来なかつた。この頃私の歌は非常に静かな、つねに眼を瞑ぢたやうな境地に赴かうとしてゐる。ところが通りすがりに見て過ぐる山や河はどうしても天然そのまゝの荒々しい姿を即興の上に強ひる。それが、私にはつらかつた。山を仰いで、さうして右いふ静かな境地に臨むだけの餘裕が私に出来てゐなかつたのである。で、手帳には上の句だけだの下句の半分だのといふ様な未成品ばかり書きつけられたまゝ残つてゐる。心に残つてゐる山や河を眼目裡に思ひ浮べて、これから暫くまた追想の旅客とならうと思つてゐる。とにかく來號には多少なりいはゆる旅の歌が發表出来るかと思ふ。

偶然さきからさきと辿ることになつたので、酒田地方にも新潟地方にもまた信州地方にも、それらゝ社友のあることを知りながら黙つて通りすぎねばならぬことになつてしまつた。この事は深くお詫び申

しあげる。

旅から歸つて来ると、お定りの如く三四日寝てしまつた。漸く起き上つて選歌に着手すると、もう日が無い。自然本號はまた二三日の遅刊を見ることになつた。これも謹んでお詫びする。

私が旅に出た夜に『白梅集』が出来たのであつた相だ。歸つて来た夜、積んであるそれを見た時は嬉しかつた。體裁なども定價に合せては氣の利いたものである。本集に收めた私の歌はその時々恐しく評判の悪いものであつたが、矢張り自分では、微笑をもつてそれに答ふるほかはない。缺點はあらうが、要するに善き経過の一つであつたと思つてゐる。

今度私の方でこの本を取次販賣する事になつた。本社々友には定價の二割引(郵税共六十六錢)でお送りする。精々御註文乃至御紹介を願ひ度いものである。希望では私共夫妻の歌を卷首なり卷末なりに書きつけてあげてもいい、但しこの方の定價割引は御免蒙りたい。

本誌最初より(即ち本年二月)半ヶ年分拂込の人

は、この八月(七月で終るべきだが一回休刊のため)

で金が切れてゐる。(八月號の殘額十五錢を別にして)。その他にも今月で切れてゐる人が偶然に澤山ある。御手数數でも早速拂ひ込んで欲しいと思ふ。毎月分納も結構だし、御希望では集金郵便をさしあげても宜しい。兎に角、至急にお願ひします。今號も持價だがそれはたゞ店頭の一冊賣だけの事にして、月ぎめの人には普通通りにして頂き度いと思ひます。

愈々秋となつた。朝夕など、若しくは日の光雲の影など、舊友に出會つた様な心地である。やがて木犀も咲くであらう。九月十六日(第三日曜)正午過ぎに私の家に集つて雨なら其儘雑談會にし、天氣だつたらぶらぶら中野あたりに散歩したいとおもふ。會費雨ならば十錢天氣ならば一圓といふ事にしておく、別に通知を出さないから忘れずに出席して下さい。私の家は市内電車の大塚終點で下車、其處で天神山の天神様はと訊き、その小さな社の直ぐ下が大日本弓術會といふ大弓場で、その直ぐ下の桐の木立の蔭です。巢鴨と云つても巢鴨行の電車に乗ると大變

に迷ひます。

十月號

いよいよ秋もなかばになつた。これから約一ヶ月の間晴れてさへ呉れ、ば誠に申し分のない時季である。秋をよるこぶ心は春や夏を歡び迎ふる心に較べて餘程の複雑を持つてゐるかと思ふ。そして一生のうち、ほんの幾つも所有するものでないこの一時季に對して私たちは出来るだけ鋭敏であつていゝと思ふ。

いつになく好い心持で私は本號の編輯を執つた。とりわけて佳いといふ作は見當らなかつたが、何處となく或る新鮮が感ぜられた。不斷の時の流れのなかに萌して来る新しい芽生の豫感、さういふものが感ぜられた。そして私は編輯の後に感じたいつになく敬虔な心持をみづから信じて、この豫感の決して空なものではないのを思ふのである。

よそ目をしてほしくない、たとへ充分に周囲は見えずとも自分の心を嘯みしめ、いつしんに自分の

道を辿つてほしい。自分を包む時が刻一刻と来り而して過ぎ去る事を痛感して、そして暫くもぐずぐずしてゐてほしくない。斯くしてかすかなりとも眞實の自分といふものが見え出したら初めて其處にその人の歌の芽は吹くのである。類型的の歌を棄てよ、陳列品の歌を棄てよ、これは誠にわが歌なりと抱きいつくしむに足る歌のみを作つて自分の歌なりとせよ、義眼式の歌は世既にその多きに倦み果てゝゐるのである。

編輯者は先號たいへんな失策をした、投稿歌の一部をとんでもない所へしまひ忘れて選中に加へなかつた事である。ために、初號以來初めて没書の厄に會つたが何處がわるかつたかといふ様な數通の手紙に接して大いに恐縮した。謹んで疎漏をお詫びする次第である。本號にはその種のこと無し。唯だ、お預りにしたのはかなりある。これはみなその人のためにしたのである事を言つておく。

新秋に際してぼつ／＼と新しい同志の増してゆく

ことを歡ぶ。復活後創作社の地盤も幾らかづつ固まつて来た様だから、これからは自然落ちついて仕事に當る事が出来るかと思ふ。發刊當初にはどうしても無理があつた。そのためこの三四月間には眼に見えぬ動搖があつたがそれも既に過ぎ、いま漸く眞實の建設期に入りつゝある様である。諸君にも自重を祈り、洗練された一結社として靜かに歩みを運びたいものと思ふ。

繪畫の展覽會などが切りに開かれてこの市街の秋も次第に深みつゝある。山邊海邊、みなさうだと思ふ。昨秋私は近代藝術社の主催で踏路社の人々の演ずるウエデキンドの「春の目ざめ」を藝術俱樂部に見て来た。華やかな様で極めて憂鬱なこの芝居にひどく昂奮して場外に出るといつのまにかまた細い雨が降つてゐた。十二時過ぎ、終點で電車を棄て、歩き出すと四邊の木葉に注ぐ雨聲の蔭に登み入つて居る蟲の聲が何ともいへず身にしみた。(九月二十五

日)

十一月號

本號も快く編輯を終つた。詠草の掲載法を變へて見ようと思つたため、選了後の投稿全部を某君と共に清書したりなど、病後の身としては割合に活動した。

右改正の掲載法によると、随分澤山の歌を收容する事が出来るので嬉しい。紙面を増す事が未だ出来ないで出来るだけ斯うして内容をつめて行かうと思ふ。克明に勘定してみればこの小冊子にも随分豊富な容積を持つてゐるわけである。これは他の雜誌と比べてもさう劣らないと思ふ。出来上つてみれば體裁の事が氣にかゝるが、却つて三段に組むのなどよりいゝかも知れない。

精選した。どの詠草の中にも耐へ難いといふ醜作は混つてゐないつもりだ。みなお互ひに精讀して欲しい。大體に或る步調が付いて来た様だが、覺めたる者は尙ほ曉天の星である。覺めよ夙く覺めよと思ふ。

これは皮肉かも知れないが、或る退社した人の手

紙に、「創作」は餘りに高級すぎて自分等の居るべき所でないと思ふから云々とあつたのを見た。高級：は困る。高級どころか、私はほんの初一步からの歩みに就いて常に語つてゐるのである。要するにまだ私の誠意が通じないのであると思つたが、然し、解して呉れる人は大抵解して居ると思ふ。

本號には「わが愛讀書」といふ題で齋藤茂吉君と佐藤綠葉君とに書いて貰ふつもりであつたのであつたが、齋藤君は箱根に佐藤君は上州に、何れも締切間際になつて旅行してしまつたので、駄目であつた。來號には是非頼むつもりである。どうしてか我等の仲間には本を讀まなくて困る。術藝だの人生だのと云つても、ほんの自分の眼の前の事だけしか知らない傾きがある。今少し内面的に深く識るには、讀書が何よりである。その讀書慾を誘つて貰ふためにこの事を企てたのである。暫く毎號斯うして續けて行く。今一つ、茅野昌柄君の感想が今號に来る筈であつたのだが怠けたかして來なかつた。杓子定木式な、概

念のみの評論の流行る昨今に同君のものは稀らしく
内的な、主観の強いものである、私共も教へらるゝ
所が誠に多い。

今月は感心に私にも歌が出来た。病気で寝てゐた
せぬかも知れない。旅中の作をば矢張り推敲が出来
ず、いろ／＼に苦勞した末、大抵もとの旅手帳のまゝ
に後戻りしたのが多い。多くは描述的な、奥のない
ものばかりだが、枯木も山の賑、きちんと頁にはま
る様に並べておいた。元來あの旅行が偶発的な落ち
つかぬものであつたのだから止むを得ないとも考へ
てゐる。「ひとり言」にも書いておいた様に、本氣に
なつて自然に、天然に對ふといふ時は誠に少いもの
だ。初歩からやり返すつもりで、私はまた自然を
見て行かうと思ふ。斯う考へ始めた事は、今月に於
ける私の覺醒の一つであつた。

それからもう一つ、これはそれよりもつと大き
な事であつた。自分の生活法を先づ外部からでも改
めてかゝらうと心から考へ始めた事だ。目に見えた
精力浪費を、今まで随分やつて來た。それも多きは

一種の惰性からやつてゐた事で、さうしたことにそ
れほどの興味を持つてやつてゐたわけでもないので
あつた。誠に愚かなことである。それに氣のついた
のは昨日や今日のことでも無いのであつたがいつも心
の中に於てすら形をなさぬ間に消えてしまふことが
多かつた、それが今度は兎に角心でだけははつきり
と覺悟し得たのである。これが果して確實に實行の
上に現はれるかどうかはまだ疑問であるが、斯うい
ふことを口外し得るだけでもいゝ氣持である。若山
も年が行つたなア」と或る一人の友は言つて笑つた。
私も笑つた。好い意味にこれをとつたからである。

(中略)

三十日夜の暴風雨は随分ひどかつた。幸ひ私の家
は鐵道の堤と天神さまの杜とのために障へられて大
變助かつた。たゞ丹青した庭の秋草が痛快にやられ
た。越えて今月一日の夜に酒を飲み過ぎ二日夜から
熱が出て寢込んだので、いまだに手も入れず、荒れ
たまゝに捨て、ある。諸所から見舞の手紙を頂いた
事を感謝する。諸君の方でもそれ／＼酷どかつた事

と思ふ。神澤理一君は何でも半日位疊と一緒に水
の上に乗っていたらしい。朔日に出來る筈であつた前
號は工場に浸水して四日朝出來て來た。直ぐ發送し
たのであつたが、所によるとつと遅れて届いたら
しい。今號は編輯はよく行つたのだが、或る事情か
らまた一寸發行が遅れるかも知れぬ。經濟上ひと月
分の餘裕が出來れば斯んなことにもならぬのだが、
いま一二箇月の内にはどうかしてこれを補充する積
りである。然し現在の情態をも私は少しも悲觀して
居らぬ。前よりは餘程よくなつてゐるし、どうにか
やつて行けぬ事はないといふ信念を得て來たから
だ。

私は二日から十六七日まで珍しく床に就いてゐ
た。そして何でも七八年ぶりに酒といふものを一寸
絶つてゐる。今二週間もすれば撤廢する事が出來る
と思ふ。遠國から出て來た人たちにはこのため随分
心苦しい思ひをした。けふもけふとて朝鮮の藤村君
が名産の杏酒と高麗燒の銚子など持つて來てくれ
た。空しく眺めてゐる。

他の雜誌でも大分困つてる様だが、その割にはこ
ちらは成績のいゝ方らしいが前金切がかなり溜つて
來た。思ひ立つて拂ひ込んでほしい。今後、その月
で前金の切れる人には雜誌の包紙に前金切と書き、
それでもまだの時、次ぎの號へは乞拂込と書くこと
にする。出來るならそれ無しに各自に注意してほし
い。尙ほ久しく言はなかつたが、新同志募集の爲に
亦新しい努力を拂つて頂ければ幸である。

九月の半分と十月の全體とは今年はまるで雨と曇
であつた。今年は秋らしい秋を知らずに過す事と思
つたが、一昨日から少し晴れかけた。晴れて呉れ、晴
れて呉れ！(十月二十四日)

十二月號

創作詠草に於ける配列順には何等の意味はない。
唯だわけなく並べて行つたのだ。第一詠草(本號十
一頁より十六頁)と第二詠草(二十頁より三十一頁)
の間には一寸相違があるかも知れぬ。第一詠草と八
頁十一頁間の歌の間にはこれから興味ある競争があ
ることと思ふ。

佐藤君と茅野君との散文を載せることが出来た。偶然にも茅野君の方の殆んど愛讀書觀風のものであつた。何々を讀んだとか讀んであるとかいふ話は話だけでも私どもの寂しい心をそゝる。何となくよごれた心の洗はるゝのを感じる。どうかして我々も一日のうちの幾時間かを讀書のために費したいものである。齋藤茂吉君からはわざ／＼葉書で今月も忙しいからといふ斷りであつた。頂けたら來月號にはと思つてゐる。

「前號では……」が案外に集らなかつた。集つたゞけでも十人十色、なか／＼面白い現象を見せて居る。然し大抵見る所は同じのものである。該欄で私の願ふのは第一第二あたりの詠草の中から隠れたのを見附け出してほしいことであるのだ。大概間違はぬつもりだが、私も數のこととどうしたはずみでか佳いを見落すことが無いとも限らぬ、それを他によつて探し出して貰ひ度いと云ふのだ。

詠草欄の一首一行の組み方も案外に綺麗であつた。これで行けば他の普通の雜誌の約二頁半分が一

頁で済むわけになつてゐる。多少窮屈だが、玉は玉、何處に在つても光をば失ふまい。尙ほこれによつてよく地方などで（地方とも限らないが）行はれてゐる活字の濫用（と云ふか活字の遊戯といふか、だらしもなく大きく組んで嬉しがつてゐる）から脱し得る便利もあると思ふ。それだけまた一頁組などになつてゐる人たちには責任が自覺されねばならぬことになる。目立つから、どうしても然うなる。緊張せよ、すべて緊張せよと思ふ。

私の「ひとり言」をば今月は休んだ。「和歌評釋」の中には随分毒舌を飛ばすことがある。私はよく調子に乗る癖があつてツイあゝなるのだが、讀む人の方ではそのつもりで適度に割引して讀んでほしい。誌上掲載を見合せ批評して返して呉れといふ詠草がかなり多かつた。そして、掲載と返送と兩方やつてくれといふ申出も幾つかあつた。閑なやうで何か彼か私ともいは非常に忙しい。で、何か切り離れた仕事としてゞもなくしてはそれに着手出來兼ねると思つたので添削部といふものを別に設けることにし

た。五十頁にその規約を書いておいたから就いて見て頂きたい。この事は幾度も今まで失敗して來た事なのだが、今度こそはやり遂ぐる考へである。

それから、これも多くの希望から柄にもない振替貯金に加入することになつた。口座番號は東京三九〇〇三番である。覺えいゝ番號だ。成程これがあれば便利である。すべての金の拂込は出来るだけこれに據つて欲しい。その時は振替料金として一圓までは一錢、五圓までは二錢を忘れないで加算して拂込んで頂きたい。金の話のついでだが、「創作」誌代と創作社々費とを混同してゐる人が随分ある。これは必ず別にしてほしい。振替口座でもう一つ特に言つておきたいのは、番號は右云つた東京三九〇〇三番だが、加入者名は若山牧水でも創作社でもなく若山繁といふ村役場の戸籍帳に載つてゐる名であることだ。自分でも何だか耳遠く聞える様なので他では特にさうだらうと思ふ。必ず間違はない様に頼む。間違ふとこちらには届かないさうである。

私は先月末の續きで今でもどうも身體が思はしく

ないが、先日珍しく長雨の晴れた時、ふいと思ひ立つて晝過ぎに家を出て數日間近所を歩いて來た。一晩泊り位ゐるつもりが段々深入りして、とう／＼秩父の方まで入り込んで行つた。そしてまた風邪を引き込んで歸つて來た。今號の編輯は殆んど寢ながらの仕事である。秩父の溪と黄葉は實に意想外であつた。だんだん奥に行けば行くほど好くなる溪を見すと、歸つて來るのはほんとにつらかつた。幸ひにその間よく晴れて呉れた。歌も出來た。文章世界の新年號分として百首だけ書き抜いて送つておいた。就いて見てほしい。

歌が出來さうだ。拙いものらしいが、出來る時には出來るだけ作つておきたいと思ふ。いつまで斯うして未成品時代を彷徨してゐることかと思ふと流石に苦しくなるが、まだ、いゝ。あまり苦しく考へないで、心のまゝに振舞はうと思ふ。ひとは何と言はうとも私は年一年と自分の作のよくなつて來てゐることを信じてゐる。たゞ、いまだに腹一杯呼吸が出來ないのを悲しむのみである。佗しいこと、寂しいこ

と、苦しいこと、考へれば考へるほど、年一年と自分の身に湧いて来る。その間に在つて私は唯だ歌を頼んで居る。そして、どうかして自分の歌を欺くことだけはしたくないと思つてゐる。あゝ、ほんとに高明正大な歌が作りたい。

(中略)

今月はどうしたものか大分不足税を取られた。返附するといふ事になつてゐるけれど流石に返しにくい。大膽な人は開封の中に爲替券や切手やを入れてよこす人がある。これも違法であり、危険である。僅かの注意で済む事だからお互ひにいやな思ひをしたくないものである。お辭儀をするのもきまりが悪い位のだが、私はまた澤山な手紙の負債を負つてゐる。どうかこの雑誌を一面私の手紙だと思つて見て頂き度い。

いつの間にか今年もおしまひになつてしまつた。若し社會といふものを外にしたらこの十二月などは私の好きな月である。たゞ周囲がざわ／＼して來るのが不快だ。落葉の中にも日向ぼっこして峰の雪

など仰いでゐたら嘸ぞかしい、氣持だらうと思ふ。兎に角今年も此處に終る。我等の第一年が濟んで第二年に移ることになる。改めて諸君が本年の勞を謝し、來年の健在を祝福するものである。(十一月二十四日)

ならず、心中焦燥甚し。然し、決して無意味には苦しまぬつもりなり。小生案外に執念深し。へまをすればするだけ、それを償ふ何かを爲さむとす。乞ふ小生を信ぜられよ。二月四日午前六時創作社に於て)

三月號

當用のみ書きつけます。

長野でやつて見たが面白く行かず、この分ではまた三月號も休刊かと悲觀してゐたが、幸ひこの印刷所に依頼することが出來て甚だしき遅刊ながら、また編輯も不充ながら本號を發行する事が出來ました。

二月號が豫定より遅れて出來たので三月號分締切といふのをすつかり諦めた人が多かつたらしく新しい投稿が甚だ少なかつた。舊い分を加へようと思つたが何しろ斯うごた／＼はじめて三四ヶ月経つてゐるのでその間に寄つた原稿は非常に混雜してゐて一寸手がつけれなかつた。で、止むなく本號は新しく集つた分だけで編輯することにしました。二

大正九年

二月號

■一月號を休刊し、本號より普通號になす豫定なりに、印刷所の不都合のため、急に編輯をしなければ、再びこの體裁のものを作り、間のツナギとして發行す。

■今度は遠く信州長野市に於て印刷す。

■來號よりは是非常態に復せんと欲す。

■來號分原稿として今月十五日迄に詠草送附ありたし。來々號を倍大號となす希望を有すれど詳細は其時ならでは自分ながら發表し難し。

■一月號は休刊なれば、社費またそれに準ず。即ち十一月、一月と二ヶ月分を差引き、尙ほ未納の人は此際至急拂込まれん事を希望す。

■實は今日、小生長野市まで赴く筈なりしも運悪しく、身體の具合悪く、友人に代つて行つて貰ふ事となり、極めに匆忙の間に本便を認む。萬事意の如く

月十五日頃から今月十日までに集つた分をば全部入れました。中に四月號分として送られたのをこの中に入れたのがあります。四月分をばまた新たに送つて下さい。それから四月分はどう遅くとも四月五日までには送つて下さい。と云ふうちにも一日でも早いのがよい、寄つた分から選をして行きたいと思ひますから。四月からは確實に足なみを立て直しますから安心して右様お送り下さい。今度の印刷所は開業後まだ間がないので六號活字などが揃はず、それに本誌印刷は最初の事で組み違へもあり、多少不體裁だが來號よりはよくなります。

それから四月分より社費定價共に五錢つつ引上げました。今まで極力こらへてゐたのですが、止むを得なくなりました。休刊が續いたりして社費未納も多いので取りあへずこの三月分まで(二月休刊分を差引いて)の集金郵便を差出しますから拂込み下さい。(若しその場合都合の悪かつた人はいつまでに送る旨忘れず至急御通知下さい。)そして四月分より改正額により改めて前納拂込を願ひます。毎月分

納の方を寧ろ喜びます。(既に舊規定により拂込濟の人はその盡きるまではそのまゝで差支へありません)尚ほ今度から普通社友を甲種と呼び、他に乙種社友といふのを設けました。これは從來あつた維持社友の様なもので、別に特典とてもないが唯だ送られた詠草に毎回簡單な批評を附して返送する事にします。財政にそれだけの餘裕のある人はこちらに入つて下さい。印刷費と紙代と、二年ほど前に比べて終に完全に十倍になりました。しかも斯んな小雑誌を作るために右に云ふ十倍事件以外に尚ほ今まで知らなかつた複雑した苦勞が入る様になりました。全く恐しい世の中になりました。

雑誌が斯うごたつてゐたに係らず靜かに我慢して頂いた事に對し深い感謝を覺えます。破れ易い私の心はこのために漸く無事を保ちました。今後はこの苦しみからお互に離れ得ると信じます。(三月十七日)

四月號

申譯が誠に爲にくい。どうか、それをば暫く聞か

ずにおいて下さい。悉く恐縮もし、困惑もして居るのです。それこれが嵩じて此頃では何だか少しボカシとしてゐる形です。

でも、本號には久しぶりに仲間の顔の大半を並ぶることが出来ました。あまり並べ甲斐のある様にも思はれないけれどその幾分の罪は雜誌にもあることと思ひますので悪口をば控へます。唯だ末の郎子君が病中(と云つても大分いゝ相です)にも拘らず獨特の張りの強い調子を聞かせて呉れたは難有い。上園君の形はよく整つてゐるが總體としてかん／＼に載する時には案外にも軽いものであるかも知れない。近來この形ばかりの弱々しい歌がかなり流行つて來たのは寒心すべきことだと思ひます。山下君のが元來また形の——材料やそれに對する感傷の方法等——勝つたものであつたが、今號のには何處となく落ちつきが出来て割にしみ／＼讀むことが出來た。河脇君はいま何處か知ら歩き廻つてゐる様にもおもはれる。潮みどり子女は大分おすましの様に見受けられた。大村君一流の詠みぶりに何か知ら力の這入

つて來たのは喜ばしい。が、私の注意はより多く小豆澤三橋君たちの一團に向けて注がれてゐる様だ。願はくば自ら自分の器を更／＼大きく高くする様にと念じて頂き度い。自惚は自殺だが、自信自重は自己の眼界を廣くするものである事を知つてほしい。次號(五月號)の締切五月三十日とします。本號には四月二十日までに届いた分は重複したのも皆收めてあるので、中には五月號指定のも入つてゐる。それもさうでない人も新作のある人は重ねてまた右まで送つて下さい。雑誌を心細がる心を各自の作歌の上にはどうか移さずに下さい。お願ひします。と同時に雑誌の事をも餘り心配せずに下さい。永い間三ヶ月や五ヶ月はさう問題にせずともいゝと思ひます。今年になつて我等は社友の過半を失ひました。中には恐しい毒舌を吐いて出て行つた人もあります。その度びごとく苦笑しながら一々もつともだと思ひました。そしてそれと同時に正直のところ私はその人たちに對し何だか氣の毒さを感じないわけにも行きませんでした。眼前の事で動く人は恐らく一生それ

で動いてゐるでせう。腰を抜かしてしまふのも困るが、少し落ち着く必要がある。ことに作歌の上ではさうだと思ひます。さういふ私自身、常に落ち着き得ないのを嘆いてゐるのですが、腰を抜かすには少し娑婆氣が強すぎる様です。いよ／＼抜かすまでは私の歌も雑誌も大丈夫のものを見て置いて下さい。私はこの足かけ三年間に詠んだ歌を持つて明日から上州の山奥の温泉に行つて來ます。そして一冊の集に纏めて來ます。近來ひどく頭を悪くしてゐるので果してうまく行くか怪しいが多分出來ませう。

六七月(合併)號

また、斯う遅れました。

いろ／＼考へた結果、いよ／＼覺悟をきめて私は今度本誌の發行經營から身を引く事にしました。然し、選歌、編輯は従前通り全部私の手でやります。唯だ、帳簿金錢の整理、印刷所との交渉、雜誌發送販賣等すべて事務局の爲事を一切他に委託する事にしたのです。

その事務的の爲事、即ち發行經營をば本社々友で

且つ私共の縁の弟に當る長谷川銀作君に一任する事にしました。同君はゆく／＼出版業に入らむとする希望を持つてゐますし、彼が妻潮みどり子は以前私共の宅にゐました時、この帳簿の事などをばすつかり彼女に頼んでありましたのでそれらの事務に對する手心も解つて居り、且つ二人ともさう云つた方面の事に相當の興味と手腕とを持つてゐると思ひます。唯だ、厄介でもこの際骨を折つて貰ふ事にしたので、唯だ、家庭の事情から暫く横濱の家を離れる事が出來ませんので、本誌も横濱から發行される事になります。それはたゞ名目上のことだけで、どちらでもいゝ事と思ひます。

さういふ風に本誌の發行を他に託してしまつておいて、私共一家は近々のうち東京を退きます。まだよく解りませんが、多分静岡縣沼津町の在に引越す事になりませう。そして其處で毎日幾時間かの爲事として本誌の選歌その他に従事するのです。この東京引退は夙うから考へてゐた事で、どうかして早く實行したいと思つてゐましたが唯だ本誌の經營に引か

れてまごついてゐたのです。今度それを實現する事は、一面少なからず心細いと共に、漸く自分の本然の生活法に入る事が出來ると思つて喜んでゐます。少くとも五年か十年、出來れば一生あちらで暮すつもりです。そして自分のうちにある力といふ力を充分に試してみる覺悟です。要するに私は群集の中で生活し得る人間では無かつたのです。その癖さういふ方面に對する愛着をも充分に感じて居るといふ二つの性癖を合せ持つてゐたために今まで随分な精力浪費をやつて來ました。今度いよ／＼その一つの道を選んで孤獨な靜かな朝夕を送ることになれば、これからでもまだ充分今迄の償ひを爲し得ると信じます。謂はゞ一種の都落ちに似た今度の私の東京引退は一種の背水の陣です。

斯ういふ風にする事が本誌のためにどれだけいかといふ事は諸君の方で充分理解して下さる事と思ひます。夙うに斯うあらねばならなかつたのですが、機が熟さなかつたのです。これは一つは長谷川君のおかげなのです。

で、今月から一切の改革を行はうと思ひましたが、時間がありませんでした。

取りあへず以上の事だけお知らせしておいて來號から改めて新發行者の手によつて發行される事になります。それまでに從來の帳簿の整理を行ひたいと思ひますから滞納の人は至急お拂込み下さい。尚ほ御存じの通り雑誌の發行が不確實であつたため、此際社費を二箇月分だけ(何月分といふ事なく)差引く事にします。發送の際包紙に捺してある前金切の金額は右二箇月分を差引いてのそれですから左様御承知下さい。拂込はすべて從來通り創作社の振替宛て拂込み下さい。兎に角これからはもう今までの様な危つかしい經營ではなくなります。従つて内容もすつと落着いて來る事と思ひます。

來號分原稿は矢張り今日のままの番地で創作社宛に出して下さい。締切をゆつくりにしておきましたから怠けずに皆して出して下さい。

何だ彼だと、近來私は歌すらもよう作らずにゐます。唯だ、雑誌が斯んなものにも係らず、歌に對す

る諸君の意氣の旺んのを感謝してゐます。本號の詠草の一部及び『夏の光』などの中には實に佳いがある。熟讀を希望します。

今年の夏は別して暑い様だ。御自愛を祈ります。

(七月十六日)

十月 號

創作社々友諸君、私は先月の十五日に東京を引拂つて静岡縣沼津町の在に移りました。非常に惶しい事で、その十五日といふ日などをば僅かにその四日ほど前になつて確定し、發表したのです。さうしないとまたまご／＼してゐるうちにはこの企てに變化が出来さうにも思はれたからでした。でも、その惶しいなかに我が社友たちはその出立の前夜、盛んな送別會を開いて呉れました。出席者は四十人を超え、千葉栃木縣あたりから出て来て呉れた人もありました。會の果てた後、なかの數人はもう電車の無くなつた街を自動車で巢鴨の私の宅まで送つて呉れ、そして家中にも包みの積み上げられた間々に挟まつて着のみ着のまゝで轉がつて夜を明しました。十五日

には東京驛に廿八人ほど、品川まで四人、大森まで二人、横濱まで六人といふ様に遙々見送つて呉れました。そして目的の沼津驛に着きますと其處には土地唯一の社友が家族の人と共に迎へに出てゐて呉れ、萬事手落なく取計らつて貰ふ事が出来ました。ほんといふ何と云つていゝか、涙の出る様な思ひばかりを續けて居りました。

その夜は宿屋に十六日にいまの家に引移りました。なんだか一生の大變動に會つた様な氣で、私は全くぼんやりしてのみ居りました。妻の方が却つてしつかりしてゐて、荷物の片附や大工の差圖など殆んど彼女一人でやつて呉れました。意氣地なしの私にはそのぼんやりから抜け出すまでに随分永い時間がかゝつて、この十日ほど前から漸く幾らか落ちついて自分の部屋にも坐れる様になりました。

そんな風で自分にもまだ何も書けず、詠草も一向に集らず、何だか氣乗がしないので本誌の編輯にもよう着手しませんでした。辛うじて去る廿三日にそれを終り、原稿を持つて上京して來ました。途中

で横濱に長谷川君を訪ねて一緒に印刷所にも行つたのでしたが、非常に爲事がこんでゐてなか／＼急には出來さうにありませんでした。せめて今度のだけでも自身で校正を見てゆきたいものといふまでも待つて見ましたが、例の國勢調査日には歸らないと困るだらうと思ふので思ひ切つて明日は歸ります。

今號からと思つてゐた誌上の充實をももう一號だけ延ばす事を許して下さい。

來號からは確かにうまく参りませう。詠草をもどし／＼よこして下さい。とに角今までに來てゐた詠草の全部をば何月號分といふことなしにみなこの中に納めておきました。あとは新たに送つて下さい。

沼津生活は矢張り私にとつて大變にいゝ様です。彼處にゐて考へますと、今まで東京でよくこそ生きてゐたといふ氣がします。心の上にも、身體の上にもです。これから半年一年となるうちには沼津生活の影が次第に形になつて表れて來るだらうと思ひます。

家も古いけれど廣くて子供の騒ぐのが氣にならぬし、あたりは田圃や山や川やで靜かだし郵便は割合に便利です。何よりいゝ事は訪問者のない事です。今までは一日に平均十人内外のそれがありません。今は恐らく十日に一人といふ割でせう。逢ひ度くはあるが、逢ふと矢張りいけないのです。

然し、寂しいには實にさびしい。ゐても立つても居られない時があります。土をいぢるとか、釣にゆくとか、子供を相手にあそぶとか、そんな事をしてごまかしてゐるのですが、行つた當時そのために一時急に神經衰弱に罹つた様な風もありました。

門前の稻田が悉く刈られて、眞上の富士に段々雪の深くなつて來るころ、寒い風に狩野川の瀬の音や駿河灣の濤の音が日ましに強く混つて響くころになつたらほんとにどんなだらうと恐ろしくそれを想像してゐます。もと巢鴨の家から(いま其處には菊池野菊君が住んでゐます)遙かに西の空に浮んで見えた富士の山はいまは門の前の田の上にいづばいになつて仰がれます。

東京も、然し、難有い。

けふは谷中から上野にかけて繪の展覧會を見て歩きました。そして近來になく昂奮し疲勞して大村木馬君の家に来て泊つてゐます。大村君は十二時過まで夢中になつて繪をかいてゐましたが、それから引違へに私が起き上つてこれを書いてゐる所です。油繪具の匂ひが室に満ちてゐます。(九月廿九日午前三時、谷中初音町にて)

十二月號

跡かたづけの片附けにくさ、さきからさきと何か知ら故障が出来て、遅くともこの廿日には發行し度いつもりであつた今號の原稿を漸くいま發行所に送る事になつた。然し、これでいゝ。これで悉くこの一年間ほどに溜つてゐたぐゝを拂ひ除き得た安堵を覺え得た。編輯はあらまし夙うに濟んでゐたのだが、帳簿の整理、その目的から出した集金の寄りの悪さ、そんな事から今日までよう送らずにゐたのである。

十一月號とする筈であつた本號故、表紙には十二月號としてあるけれど、矢張り十一月號のつもりで見下さい。そして十二月號と新年號とを合併して一月の二十日までに新經營のもとに發行します。今年は何も彼も滅茶であつた。小生の方ではその不面目を償ふ氣で、また新發行者は今後の門出として、とにかく眼に立つものを拵へます。

詠草はこの十五日までに集つた分は一切今號に納めました。二度分のを一緒にした人のも随分ありました。それらの人は新たにまたよこして下さい。十五日以後に送つてゐる人も若しまた新作が出来てゐたら合併號の原稿としてその締切日までに更に送つてよこしても構ひません。

雜誌がやふやなの拘らずすべての人が殆んどそれには關係のない様に靜かにそれゝ自分の歌を詠んで居らるゝのを見ると、まつたく勿體ない思ひがしました。本號のそれゝの歌を見て頂くとそれはよく解ると思ふ。どうかして今後それらの人たちのためばかりにも雜誌をしつかりしたものにせずに

は居られないのをつくゞ思ひました。

かれこれで社は大變小さくなりました。從來の三分一ほどに縮少されました。それも當然の事です。三分一残つてゐるのが難有い事なのです。全く斯うした場合に於て小生は寧ろ或る深い感謝を覺えました。

元來創作社といふものは小生が主宰して諸君に歌を教へてゆく、といふのが當然であるべきなのに、寧ろ諸君の方から小生を掩護してゆく、謂はば創作社は收水後援會の様なものだ、と自分ながら思はずにゐられなかつたのです。そして自分にはその後援を受くる資格があるか、といふ様な事まで考へました。

とにかくこの原稿と一緒に帳簿を横濱の方に送つてしまへば小生は單に一個の創作者、選歌者として立つわけです。非常に身輕になつたのを感じます。これから思ひ入れ勉強します。幸にこの一月ほど前から珍しく歌が出来だしました。作つたのも百首近くありませうが、既に新年號の『新文學』(文章世界

の改題)に纏めて出す約束をしてあるので今號にはよう出しませんでした。少し遅れても來號には揃へて發表します。

それと共に新發行所の方の事をも宜しくお願ひします。抱負を持つてやる事とは云へ、とにかくまだ何も知らぬ人たちですから随分苦しい事と身に引き較べて思ひやられます。どうかこの種々の意味に於ての新世帯の人たちを充分に引立て、下さい。今後雜誌のよく行くも行かぬも主として彼等夫婦の力に據る様なものなのです。

例により身勝手な事ばかりですが取急いで編輯便の筆をとりました。寒さの折柄、御自愛を祈ります。

大正十一年

一月 號

いろ／＼な處で編輯する。此處は伊豆の西海岸土肥温泉土肥館の一室である。元旦午前三時起床、家族して新年を祝ひ、同五時の汽船で狩野川々口を出て来たのであつた。

十二月の十日までに届いたすべての原稿を纏めて今月分に當てたので、二ヶ月分一緒になつた人がかなり多かつた。そのせゐでもなかつたらうが、佳作が甚だ多く眼についた。

門林兵治君の出来榮は本號を通しての偉觀であらう。殆んど突如として、この進境を展いたのだから、見馴れてゐる小生まで驚いた。

紫山武矩君も次第に形をなして来た。然しまだ咽喉から上の聲である。腹から出たものでない。若し出たとすればかなり安價な腹であらねばならぬ。門林君の、方がより多く全身的である。全身的ではあ

るが、まだ何處にかほのかな所があり、不安心な、無理な所のある氣がしてならぬ。これがほんたうに地から生へた力の全身的となると全く本物であるのだ。兎に角兩君のために本號は多少のショックを感じるであらうと思ふ。なほ齋藤潤二（もとの大岡君のこと）君、八木錠一君をも所謂一頁組に推しておいた。特にどうといふのではないが確にさうなつていゝ人たちであるからである。來號あたりから詠草欄あたりの人たちの地位をも少しづつ考へて行かうと思ふ。實は今號からと思つてゐたのだが、何しろ忙しいので一緒に一時にまとめて見るわけに行かず、前後半月以上に涉つて見て来たので比較するに不便であつた。來號からは他の爲事との時間をうまくやりくりしてせめて四五日これにかゝり切つて見る様にしたと思つてゐる。

幸に小生の健康は十二月に入つてめつきりと恢復して来た。養生に今まででない注意を拂ひ出したのは自分ながら可笑しい様である。夏からでないことや難しいといふ冷水摩擦を始め、毎日時間を定めて駆御禮を申します。なほ昨一年間小生宅に在つて小生の爲事を助けて呉れた村松道彌君が今度東京に出て萬年筆の通信販賣をやる事になつた。詳しくは開店の際にゆづるが、創作社の出店のつもりで御ひいきを願つておく。それから諸君の知り合ひのうちで小生方の書生に適當らしい人があつたら御世話を願へますまいか。年齢は十五六歳以上二十歳以下、小學卒業といふ様な程度です。心當りがあつたら御知らせを願ひ置き小生より改めて詳しく御相談申します。

では新年おめでたう。本年は本誌の上にも眞實によき年であれかし。（一月八日）

二月 號

土肥からは十二日に歸つた。同地滞在申偶然にも腹中にサナダ蟲の居る事を發見したので歸來早速その驅除を行ふつもりであつたが折柄相次いだ來客のため果さず、漸く廿日に某醫院にて診察を受け、蟲の種類をもちり、廿三日より絶食二日續けて廿五日入院服薬といふ風に日割をきめたその廿三日午後か

足をやり、鞠投を試み、羽根つきに熱中といふ有様である。飲食にも無論心を用ゐ、酒も止めはせぬが深酒を止めた。酒を過ぎぬのは客に逢ひさへせねばさほど難事でないのだ。それで元日早々此處へも逃げて来たのであつた。

そんな風で歌も出来だした。本號に發表した分はすべて十一月の終りころまでに出来たものであるが十二月に入つて四五首出来た。それらは新年の東京大阪の新聞に出した。來號にはまとめて本誌で見て頂きたいと思ふ。いつも一度他に出した後本誌に出すので不快を感じる人があるかと思ふが、小生はこれらの歌を一度金に代へねばならぬのだ。そして今度此處へ來ると本誌を初め五六種の新聞雑誌の選歌を片附けつゝあつた傍ら、既に四十首からの收得があつた。それをば昨日清書して和田山蘭君の許に送つた。同君の批評を聞いた上、間に合つたら二月號の何雑誌かに出したいと考へてゐる。二度と見られまいかと心配した中村三郎君から眞筆の短い手紙が來たのも嬉しかつた。同君と共に小生よりも深く

ら急に發熱した。九度四十度四十一度といふ熱が廿九日の夜までまる一週間うち續いた。醫師たちも持て餘して果ては腸チブス腎臓炎等の疑ひを起すに至つたが丁度卅日の朝から徐ろに下熱し始め、結局特異性の流感といふ事に決つた。さうして三日四日と過すうち、今度は細君が同様に寝着いてしまつた。その翌日、四人の子供がずらりと寝てしまつた。止むなく熱の引きかけてゐた小生が起き上つて子供たちの面倒だけでも見ねばならなくなり、それを二日續けると再び小生自身もとの熱に返つてまた氷枕をとる事になつた。静岡版の新聞に危篤の報が出て、隣近所の騒ぎとなり、慘たんたるものであつた。幸に彼等も二度目の小生も初めのほど重くなく、二三日にして下熱した。昨日あたりから陽氣も暖く皆、寝たり起きたりの状態を取り得る様になつた。もう大丈夫だ。一月號に自慢した事を考へると誠に面伏だが、これは傳染性のものとして詮ない事と自らも諦め、諸君の苦笑からも逃れ度いと念じてゐる。また諸君にも折角自愛せられ度い。

慾を出してゐると二月號休刊と見たので、今月四日逸速く詠草全部を和田君に托してこの一冊を作つて貰ふ事にした。萬事御諒承を乞ふ。(二月十一日、病床にて)

三月號

毎月廿日締切の規約がなか／＼實行出來ない様なので、こちらはいよ／＼選にかゝる當日までに寄つた分を取纏めて見る習慣となつてゐる。そのため二ヶ月分一緒になる人も多くて或は御迷惑だらうと思ふが、とにかく今號分は今月五日までに來たのを全部入れておいた。來號はこの三十一日までに來たのを纏める事とし、來々號から規約通り毎月二十日締切といふことに致します。そのつもりで出して下さい。

小生は目下七八種の新聞雑誌の歌の選を受持つてゐる。このうち半分ほどは直接小生方あてに投書する規定になつてゐるので、毎日集る四種郵便物の數はかたりに多い。で、自然あれこれと紛れ易いから今後正確に封筒の表に『創作詠草』と書いておいて

下さい。

今月見た中では矢張り一頁組の人たちの心を惹かれた。高鹽君のもよかつたし、河脇君のも佳し、中村君のもさうであつた。何と云つても當て氣味を離れた歌の自然さ大きさが何處かにひそんであると思ふ。野坂龍水君のも眼についた。この人は恐ろしく出來にむらのある人で、出來が悪いとなるとかなりひどいものを作る。門林君のもまた佳かつた。然し、かなり多分にくつ着いてゐる臭みから脱却するまでには随分まだ間があるらしく推察せねばならぬ様に思ふ。その他小豆澤君の枯淡、水に咲く花女のみづ／＼しさ、とり／＼に嬉しかつた。

兎に角、個性に眼覺むる心がけのない人はどうしても在り甲斐のない努力を續けねばならぬ結果になりがちだ。春夏秋冬ぶつ通しに同じ三十一文字の御挨拶をやつてゐる人を見ると氣の毒にもあり情なくもある。

どうか斯うにか元氣らしい顔をして近來毎日机に向つてゐます。(二月十二日)

四月號

景色の歌を詠む時にはさうでもない人が、人事を詠むとなると急に歌の調子を落して甚しくぞんざいになるのはどうしてあらう。

例へば、

時にふと金もうけなど思ひつゝ心さびしくふところ手する

ある時は金のことのみ思ひ居るさもしき者とわがなりてをり

これは齋藤潤二君の金をほしがる歌。

わが心だれある時はおのづからそはつき出す兒等はかなしき

叱つてもすかしても駄目の五六日吾がなまけに兒等(教へ兒)やかぶれし

これは重田行歌先生の愚痴。

たふべくもあらぬ思ひの募りてはわが寢枕の濡るる夜もあり

耐ふべくもあらぬ思ひの日をつきておもわのやつれ目にたちて見ゆ

これは眞崎白城君の悲戀悲歌。

あゝ死んだ南無阿彌陀佛といふ言のまこととう
くなりけるかも

病體に變化來たして書かれぬと文書きしを最後
にあわれ死にしか

これは親友の死を嘆き悲しむ某君の歌。

すべてが何といふ見すばらしい、いやらしい歌であらう。人事は叙景よりむづかしいといふ。さうかも知れぬ。然しこれらの歌はむづかしいをむづかしいとして詠んだものではないのだ。確かにその態度が不眞面目なのだ。(眞崎君のは或は大眞面目かも知れぬが強度の近眼でもつとも先が見えないらしいのでなほ困る。某君のは田舎の十七八歳が葉巻か何かはへた形でこれで大いに新しいつもりかも知れぬ) 此處に引いたのは丁度同じ位の位置に在る人々のを假りに引き出して見たのだが、この呪ふべき傾向は實に一般的に行はれてゐるのだ。知らず、斯の調子でやつてゐるとすると甚だいけないと思ふので、特に此處に書きつけた。月並な、平べつたい叙

景の歌ばかり詠まずと、底深い人事に手を着けてほしいと思ふ此頃、特にこの事が氣になるのだ。

今號のはすべての歌が生氣に富んでゐた。上下下手は別としてみな眞剣であるのが感ぜられた。それと共に、一段抜けて呉れる人の何とまア乏しい事であらうぞとも思はれた。一寸でも他にすぐれるといふ事は何でもない様で實は全く假初めならぬ事だと今更ながら感心しながらこの選を終つた。この選をば伊豆天城山の北麓なる湯が島温泉で行つた。深い所であるが、宿屋の机にちぢりついて居る間、其處等一面に山櫻が咲き出して、實に美しかつた。この前土肥温泉では梅の歌(本號發表のもの)を作つたが、此處では山櫻の歌が澤山出來た。

路上支社だけのものと思つてゐた東京の歌會が急に何だか大仕掛のものになつたらしい通知に接した。久しぶりに諸君の顔を見もし、また小生の黒い顔をもお目にかけたいものと楽しんでゐる。(此頃よ

く照りさへすれば宿の前の川原に出て仰向けに寝るのを楽しんでゐるので、特に斯んなに黒くなりました、平常はもう少し白いのでせう) 單に東京と云はず、出來るだけ近縣近郷の人たちも出かけて來るがよい。博覽會もあるぢアないか。宿泊は市内の社友の誰かの所にそれく押し込むが宜しい。その必要のある人は出席申込と共に書きそへておき給へ、世話人が何とかして呉れます。

あれほど多かつた山櫻はさつさと散つてしまつた。今日などはその草木の色、雲のかゞやき、まるでもう夏です。時のすぎゆく惶しさが年一年と感ぜられます。出來るだけその季節々に親しむ事をせねば嘘だと思ひます。窓の下の溪のひゞきに混つて河鹿が澄んだ聲をあげてゐます。

今日でこの爲事が濟んだ故、明日明後日と天城山の中を歩いて天城山の文章を書き、此處で作つただけの歌をも少し見直してそれを土産に沼津へ歸ります。そして、東京へ出ます。(四月十日午前十時、伊

豆湯ヶ島湯本館にて)

五月號

一寸調子をはづすと、なか／＼もとの調子にかへらない性癖を私は持つてゐる。久しぶりに——私は一昨年の夏、こちらに移つて來て以來、今度のを入れて僅かに三回しか上京してゐない——東京に出て大いに、氣持になつて、一二泊のつもりが五六日にも延び、歸りにはまた友人たちを連れて來たりしてすつかり調子を外してしまつた。

それが即ち、本號の發行遅延のもととなつたのであつた。謹んでお詫を申しあげる次第である。

久しぶりに三橋隆臣君(もと三橋たかをの名で出してゐた)の歌を見ることが出來て、うれしかつた。この人のはほんたうに土そのもの、色や匂を持つてゐると言ひたいほど自然な素直の歌である。みづみづしい荒けづりが誠に氣持がよかつた。

みづみづしいと云へば水に咲く花女の歌もまたその假名の持つ通りのみづみづしさを持つて居る。女史の作の、大きいとか底深いとかいふ點ではまだ未

だ到らぬ節もある様だがその代りまた女に多くど
くしきや平板な説明的詠風からはずつと抜け出て
ゐる。いかにもすつきりと一首々々が躍動してゐる。
もう少し氣を入れて勉強したら屹度目立つ作家にな
れると思ふ。

右の二人を一頁組に推薦した事を喜ぶ。

山下政一郎君の作も珍らしく可憐いものであつ
た。妻喜志子もまた久しぶりに出した。小生も澤山
出来てゐるのだが、今月は見合せ來月號に揃へて出
す。

東京の歌會も意外に盛んであつた。三十人どまり
位ゐるの出席者を豫想して當日會場へ出て見ると、ど
うして、終には六十人を越えてしまつた。すべ
て久しぶりの人々であつたが、ことに思ひがけぬ遠
方の人たち、初對面の人たちに多數逢ふ事が出来て、
誠に嬉しかつた。

いつか沼津の千本松原あたりで全國の社友大會で
も開き度いものだなア、とその盛況を見ながら思つ
たことであつた。

諸君にもいろ／＼心配していたゞいた長崎の中村
三郎君は、不幸にも終に四月十八日長逝しました。
言ひ難い感懐に打たれます。今月號に同君の事を詳
しく書き度いと思ひましたが、私の心が落ちつか
なかつたため、來號に延ばしました。實に不幸な、然
し、しまひまでよく美しく自己を保つて行つた人で
あつたと思ひます。とりあへず此處で、お知らせだ
けをしておきます。(五月廿三日沼津にて)

六月號

沼津移住後、この七月で滿二個年になる。初め東
京を出る時は、前に三浦半島にゐた時と同じく、一
年半か二年、たか／＼三年もこちらにゐてまた東京
に引上ぐる下心で出て來たのであつた。そして、い
つの間にかその時間がたつてしまつてゐる。

然し、どう考へても、いま、再び東京の喧騒裡へ
入つてゆく心になれない。永年の疲勞が出たのか、
昨一年は小生は病氣ばかりで暮した。何か根本的に
もう健康が衰へたのかと悲觀したのであつたが、こ
の正月、流感の烈しいのに罹つて以來それを打ち切
て來て以前から缺損つゞきの經營を旅さきで續ける
といふ勇氣にも乏しかつた。幸ひその頃、長谷川君
が會社の仕事もさう忙しくなかつたし、それに相當
の資力もあつたので、先づ彼に相談してみたところ、
快く引受けて呉れた。ではこちらでは専心に編輯に
精を出し、彼の方では専ら經營の衝に當らうといふ
事になつて今日に及んだのであつた。全く、曲りな
りにも『創作』の今日あるのは長谷川君夫妻の勞力
が大いに與つてゐるのである。

然し、事はどうも思ふ様にはゆかぬものである。
厄介な經營の事がなくなつたので大いに餘裕を持つ
た編輯が出来さうなものであるが、なか／＼さうゆ
かなかつた。自分一人でやつてゐる時と違ひ、一日
原稿の發送が遅るれば、氣がとがめる。催促が來る。
さうなれば、いよ／＼心が散り始めておちつきを失
つてゆく、といふ風で、爾來二年間、殆んどこれは
とおもふ満足も以て編輯し終つた事がなかつた。こ
れではならぬ／＼と、いつでも心では考へてゐるの
だが、實に恥しいほど、爲事が出来なかつた。社友

りにしてめつきりと見直されて來た。家族の丈夫に
なつたのは昨年あたりからまぎ／＼と眼に見えたこ
とで、中にも生れた時から病氣でいろいろと心配さ
れた長女などすら今は立派な一人前の健康を持つ様
になつた。

それこれでこの一二月前からいろいろと考へ
た、いつそのこと、此儘此處に永住してしまはうか
と。よし東京でないにせよ、この家族を引連れて今
後あちこちと廻り歩いてゐるといふ事は、實際現在
の小生にとつては耐へ難い繁煩であるのだ。此處だ
と東京へもさう不自由でないし、また居着いてみる
と種々の便宜も出来てゐる。

先づ永住することにきめて、その次に早速解決せ
ねばならぬ二つの問題のあるのを考へた。一つは住
宅建築のこと、一つは即ちこの『創作』を自己經營
に移すこと、この二つである。

東京を逃げ出す時はまつたくこの『創作』は小生
にとつて重い荷物であつた。永年の歴史あるものを
投げ出すわけにはゆかず、さりとてこちらまで持つ

諸君に濟まないといふのみでなく、忙しい間に一生懸命になつてやつてゐて呉れる長谷川君等に對しても實に氣の毒な思ひばかり重ねて來た。

この土地に永住するとなると、先づ、自らこの事を考へ直さねばならなかつた。幸ひに小生の健康も恢復したし、いつまでも他に頼つてゐずと、自分の力で小さいは小さいなりに心ゆくまでの爲事をして見ねばならぬと決心したのだ。さう考へると、事は急げと早速長谷川君とも相談して、來る七月號からこの沼津で、小生の手許で編輯もし發行もすることになつた。

それに就いて二三發表すべき新計劃もあるが、今號はとりあへず右の報告だけに留めて置く事にします。意を盡さないが、今後雑誌の出るに従つて逐次御承知を願ふといふ事にします。(六月廿三日)

七月 號

とにかく今月中に一冊作り出すことが出來て芽出度し。來月號は二十日には出します。

發行所編輯所の庶務一切に關しては社内笹田富三

君宛問合せられたし。小生宛は駄目。

來號から幾らか新しい編輯法を用ゐます。今月は何だかまごついて駄目であつた。

本號所載、十九頁からあとの方の中に新人現はれむとする傾向を見る。みな丁寧に讀んで下さい。そして「前號では」に書いて下さい。

明るい好い心持で、本社の今後を見ることに致しませう。

實に暑い、今年の暑さは別の様です、小生割合に元氣、諸君はいかゞです。暑中見舞をありがたうございました。(七月廿九日)

八月 號

かなり氣をつけて選んだつもりだったが、校正の時に見ると見づらい歌がまだ餘程混つてゐる。來號はもつと嚴選しませう。濁りなく澄み渡つた一冊々々を毎月出して行き度いものだ。

どうも目ぼしい人が出ない。一頁組の不振もあはれだが、さればとてその他の組から誰を抜いて來て其處に推さうといふ人もない。三四人やや際だつた

人がゐないではないが、要するにまだはつきりとその人の眼鼻があいてゐない。心許ない事だと思ふ。

然し、急ぐ事はない。未成品結構である。最も恐ろしいのは小さくまとまることだ。その無いのは、少くとも乏しいのは、わが創作社の強みである。小生はそれをひどく楽しみにしてゐる。

「前號では」が全部で九篇來た。多くはみな推讀の辭であつた。その裏の批難の言葉もあるべきだと思ふ。醜くない程度でさうした批評をも聴き度いものだ。

互選詠草は六十八首集つた。來號はもつと多いのを望む。多くなれば二頁一杯に組まれるだけの數に小生が豫選して發表することにする。互選をも盛んにやつてほしい。結果發表の上で全體に對する批評を毎月小生及び社中幹部連が試みる事にしませう。この欄の歌は皆原作の通りにします。

今後十二月號までの詠草締切日を裏表紙に廣告しておいたから、あれに従つてそれぞれ投稿して下さい。實は今まで餘り一般に賣出す事をしなかつたが、

これから少し世の中へ出て見ようと思ふのだ。賣るには矢張り一日發行でないと都合がわるい。で、彼の如く追々と一日發行にまで繰上げて行かうといふ譯です。

十一月號分締切が他よりも多少早いのはその號分だけの選を高鹽背山君に頼まうかと思ふからです。それは十月號の編輯を終ると直ぐ一月ほど小生旅行に出度いと思ふがためです。で、特にその月は注意して遅れぬ様に送つて下さい。小生の旅行もまだ確定はしてゐないのだが、出來たら富士の五湖を廻つて信州の諏訪湖に出、八ヶ嶽を越えて松原湖を過ぎり輕井澤から上州に入つて利根の支流片品川を溯り金精峠を越えて湯元から中禪寺湖日光あたりに暫く滞在し、喜連川に高鹽君を訪うて那珂川を下り霞ヶ浦から犬吠崎九十九里邊の秋風に吹かれて歸つて來ようといふ空想をば立ててゐるのです。實行出來たら非常に仕合せだとおもふが、何しろ此頃無數に用事がかさんであるので甚だ覺束なくも思はるので、然し空想だけでも旅は決して悪くはない。

社の原稿用紙をばどうか是非使つて下さい。まだ三分一ばかり他の雑多なものを使つてゐる人があるので、キチツと編輯を整へる事が出来ず、小生の方でも印刷所の方でも眼に見えぬ苦勞をしてゐます。一綴あれば月に五枚づつ使ふとして二十箇月の用が足りるのです。割引をして送料共卅五錢にしておきました。面倒がらずに直ぐに註文して下さい。代價は社費を送らるる際一緒に送つて下さつて下さい。切手代用亦不悪。

沼津の印刷もなかなか馬鹿に出来ずまい。當地發行の旨を發表すると、誰もが先づその事を心配して言つてよこした。そして第一冊の七月號を見て安堵祝賀の意を告げて来た。印刷所は更にわが社のために今度新たに活字數萬本を購求する事になりました。

小生は今月五日から十一日まで町の病院に入つてゐました。おなかの病氣だったので、とりわけ肝心な時に當つてゐたので、今號の編輯に多少の手違ひがあり、残念でした。

お互ひの動靜をば毎月消息集の中に出して行き度い故、葉書でも知らして下さい。單に個人に限らず、事業に關すること家族に關することなど其他を。今日で校正が終り、明日は刷り、多分明日の夕方までには出来上りませう。發送をば笹田君に一任しておいて小生等夫妻は明朝早く長谷川君慰勞短歌會の方へ出かけます。會場は鶴見の花月園にきまつた由、日も時もチト暑い盛りだが、盛會でせう。我等は國府津で柴山武矩君と落合ふことになつてゐます。

秋めいて來ました。好き季節です。大いに時を惜しみませう。(八月十九日)

九月號

高橋葉子さんの作を澤山出して見た。未成品といはねばなるまいが、思ひつきと氣取と「優美」其他多くは表面のみに留つてゐる女人の作の中にあつては兎に角異色あるものと信ずる。亡くなつた茅野昌栖君の言つた言葉だが、「女は發作的にのみ歌を詠む」と言つたのは名言である。多くの女がそれだ。つま

り、それだけ、其場だけの作に留るのがその故である。葉子さんのにもかかなりその氣味がないではないが、單にそれのみとは言へない。作を通じた何物かが確かにある。熟讀と批評とが望み度い。(作者は某工場の工女の教師や監督をしてゐる人だ)。

兎に角、みんなのを讀んで下さい。個々としてまた全體として、其處に生動する何物かが無いかあるか。若隱居や似而非ものしりの手なぐさみに過ぎない觀のある現代の歌の中に在つて十年鳴かず飛ばすのわが「創作」がどんな地位を確保してゐたか、をも就いて考へて下さい。

本文を六十八頁(前號六十六頁)で止める豫定であつた所、斯んなことになつてしまつた。どうにも爲様が無かつたのだ。止むなく捨てたものが澤山あつた。鈴木菱花君の感想、大村木馬君の紀行、小生の「批評と添削」「消息集」等其他。前號では「をば半減してしまつた。ページ數の事に就いても考へなくてはならなくなつた。」

來號まで待ち、十一月號から愈々原稿紙一定を斷

行します。大勢の人が一緒になつてやつてゐる爲事の事ゆる止むなき事と御承知下さい。

八月より本月初旬にかけて來客雲集、従つて酒量を過し、小生目下半病人、爲事の順序も大いに狂つたが、先號に書いた旅行にはどうかして出懸けたいと念じてゐます。特に、來號締切嚴守のこと。小生本朝四時當地發名古屋の歌會に臨みます。いま辛うじて編輯完了、校正は留守居の人たちに頼んで行くのです。

小生目下來客なき日は大抵午前二三時起床、午睡一時間、夜八時就床。御來訪は是非午前と夜を廢し午後二三時より六時迄にして下さい。(九月十七日午前

十月號

運わるく風邪に襲はれて不快な頭痛發汗鼻水等に苦しめられながら漸く今朝編輯を終つた。この分では遅くも十六七日には出来るであらう。九月號は遅れて濟まなかつた。逐號印刷所の方も設備が整うて來るので暫て豫定通りに發行することが出来ませ

う。

別に變りのない編輯振であるが、内容即ち歌の方は次第に緊張して來るのを感じる。ことに五四頁から六五頁まで、七一頁から七六頁まであたりのはそれこそ前號で黒木君の所謂「魂の林立」の賑はしさである。「月光集」あたりにもう一步で何とかなりさうな人が多勢あるのだが、何處かまだばかんとしてゐる。早く眼を覺して貰ひ度いものだ。毛利雨一樓君は新しい社友であるがその手土産の形で一篇の大連作を送つてよこした。見ればいかにも變つたもので、一讀再讀、異様な感興を覺えた。で、とりあへずその中から數十首を抜き掲載することにした。二六頁の「無題」がそれである。斯うした行きかたにはかなり疑義がある。然し斯うは言へると思ふ。よしこれが歌の正道ではないにしても斯うした行きかたが他にあつてもいゝ、といふことをだ。斯うした詠みぶりに行くにしてもこの一篇はまだ甚だ不洗練なものであるけれどその底に動かし難い本質のあるのを私は感じたのだ。詩歌の本質の潜んでゐるのを

だ。かなり議論も湧く事とおもふが、謹んで聴き度いものである。

選をしながら、をり／＼と感ずる事だが「まだまだ此處等は本物ぢやアない」といふ或る明瞭な直覺が或る種の歌に對して湧く。うまいとは見ても、微笑程度のそれだ。さういふ階級に留つてゐる人が随分と多い。考へてみるとそれ等はすべてまだ「歌」といふものに囚へられてゐるらしい。「歌らしい歌」「情趣」「配合」其處等にすつかり没頭してゐてどうしても出得ないである。恐しく熱心で、小まめで、ちよこ／＼ちよこ／＼とそれは一生懸命だ。氣の毒でもあれば可笑しくもある。斯ういふ人には、一寸どうかしたはずみに傍見をして貰つたらとおもふ。血眼になつて嘯りついてゐるその玩弄物(歌)からひよいと眼をそらすのだ。さうしたら急に氣が變つて、新鮮清冽な空氣が流るゝ如くにその人の肺臓に浸み込んでゆく事であらうとおもふ。ナント其處等の諸君、チヨイツとわき見を致さうでは御座らんか。だが、わき見をしたついでにいたづらをしてはいけま

せん。獨りだけでチヨイツとやる事です。

小生明日發、東京に二三日滞在、信州佐久郡の歌會に臨み、その足で上州の山の中へ入つてゆきまです。多忙と病氣とで兼ての旅行豫定が斯く壞れたのです。せめて上州野州の山色だけには親んで來たいと思ひます。

従つて十一月號の分は高鹽君に見て貰ひます。そしてせい／＼同君に急いで頂いて、來號こそは豫定通りに發行したいものです。

今月號に載せた小生の「無感動の歌」は近々發行になる春陽堂からの「和歌作法」に入れるために書いた中の一篇で主として初歩の新社友のためにといふ心で此處に出しました。

原稿用紙は今號で殆んど全部揃ひました。誠にいい氣持です。來號からは社告通り、創作社原稿紙によらない原稿をば一切没書とします。

いま新しい事業を創作社として小生個人として計畫し着手して居ます。三人の助手をも頼んであります。その内容は多分十二月號で發表します。その息

抜きとして小生はこれから旅に出かけます。(十月八日正午)

十二月號

歩きづめの永い旅から十一月の五日夜歸つて來た。そして十日間寝てしまつた。矢張り少し無理をした形があつたのだ。机の上には留守中に溜つた用事が山積して居た。それこそ大きなデスクの上いっぽいに積まれて足らず、書棚にも床の間にも置いてあつた。

折も折、十一月は各種雜誌新年號の原稿を書かねばならぬ時期に當つて居たのだ。散文をば多く斷つたが、歌をばみな引受けた。旅の歌が出来る豫感があつたからだ。(其處へ二十五日上京、和田君の「酒壺」の會に出席、一日おいて二十七日山崎斌君の「結婚」の會に出た。いづれも止むをえぬ事ではあつたが實をいふと小生には東京はまさしく鬼門である)歌はよく出來た。近頃珍しく氣持よく出來てくれた。今までに出來ただけで確に百首を越えてゐやう。なかにはやゝ得意なものがないではない(これ

らは例のごとく一月遅れて二月號の本誌にまとめて發表します)

それこれで本誌の選歌にかゝつたのは先月も終りかたであつた。そして何の氣もつかずにゐたのだが、この十二月の一日から七日までこの沼津町に郡制廢止紀念駿東郡物産共進會といふものが開かれた。何でも沼津空前の催しだとかで、現に今日なども朝から煙火をばん／＼打ちあげて居るのだが町中引つくり返る様な騒ぎをやつて居るらしい。そのため町に一二軒しかない印刷所に持ち込まれた特急な爲事はまた夥しいものであつたのださうだ。

大抵の見極をつけて、今號はとにかく休刊だけはせぬといふ事にして置いて、豫定より十日遅刊の上本誌の中堅とも見るべき人たちが二十人ほどの歌を來號に廻してしまつた。そしてその新年號もこれからは到底年内にうまくゆく見込はないと思ふので來月十五日發行といふことにきめてしまつた。甚だ相濟まぬ話であるが、どうか許して下さい。その代り新年號では多少とも諸君を喜ばすものを作りあげた

いと思つてゐます。

新年號から實行してゆきたい一二の計畫があつたのだが、それも新年號に發表して二月號から實行するといふことにします。一つだけ言つておきたいのはこの三月の末に沼津で全國社友大會を開くといふことである。出来るだけ盛大にやり度いと思ふ故、正月休に上京すると云ふ人には日を少し延ばして置いて貰ひたいし、正月のお小遣をもその大會費に繰延ばして出席するといふ風にして貰ふと難有いと思ふのだ。大正六年だかに東京で開いて今度はその二度目に當るのだが、第一回に劣らぬものにしたたいと思ふ。今からいろ／＼と心づもりをして置いて下さい。

沼津で出す様になつてから今號でとにかく六冊完全に出たわけです、これをば準備と見て來年度にはひとつしつかりやませう。

「酒壺」も豫定より遅れてこの九日が製本出來ださうです。詳しい批評はあとで書きますが、いかにも和田君だけの獨特の味の出てる珍しい歌集です。

體裁もなか／＼いゝ。

小生は目下支關に面會謝絶の紙を張つて忙しい爲事を續けてゐます。多分二十日頃まで續きませう。それから近くの温泉に行つて身體を休めかた／＼新年號の編輯ともう一つ纏つた爲事とにかゝります。そして十日頃まで滞在することになりませう。つまり正月前後は留守になります故、お含みおき下さい。いつも何彼とおちつかなくて耻しく思ひますが、或る事情から來年一杯か半年位はこれが續きさうです。然し割合に元氣ですし、仕合せと歌も出來ますのでまづ／＼お喜び下さい。(十二月二日)

大正十二年

一月號

いはゆる一頁組といふものを今度一度に八人だけ推薦した。これは「創作」發刊以來全く空前の事である。幾度か熟慮しながら、矢張り斯うせずにはあらぬ強い力を私はこれらの人たちから感じたのであつた。

人間の意氣とか力とかいふものを私は夙うから歌の上に要求して來てゐた。これは諸君のよく知らるる處である。そして或る種の理智や、概念や、趣味や、または技巧の上から生れて來る歌を常に排斥して來た。意氣とか力とかでは言葉が足りぬのをおもふが、それ／＼の人が自己の生活を營む上に持つて居るか、若しくは更に要求するか、それが歌の上に表れて來ねばならぬといふのが即ち私の持論である。さういふ自然の力が歌に籠り、更に歌から發して他に及ぶことを常に私は求めて來た。此處に推した人

々の作には淺し深し、また自覺的無自覺的の多少の差はあるであらうが、兎に角それに類する力の籠つてゐる事は感じたのである。今度急に感じたのでなく、またこの人たちだけのそれを覺えたのではない。然し、寧ろ偶然に今度はこの人たちのは粒が揃つてゐた。もう大抵い、だらうといふ心持で此處に推したのである。幸ひに諸君全體して此等の作を忠實に鑑賞して頂き度いものに思ふ。

今度は實際に一體の出來がよかつた。或る熱い空氣に蒸さるゝ氣持で選を終つた。何だかまだ臉や指先にその熱ぼつたさの残つてゐるのを感じるほどだ。諸君の方でもこの一冊を開いて讀みながら或はそれに似た感じを覺ゆるかも知れぬとおもふ。何しろ難有い事であつた。

今號から「子供の歌」といふ欄を設けた。名の如く子供が作る詩歌である。私は早くから子供の雜誌「金の星」のこの子供の作るものゝ選をやりながら、その何とも言へぬ不思議な能力を彼等が持つてゐることに驚いてゐたのである。そして夙うから「創作」

にもそれを掲げ度くてゐたのだが、今度漸く實行することにした。幸ひに創作社には小學校の先生が多いのでその人たちの力を借りて盛んにこの種のものを作らせて貰ひたいと思ふ。どん／＼諸君の生徒なり弟さんたちになり勸めて作らせて送つてほしい。間に合せに出して置いた今號のものでもなか／＼立派なものではないか。髯のある其處等の小父さんたち、多少たぢ／＼の形でなくば幸ひである。

なほ、普通の長詩小説の類をも募集してゆきたいとおもふが、急には手が出せない。私はあまりに歌の歌臭いのを嫌ふと同じく歌の雜誌の餘りに歌の雜誌臭くなるのを嫌ひながら、まだ充分にその希望を實行して行き得ないのである。歌が單に歌として存在するのではなく、作者（延いては讀者）の生活と直接交渉あるものを欲する様に、この雜誌をもさうしたものにしてゆきたいと考へてゐるのだ。然し、急にやつては失敗する事を、餘りにたゞ／＼經驗してゐるので、音なし／＼してゐる次第だ。

(中略)

本號の頁數をば最初八十八頁どめのつもりで編輯にかゝつて、終に斯んなものにしてしまつた。甚だ弱つたが、致しかたがない。それでもいろ／＼考へ來號に延ばしたものが少くない。先づ私の歌、それから同じく隨筆もの「野蒜の花」例月の六號もの、例へば「前號では」「消息集」等がそれだ。私の近來詠んだ歌の數はたしかに二百首を越してゐるであらう。今月の諸君の作と並べたくて困つたが、とにかく來月まで延ばした。それから「前號では」が近來一向に來ない。來號には今月の新進の人たちのをでも合評してよこして貰ひ度い。

此處に一つの大きな報告がある。別項社告にある様に全國社友大會をこの四月一日に於てひらく事だ。一年に一度か數年目に一度か(今年は六年目)の事ゆゑ、精々都合して出席して頂き度い。詳しい事はさらになほよく考へてから定める事にして兎に角此處には時日と場所とを發表しておく。大きな楽しい、靜かな會合であれかしと祈られてならない。私は相變らず忙しい。暮の二十日から二十日間ば

かり近くの温泉へ籠るつもりであつたが、それどころか、きつちり三十日まで不眠不休の状態であつた。それでも正月は流石に正月らしく五六日遊びました、もと社にゐた村松君や大悟法君たちをも呼んで筆末ながら、新年の祝詞を申します。賀状をも差出さず、失禮お許し下さい。(一月九日)

二月 號

前號で推薦した八人の青年の歌を今度歌壇に於ける諸先輩から批評して頂いた。詩壇俳壇の人にもおねがひしたのであつたが締切までに間に合はなかつた。急な企てで、且つ二三の人の言はるる様に往復葉書などでこれをお願ひするといふのは随分亂暴な話で、それは自分もよく承知してゐたのであつたが、とりあへず葉書に書けるだけのお言葉を、といふ意味であつたのだ。然し、この心なき企てに對して諸家は實に深切に、親身になつて應じて下された。一々の言葉の端にそれが現はれてゐて、誠に難有く思はれた。八人の人は勿論のこと、社中すべてが異常な感謝を以て熟讀することであらうとおもふ。

なかで、前田君の「もう少し調子を打毀す氣はなにか」といふのは「型に納るな、生き生きとせよ、鉛の切斷面に見る様な新鮮さを持つて」といふ意味だともおもふ。「ともすれば小味に完成しやうする」といふのもそれである。小生の常にいふ趣味に陥るな、手あそびものにするな、といふのと合致するわけである。然し、この八人のなどには割合にそれが少ないと小生は認めてゐるのである。さう認めて舊い人をも抜いて此處に推したわけであつたのだが、他から見ればなほ斯う見えると見える。心すべきことである。小手先を利かす、小味をにほはすといふのは實に恐怖すべき事である。社中の上下にわたつてこの傾向を持つ人がかなりある。斯う書きながらもその人の名前や書體などが小生の頭のなかには浮んで来る。その人たちにもこの心は通ずることとおもふ。崖から飛び降りるつもりで自己革命を行つてほしいとおもふ。

「趣味に耽る」といふ傾向は斯く云ふ小生にもかなり多量にあるのである。二三號前に出た二九十八君

の「前號では」など、かなり小生には痛かつた。今度十頁から並べた歌の中にもその臭氣がありはせぬかと大いに畏れをなしてゐるのである。どうかしてそれを打破しよう、生地一方な歌を作らうと始終心がけてゐるのではあるが凡情なかに改め難い。然し、その事を常に頭に置いて居る事だけは確實である。永いうちには何とかなることとおもふ。言、他事に及んだが、斯ういふ事を言ひ出した所以は「牧水の癖を真似るな」と言ひ度いたためばかりであつたのだ。牧水は確かに諸君よりエライにはエライだろうが、それと一緒に悪い癖も諸君より大きく持つてるかも知れない。それをわざ／＼真似られては實に恐縮恐怖せざるを得ないのである。よく眼を開いて自他の長所缺點を見詰められたいと思ふ。

松村君の「放漫」だといふのも聴くべきである。それは確かにある。ことにこの八人の人たちにはそれが強かつたかとも思はれる。今少し引き緊めねばならぬ所が確かにある。いや、強ち八人諸君に限らず、考へて來ると是も「火事は近いぞ」の感がない

ではない。だが、此處にはこの八人の人たちに特に聽いておいて貰ふことにするのである。

斯うして諸家の言に就いて感想を附け始めると切りが無ささうだから、以上でとめておく。イヤに感心し切つてるぢアないか、といふのは誰だ。それは感心すべき所に感心してゐるのである。たとへば此處に引いた前田君なり松村君なりに全部感心し切つてゐるのでは一向にない。それを言ひ出せばお客様に失禮に當るといけないからよすが、兎に角八人の人たちのみならず我等一統して聴くべき言が少くなかつた。島木さんの親身な言葉なども全くさうである。この企ては全く意外なよき結果をもたらした。まことに感謝に耐へない。特記して諸家にお禮を申し述ぶる所以である。

小生の歌を最近に出來たゞけ全部、本號に納めて見た。やゝをこがましい氣がしないではないが、兎に角本誌のみがやり得ることだと自慢でもしていただきたい。

日記を出してみた。これは九州(京子さん)、關西

(大島君)、中部(門林君と喜志子)と東北(高鹽君)といふ風に考へて書いて貰つたのであつた。各地方の正月氣分が出てをれば幸である。

全體の歌は、先づ平常と變りはなかつた。少し方針を變へて、採つた歌の數からいふと詠草組に厚く、上になるだけからくした。今後ずつとこれでゆく。題のついてゐる人たちには餘程しつかりして貰はないと困るとおもふ。前田君の言ではないが、ほんとうに「納らず」に下さい。安心せずには下さい。

それから甚だ突然であつたが。來月二月から社費の改正を行います。雑誌を今まで通りにおけばその必要はないのだが、それを少し活躍させようとするとしても斯うせずにはあらぬのです。今まで六十四頁から八十頁どまりを以て雑誌一冊の豫算を立てゝゐたのですが、前號があの通り、今號もまた斯の通りです。これではどうしても從來の社費ではやつて行けません。さればとて折角湧き起つて來たこの活氣をつぶしてしまふには忍びない。いろ／＼と感うたが、思ひ切つて斯うしました。突然で

驚かるゝだらうとは察するが、どうか喜んでこの改正を承認して下さい。

昨年の七八月頃以後に社費を拂込んだ人には一々何月まで既納の旨通知してある筈故、それによりこの二月以後の分の計算をなほして今後の分を拂込んで下さい。未納の人もまたさうです。ことに此際拂込んで頂くと甚だ好都合である、いつまで拂込濟になつてゐるか解らぬ人は問合せ次第返事します。

本號も最初はせい／＼で八十頁どめのつもりで編輯にかゝつたのだが、斯うなつてしまつた。頭を痛め／＼、これになつたのである。これでは載せ得なかつたものが澤山あつた。一頁組若干、題附組若干、それに本號は六號ものが非常にこんだので、「前號では」のうち二九十八君のだけを探つて他をばお預りにしました。しかもみな二九十八君同様の長篇苦心の作でありました。

大會の出席申込もぼつ／＼とあります。このことに就いては、九九頁の「大會前記」に書いてあります故御らん下さい。

小生は去る十七日、今號の原稿を携へて當地に來り、此處で今までかゝつて編輯を終へました。そして昨日沼津より來た笹田君が明日の船で持つて歸つて印刷所に渡す事になります。校正は多分同君の手で行はるゝでせう。校正といへば前號は正月氣分で校正したことゝ、誤植漏誌、高鹽皆山だの藤原東洲だのと見知らぬ小父さんが出て來る騒ぎで恐縮であつた。今後ひどいのは訂正します故、どん／＼申込んで下さい。小生はもう少し滞在して或る大きな爲事をしてゆく必要があるので。二月廿八日、伊豆土肥温泉にて。

三月號

女護島號の觀を本號は帯びてゐる。それはとにかく所謂一頁組の中にも今までに見ぬ活氣の動いて來たのをば誰しも感ぜざるを得ぬであらう。百五頁から百十一頁に到るあたりにも確實にそれが感ぜらるる。一體に睡眠を食つて居るわけにゆかなくなつた。それに引換へ、小生をひどく落膽せしめたのは「得意な作と落選」の問合せに答へられた人々の歌を見

た時である。いつも惶しい中に眼を通すのでどんな見落しがあらうも知れぬと後日の参考のため返事を求めて見たのであつたが、集つた全部を通覽して悉くがっかりしてしまつた。これならば殆んど全部没書にしたわけだと思つた。そして如何に諸君が歌を見る眼を持たぬかに就いて寧ろ悲惨なおもひをすら覺えたのであつた。いつまでも子供の氣では困る。もう少し眼を高く明るくする事に心がけて下さい。

大會は小生すら思ひがけなかつた盛大なものになりさうだ。どうか内容の充實した、どつしりとした、落ち着いた大歌會にしたいものである。歌壇として斯ういふ集合は恐らく空前の事かと思ふ。

半折短冊會といふのを、昨年の夏頃から考へ抜いてゐて、たうとう今度諸君の前に發表しました。かなりあつかましいお耻しい企てであるが、どうも此儘いつまでぼんやりとしてゐられなくなつたのです。大きくなる子供たちを見たりしてゐると、いつまでも根のない萍の生活を續けてゐるわけにゆかなくなつたのです。そして自分の居場所を定めて、心

静かに、みつちりと勉強し直し度いといふ心が我慢の出来ないまでに強くなつて來たのです。

固定した發行所があるといふ事は、雜誌のためにもいゝこと、思ひます。どうか御自分たちの事業の積りで、この事のために力を入れて下さい。この事特に御依頼申します。

□小生は土肥から今月の五日に歸つて來ました。そして程なく風邪を引いて寢込みました。忙しさは例の通りだし、今號の編輯も寝たり起きたりの間に辛うじて済ましたのです。出來た分から印刷所に廻したりして、全體の上から甚だ不體裁のものが出來上りさうだが、我慢して下さい。兎に角、豫定期日まですらと、無理をしたのです。

四月號も順當にゆくつもりです。大會出席の人には多分その席上、四月一日の朝、お手渡しする事などになりませう。

□これは庶務部よりの申出です。送金は是非振替にして下さい、小爲替ならば是非書留にして下さい、と。

多い郵便物の中には折々紛失や何か間違ひが起りがちで、最近にも一二それらの事があり、ひどくわづらはしい上に氣持も悪いといふのです。もつともの事と思ひます。振替か書留ならば確實でもあり、調べるにも手間がとれません。些少の手数を厭はないで、以後是非その事にして下さい。

□ナント身體に故障の起りがちな事よ、晝すぎからちく／＼耳が痛んでゐたが、いまま終に耳だれが出て來た。今年の風邪からはそれになり易いといふ中耳炎に罹つたらしい。いま俤を呼びにやりました。(二月廿三日夕方五時)

四月號

前月歌壇一覽といふのを出した。一般歌壇の趨勢を見るに多少の便があらうかと思はれたからである。

各社々中に於ける先輩株の人のを引いた積りではあるが、小生自身あまりその消息に通じてゐないので、或は見當違ひをしてゐないとも限らぬ事を恐る。なほ、この原稿を作つたのは今月の十二三日で

作者諸氏に深い謝意を表するものである。

半折會の方も着々進捗してゐる。この企に對し、眼に見えぬ厚意をそれ／＼の人々が持つて居らるゝのを知つて、本當に難有いと思つた。何一つかりそめには出來ないといふ氣が此頃いよ／＼身に沁むのを覺ゆる。

先月の二十三日から今日までまだ耳の醫者に通つて居る。中耳炎に外聽道炎といふのを併發し、一時は食ふも眠るも出來ぬ痛みに泣かされてゐたが、今はそれは去つた。たゞ大會までに全快して呉れないと困るとあせつてゐる。

大會も愈々やつて來た。斯うまでとは思はなかつた主催者先生、少々空怖しい氣持などを感じて來たが、乗りかけた舟だ、押切らずばなりませんまい。

「山櫻の歌」が四月中に新潮社から出る。これは「くる土」以後の歌を輯めたもので、體裁も同じである。

あつたのでそれまでに到着しなかつた雜誌の分はこの中に入つてゐない。「朝の光」三月號は折柄「窪田空穂系歌人號」となつて居り、それぞれ自選歌らしいと見たので「國民文學」「地上」によらずしてわざとこれから引いたのであつた。歌の數十首以内の發表せられたものは其全部を掲げ以上に及ぶものはその最初から十首目までを取つて此處に轉載した。

創作社には一體に「一般の傾向」といふ風の事に無關心の人が多い(小生初めさうであるが)。それに憂身をやつすもいやだが、あまりにまた無知でも困るであらう。さういふ點からこの一欄をば、今後も折々續設して行きたいと思ふ。今度この原稿を作らうとして一番眼についたのは「アララギ」派や窪田系の人たちの自作に對する鑑賞態度のきびしさであつた。その一首々々に對する注意力、尊重心の深いのを見て居るとそゞろに身邊の顧みらるゝ思がしたのであつた。我が社友諸君にはこの事特に注意してほしいと思ふ。

種々の意味でこの欄の有意味である事を思ひ、各

「くろ土」は大正七、八、九の三年間、「山櫻の歌」は大正十、十一の二年間、前後通じて五個年間の小生の全部がこの二冊に収めてあるのである。

なほ詳しくは來號に書く。(三月二十四日午前四時半)

五月號

大會もめでたく済みました。

様子は本號掲載の各記事により御承知下さい。全く途方もなく面白く楽しく賑やかな會合でした。六年前の大會も賑やかには賑やかであつたが多少空騒ぎが過ぎた様でした。今度のは賑やかな中にもしみみりした處のある、忘れ難いものでした。

大會記事が少し多過ぎたかとも思はれますが、意氣の發する處これ亦致しかたのない事と思つて下さい。

ために平常の題附組の全部一頁組の一部を來號廻しにせねばならぬことになりました。不悪思召下さい。來號に二度分纏めて出すことにします。

それでゐて案外に歌が淋しくないと思ふ。平常に譲らぬ、讀みごたへのあるものだといふ氣がするが、僻目でせうか。

何も彼も大會々々で、この一月前後、すっかり忘れてしまひました。歌も作らねば、原稿も書かぬ、手紙の返事など、全く葉書一本よう出しませんでした。

ことに悪いと思つてゐるのは半折會の方をまだそのまゝにしてある事です。今月は大會の事とこの五月號とで全く小生の力の全部でした。これから氣を静めて半折會の方に専念にかゝります。來號からは誰々分を何日に送り出した旨をも誌上に發表してゆきます故、それにより會の事業の経過を御承知下さい。

「山櫻の歌」の校正が昨日で済みました。五月初旬には本になります。本文二百十八頁ですが紙のいゝのを使ひます故、「くろ土」と全く同じ厚さのもの

になります。それでも出たらばまた落着いて歌が詠めませう。折柄小生の最も好きな若葉の季節でもあります。

本號挿入の寫真版は東京の村松道彌君と高久君とで拵へて呉れた様なものです。出來上つたのを高久君が昨夜の夜行でわざ／＼持つて來て呉れました。これで漸く原稿全部を印刷所に渡せます。月中にはちと無理かも知れない。(四月廿七日午前七時半)

六月號

先號が人の大會號であつたならば、今月號はまさしく歌の大會號とも呼べるべきであらうとおもふ。ことにそれは六九頁より八五頁まで、及び一〇六頁より一二三頁までの所謂題附組の歌に就いてゝある。

實際私は此等の中の數君の歌をばまつたくこちらの身體に一種の熱を感じながら見て行つたのであつた。毛利君、三苦夫人、二九十八君、其他二三、私ならずとも此等の人の歌を何の感動なしに觀過し得

ることは出來ないであらうとおもふ。無味乾燥か繪具の陳列會か、「歌」であるらしい現在の歌壇に於て斯うした歌の見らるゝ事は恐らくこの「創作」を除いては出來ない事とおもふ。嘘だと思つたら本屋の店頭に立つて十種か二十種もあるであらう歌の雜誌を覗いて見るがよろしい。「屁理屈」か「思はせぶり」にあらずんば極彩色石版刷の「趣味」の歌であつて斯うした「人間の力」「人間の匂」を帯びてゐるものなどてんで眼には觸れないであらう。全く我等にとつては歌は「遊戯」の對象でも「研究」の對象でもなく、我等自身、我等自身の生きてゐるための「力」であり「よろこび」であり「なぐさめ」であるのである。歌を作る幸福はそれを略いては他に無いとおもふ。

詠草欄あたりを通じても明瞭に我等のこの詠歌態度は表はれてゐる。なま身に響く何程かの力を感じないものはないのである。似而非上品や似而非エラガリの無いだけでも氣持がいゝ。

斯うして、然し、優れた歌を選んでゆきながらも自分自身に作の無いのはうら淋しい。さう思つてノートを引出して見るとこの一月の廿七日土肥で四五首詠んだきりであとが絶えてゐる。この半年、一體何をしてゐたのだらうと、思はずも苦笑せられた。何彼と事の多かつた故ではあるが、私には折々斯うした事がある、出来ないとなれば全然出来ないし出来出すとなると一度に出来るのである。月並に、強ひて作れば出来ない解もないであらうがよくよくでなくばそれはいやだ。そのうちには自づと湧いて来るであらうとおもふ。

この間に「山櫻の歌」の出たことは一つの慰めであつた。斯うして一冊になつたりすると何だか全部新たに作つたものゝ様な心躍りを感じずにはゐられないのである。どうか諸君にもとつくりと見て頂き度い。そしてその讀後感などを聞かして貰へば幸である。手紙でもよく、また九〇頁に在る募集原稿として、もよい。腹一杯の事を言つて頂き度い。

元來私は不精のために未だ曾て自分の著書を他に

贈つた事がなかつた。今度のこれをば文壇的にまた世間的に世話になつた友人や先輩たちに少し贈呈するつもりで二三日前それに添へる手紙まで印刷したのであつたが出版元の新潮社に問合せると皆小賣店に出してしまつてそれほど纏つた数が置いてないと云ふ事であつた。ために折角の思ひ立ちも増版の時まで待たねばならなくなつた。

歌の出来ない泣言と一緒にもう一つ言ひにくいお詫を言はねばならぬ。半折會のことである。歌が出来ない位あ故、よほど氣持がごた／＼してゐるに相違ないのである。で、申込んで頂いた人々に濟まぬとも思ふし、家内中の者からは墨まですつて突きつけられるのだが、どうも筆を持つのが恐い。どうせまづいだからさつさと片附けたらよさ、うなものだが、さうもゆかぬ。拙いなりにせめて氣持よくだけなりとも書いて見度い。

ために今號だけ何となくきまり悪く例の報告をも發表しませぬ。來號揮毫發送濟の報告と共にまたす

つと掲げてゆきます。甚だ濟みませぬが、申込の人たちもどうか悪しからず思つて下さい。

心持を換へるために今號が出来ると共に一寸した旅に出て來ます。よく解らぬが富士の五湖を廻り、身延に登り、山づたひに駿河の梅ヶ島温泉に出て三河の鳳來寺山に登つて來ようかと思つてゐる。若葉の山の奥に啼いてゐる郭公や佛法僧鳥を聴きたいのが願ひである。せいゝ一週間の豫定。

それから十七日に上京「山櫻の歌」の批評會に出席します。

また大會の話だが、あれの濟んだ後四五十日の間所謂大會氣分から脱ける事が出来ないで、東京でも横濱でも大阪でも宇都宮でも何か知ら名目を拵へては寄り集つて騒いだらしい。私が一二ヶ月ぼんやりするのは全く無理も無い話ぢやアないか。

さうだ、一つ大事なことを書かねばならなかつた。大會の當日その會場に着く様にと東京の尾上柴舟先生から祝ひの歌を特に半折に揮毫して送つて下さつ

たのだ。ところがどうしたものか四月一日に届かず、二日とか三日とかに臨川館に届いたといふことで、而かも宿の者がこちらに廻すのを忘れて居り、すつと程経てから漸く私はそれを受取つたのであつた。何とも残念な話で、若し當日これが皆の前にひろげられたらまた一つの大興奮を生む事であつたらうと遺憾でたまらない。歌は

もろこゑにひとらうたへはするかのうみこたへかへさぬなみなりけり

といふので、例の靈妙な達筆で書かれてあるのである。今は表装せられて私の書齋に懸つてゐる。一生の好記念である。

大會繪葉書の第二の部は製版で失敗した故發賣を見合せました。第一は澤山あります。

社費其他の送金が殆んど全部振替に依る様になつて大變難有い。振替用紙を作る積りで怠けてゐた、近々お送りする事にしませう。

梅雨に入ります、大事にして下さい。(廿六日)

七月號

先號が題附組號であつたならば今度のは一頁組號であると思ふ。それほどに一頁から十六頁までの人々の歌には眼につくものがあつた。とりくにみな生氣に溢れて自己に驕つて居ると云つたところがある。熟讀を望む。

それに珍しい人の名も大分今號には見えて居る。潮みどり子も久しぶりだし、水鳥川春帆高島儀太郎兩君などの名には初對面の人の方が多いくらいあかも知れない。

小生は今六月は悉皆不景氣の裡に過した。朔日早々から急激な下痢と腹痛とに襲はれ、どうしてもまらないので十日から長岡温泉に出かけ、或る方法で晝夜ともに腹部を温めたところ、辛うじて止つたので、十六日妻と二番目の娘とを連れて上京、批評會に出席、二三日滞在後歸つて來るとまた早速も通りの症状となつてしまつた。單に腸カタルといふのでなく、一昨年來寄生してゐる條蟲がよほど邪魔を

してゐらしいのでその驅除法を行つたがなかくに
とれないのである。

そんな中で長岡あたりまでも原稿を持廻つて辛うじてこの一冊に纏め得たが、二三日の遅刊は免れまいと思ふ。書かうと思つた原稿をもすべて斷念せねばならなかつた。

そんな有様で、半折會の方にも全然また手を下し得なかつた。斯うすることが折角のこの企てに甚だ好影響を及ぼさぬことを知つて頻りに氣を揉んでゐるのだけれど、まさかひよろししながら筆を執つて他に贈るといふ氣にもなり得なかつた。せめて氣持よく元氣よくだけは書き度いと思つて居る。どうかこの事悪しからず思召しを願ひ度いと思ひます。従つてその趣旨書も報告も今一度掲載を見合せました。

月初めから出掛けようと楽しんでゐた旅行にも終
によう出ませんでした。これは小生にとつて最も悲

しい事でした。

二三年來の紀行文を集めた「みなかみ紀行」が此處數日中に出來上ります。今號に廣告を掲げる筈で今日まで待ちましたけれど原稿が届かず來號廻しとなりました。出版元は東京日本橋區高砂町七摩雲齋書房、發賣元は同區繪物町九紅玉堂です。村松君の民衆書房でも取次ぎますが詳細は次號に。

「山櫻の歌」の再版もこの月末には出來るといふことでした。東京での合評會も非常に盛んでした。學課の忙しい中に松山君の書いて呉れた詳しい記事で當日を偲んで下さい。なほ同書の批評をば出來るだけ多くから聽かうと思つてゐます。百十一頁の募集規定によりどしどし書き送つて下さい。

半年間の呼び物であつた互選競詠第一回の結果が發表せられました。追つかけて第二回に移ります。お仲間入りを待ちます。

題附になつた人たちは各自にその題を附けて出して下さい。一度題附になつた人を其處から下げる事

はよくくでないと致しません。たゞその月のがひどく拙かつた時は次ぎの月のを待つて合せて見る事にはします。

校正には社中して氣をつけてゐるのですが萬一誤植のあつた時は申込んで下さい。次號で訂正します。「野蒜の花」は書きかけてありながら來號廻しになりました。

小生ももう今月中位には平常の身となり得ませう。(廿七日)

八月號

寧ろ氣持のいゝ暑さになりました。先頃までは實によく降つたもので、小生の記憶では何でも二ヶ月ぶつ通しに降つた様にも思はれます。そのあとのこの烈しい暑さ故、身體にもこたへる様です。然し、眞夏のこの暑さを、小生いつそ快しとする方です。

今號もまた二三日遅れます。寧ろ快しとする方だとか何とか言ひながら、矢張り此頃の弱つてゐる身體では氣持はよし快くとも手足が充分に言ふことを聞かぬのです。それも自分のものを二三種書いて入

れたくてわざ／＼遅らせた形なのですが、終にそれすらよう果しませんでした。これなら初めから諦めてかかれればよかつたにと返らぬ愚痴はよしませう。

なつやすみ號とでも本號をば見て下さい。特に目立つてどの部がどうといふところも無かつた様に記憶します。といふうちにも夏の青葉の匂ひの様な強い、清新味が何處となしにたちこめてゐるのをば誰しもが感ずることです。静けて、而かも内に潜んだ盛んな勢ひをです。鬱然として森をなす、あの静かな呼吸をです。

いろ／＼の註文が本誌に對して來てゐます。その中には小生自身が夙うから考へてゐて速に實行したいと思つた事なども含まれてゐました。そんなでありながら小生の不健康と多忙と社の經濟状態とのためにまだ何一つ着手せずにあつた。然し頭にこびりついたさうした楽しい豫想をばいつかは實行せずにはおかぬでせうからその積りでゐて下さい。幸ひ社

の基礎も漸く確定的に定つて來た様です。沼津發行になつてから丁度まる一年目です。なほ斯うして欲しいとおもふ希望をば遠慮なく言ひ送つて下さい。

先月先々月の續きでこの月初めまで小生もシヨゲてゐましたが、この七日に村松君が東京から來て滞在、勧めつ勧められつして一緒に三河路の方を歩いて來ました。ことに小生だけは鳳來山上の鳳來寺に六日間宿泊してゐて同所名物の佛法僧鳥の啼くのを聽いて來ました。實にいゝ聲音でした。この紀行文を九月號の「改造」に書く積りです。歌も出來さうでしたが、まだ咽喉につかへてゐます。いゝ氣持で吐き出してしまひたいものです。

まごついてゐるのは小生ばかりでも無ささうです。新潮社の「山ざくらの歌」再版、摩雲讀書房の「みなかみ紀行」すべて豫定通りにゆかすいづれも一月ほどづつ遅れた様です。「みなかみ紀行」だけはいよ／＼確實にこの八月一日に出來るさうです。旅の好きな人は讀んで下さい。

自分のことばかり書きますが、この八月五日から

月一杯、小生は三人の子供を連れ伊豆の海岸で海水浴をやります。どうかして丈夫一方の身體に歸り度のためです。其處は高島富峰君の村で、宿屋の二階を借切る（と云つても六疊二室）事にしてあります。故遊びに來て下さい。沼津から發動船（日に一回正午頃發）で一時間と半かゝります。八月中一杯のたよりをば左記宛にお出し下さい。

伊豆國田方郡西浦村古宇 大谷屋方。

半折會の揮毫を半分以上、辛うして濟ませました。やれ嬉しやといふ氣持です。

社あてまたは小生あての郵便物に就いて六六頁に書いておきました。熟讀の上是非その様にして下さい。

暑中見舞を頂き誠に數有うございました。御禮申します。（七月三十日夕方）

九月號

本誌は實にいろ／＼な所で編輯される。本號は伊豆西海岸の古宇村で編まれた。百十五頁までは既に

二三日前沼津の印刷所に渡されてあるので、あと「野蒜の花」とこの編輯所便とを明日の朝の船に托して沼津へ届けられればそれで全部編輯完了の譯である。この調子ならば本號は月内に出來上るであらう。

何しろこの夏は暑かつた。幸ひに何處からも病氣其他不景氣な報知に接せず、小生自身も珍しく元氣でこの盛夏八月を子供達とこの海岸の宿屋で過して來た。昨日今日、めつきりと秋づいて、海の色空の色、對岸の山の峰々の冴えて來たのなど、そゞろに身の引緊る思ひがせらるゝ。

何々集のあたりの出來は素晴らしいものであつた。少壯氣銳の意氣が自づからにして其處に發けてゐるのを感じて快かつた。

それに比し題附組の人々は申合せた様にみなだらけてゐた。僅かに中島、毛利、三苦夫妻、のはぎ、由解、龜田、杉本、(一二の覺え落ちがあるとしても)の諸君の作が一寸眼についた位で、他はもう甘くも鹹くも無い日向水の様なものであつた。一頁組の

方にも餘り大きい顔の出来ぬ人が一人二人はあつた筈である。

どうかこれが時候のせいで、なアに少し涼しくなつて来れば……であつて呉れ、ばよいと祈らるゝ。もうこの邊の人になつたら毎月々々お役目に作つてゐずと少しは自分自身に手答へのあるなしを試して後發表する氣になつてほしいと思ふ。それにつけても高山、大悟法、黒木君あたりの馬力の凄じさを少しは感じてほしい、ではないか。

「子供の歌」がめつきり来なくなつた。今月など殆んど一二頁分しか探れなくて弱つた。先生たちや弟妹を持つ人たちにも、一層の熱心を持つて貰ひたいとおもふ。

毎月きまつて寄贈して来る新聞雑誌を毎月誌上に發表してゆくも氣が利かぬとおもひ、先月と先々月との二ヶ月に亘つて割に詳しく發表しておいた。年々二三度づつこれを行ひます。

單行本の寄贈も溜つてゐるので、これもいづれ纏

めて紹介することにします。

半年賞寄贈の申込も甚だ多く、喜ばしい。それはそうと第一回分の賞品贈與はもう滞りなく済みましたか。

互選課題の歌の拙いのも困りものだ。あんなにしようねく言つてゐるのだけれど集つて来る歌の大半は矢張り題外ればかりだ。今度の課題「樹木」に申合はせた様に蟬や蛸を配したものが七六十通あつたにも苦笑させられたが、しかもそれが殆んど全部樹木の歌でなくて蟬の歌になつてゐた。

「みなかみ紀行」は發賣間際になつて定價や發賣所（元來摩雲嶺書房は知人某君が楽しみ半分によつてゐる出版業なので販賣の煩雜を厭ひ自分では、好きな本を作るだけで發賣をば全部他に托してゐたのです）が急に變つたとやらでそれ等確定の上九月一日から間違なく市に出る相です。本號にその改正後の廣告が間に合ふかどうか此處にゐては解らないが、とにかく前號の廣告をとり消し改正後の廣告に

より註文する事にして下さい。

（中略）

今月の四日に先發として大悟法君が長男旅人を伴つてこの海岸にやつて来た。少し遅れて八日に小生、妻、それに二人の娘とが来て加はつた。大悟法君は引違へに沼津に歸つて留守を預ることになり、その後數日親子五人して賑かな朝晩を送る事になつた。

そのうち小生は釣を始めた。海の釣は初めての経験であつたが、川の釣よりも案外に容易く、最初の日から既に數疋を上ぐる事が出来て面白くてたまらず、晝だけで足らず夜も舟を頼んで出かける様になつた。或る日は宿の主人親子に高島君と小生と四人して出かけ半日に百三十尾から釣りあげたこともあつた。

もつとも小生の釣るのはいはゆる磯魚（此處では根の魚といふ、海底に岩石の散在してゐる場所を「根がある」と稱し、その岩石の蔭に棲息してゐる種類の魚をさすのである）で釣りいゝにも釣りいゝのだ。カサゴ最も多くメバル、アカギ、オコゼ、モ

ロ、ボンギイ、アカベラ等其他怪奇な名を持つ種類が釣れて来るのである。これら根の魚は殆んど全てが見ごとな色彩を持つて居る。主として紅の色が深く、綠これに次ぎ、黒、紫、茶その他、實に複雑した色どりを帯びてゐる。従つて形にも面白いの多いが、味はあまりうまくない。此處の入江は一帶に深いのだがとりわけ古宇から大瀬崎にかけての海岸は岸から直ぐ二三十尋の深さに及んでゐる所が少くないさうだ。その深みからくるくと手剛い手應へで上つて来る時の氣持と云つたら全くないのである。暑いも、皮膚が剥げるもあつたものでなく、全く物をいふも惜しい様な時に會ふのだ。舟には生蠶がしつらへてあり、それに釣り溜めて、サテ時間が来ればその生きたのを掬ひあげて、これが刺身にこれは煮肴にと料理して一盃を傾ける。それが丁度魚のつき始めた時などは片手に盃（と云つても大きな飯喰茶碗）を持ちながら片手には絲を持つてピク／＼とやつてゐるのである。いよ／＼ゴクツと懸つたとなれば大急ぎで片手の液體を飲み乾

して糸を手繰る。糸のさきには一尺大のカサゴが大きな口をあいて徐ろに潮の黒みから浮き上つて来る、……

根魚ばかりでなく、水面近く泳いでゐる魚のシイラをも釣つた。寄つたとの報知があればメジカ、シブワ等の漁にも出掛ける用意がしてあるのである。

そんな間に悲しいかな選をやらねばならず沼津と同じく夜なかの一時二時に起きて机に向ふ場合が數あつた。ために、斯んな時こそ少しは平常の御無沙汰お詫びに諸方へ手紙でも書けるだらうと用意してゐる有様である。それに此處に来てからも澤山お便りを頂いたが、多くは拜見しつばなしで、誠に申譯なく思ひます。もう暫く(妻と娘とは十四日だかに歸り、旅人は昨日歸り、今は小生獨りです)居てゆく積り故、その間に書いたら書きますが、先づむづかしいものとお許し下さい。出来たら來月十日頃までもゐたいものと考へてゐるのです。

お蔭で身體はめつきり丈夫になりました。そのせるか幽かに歌ごころなどの動くのをも感じます。久しぶりに五七五と指を折つて作つて見る氣になるかも知れない。今日は隣村の人から蛹を貰つた、夕方かけて黒鯛釣りに行かむとぞおもふ。
では御機嫌よう、諸君！(八月廿四日、伊豆古宇村にて)

十月號

何とも恐しい事であつた。

最初は、あんなにひどく揺られながらもまだ普通の地震といふ氣しかなかつた。二日に伊豆から歸つても、物々しい家族たちの避難振を眺めながらも、まだ私には何處か浮いた遊び氣持——さうした變化を喜ぶ子供らしい好奇心の方がともすると浮いて出てゐた。二日の夕方になつて何となくだ、ならぬ噂が何處からとなく傳はつて來た、東京が斯うださうだ、横濱が斯うだ相だといふ様な。然し、それでもまだそれを打消したい遊び氣持が無いとは言へなかつた。

三日になつてや、眼を見張らねばならなくなつた。停車場に出かけて買つて來る名古屋大阪地方の新聞紙の掲げたデカ／＼の大見出しが先づ唇を緊めさせた。これは矢つ張りたゞ事ではなかつたのだ、と初めて襟を身を正さねばならなくなつて來た。四日となり五日となると、たゞもう呆然として手を束ぬるのほかはなかつた。

それでも、さうでありながらなほ何處か遠い所に起つてゐる出來事の様な氣がしてゐたのであつたが、やゝ自分に返つて考へる餘裕が出て來ると、もうとても居たまらなくなる衝動を感じ始めた。

「ひとごとぢやない！」

みんな自分に直接千萬な大事であつたのだ。友人の身の上、自分の爲事の上、またわが日本の國家の上に、びし／＼と響いて來る大變事であつたのだ。

「どうしよう！」

我等は漸く全身的になつて周章へ始めた。

「まつたく斯ういふ事にならうとは思はなかつた！」

焼かれ、追はれた人と雖もまだ恐らく斯うした氣がしてゐるに相違ないと思ふ。まつたく恐ろしい出來事であつた。

謹んでお互ひの健康を祝し度い。

被害地一府四縣下に我社の社友が二百六十七人(しかも大部分は東京横濱地方)ある。その中で只今のところこの事變のために生命を失つたのは唯だの一人である。その一人は小生としては個人としても親しい友であつた。その友人には氣の毒だが、その一人だけで濟んで呉れた事を残り二百數十人のために先づ／＼よかつたと思はざるを得ないのである。そして無事に濟んだお互ひのために謹んで此處にいやさかの祝聲を上げたいとおもふのだ。

ほんとによく助かつて呉れた。まつたく奇蹟的によく助かつた。

(中略)

小生等を初め創作社のこと、東京横濱の人々の事を、どれだけ他地方の人たちから心配して頂いたか、

全く言語の外だ。人によつては毎日重ねての問合が来た。流石の小生も今度は怠けて居れず、一々その御禮を書いて出した。見舞の言葉がまた他の時の見舞の言葉と全く異つてゐた。

東京横濱の人たちに言ふ、君たちの事で他の社友たちがほんとはどれだけ氣を揉んで呉れたか見てゐて苦しい程であつた。どうか蔭ながらも、感謝して下さい。

實は君たち罹災者の状況を報ずるを旨としてこの紀念號を作る事を思ひ立つたのも一つは右の並々ならぬ同情心に動かされてゐたのだ。

今號を斯うした紀念號といふことにして發行した。賛成を得る事とおもふ。

突嗟の編輯で、思ふ様にゆかぬ事が多かつたが、それにしてもみな弱り勞れた身體でよくこそこれだけのものを書いて呉れたとおもふ。感謝せずにはゐられない。他にも數通の寄稿があつたが、發行を急いだので止むなく割愛した。悪しからず思つて下さい。

來號には本號分として送られた詠草をも合せて拜見し、掲載する。

何しろ仕合でした、印刷所も無事で、少しの遅刊を見るだけで十月號を出す事が出来た、多分休刊だらうとの問合を數十通受取つたのであつたが、直ぐまた來號分にかゝります。來號は極めて緊張した普通號として發行されます。互選競詠も、従つて一月づつ遅れる事となつた。

次頁にある社告をよく見て下さい。

「その三」の終りにある様に八月廿四五日以後に振替により拂込んだ人に言ひます。社費の届くごとに必ず社の會計部から受取の葉書を出して居ります故、その届かない人の分は途中紛失になつてゐるのです。受取證で交渉すればどうにかならうと思ふのでそれをこちらに送つて下さい。

折も折の集金には弱つてゐる。どうも大變な手數だ。どうか社費をば滞らせずに下さいと此際に言つておきます。

然し、止むなき場合は止むを得ない。一度入社して退社の申込のない限りはよし滞つても送本其他社友としての待遇に變りのない事をも念のために言つておきます。

賣残りの繪葉書大特賣をやります。日常用のために奮つて買つて下さい。送金は都合で社費と一緒に時でも宜しく、葉書一枚で申込まれるば送ります。

振替停止の間の送金は御手数乍ら小爲替(書留)に願ひます。

多數の出版店の焼けた中に新潮社は本社も印刷所も残つたが、其處の製本所だけ焼けた。運悪く丁度其時其處に「新潮」の十月號と小生の「山さぐらの歌」の再版とが出来上つて積まれたばかりの所であつたさうだ。「みなかみ紀行」は恐らく全部焼けた事と思ふ。しかも本は夙うに出来て居り、例の販賣店のいきさつから奥附だけ附け變へ様としてゐた所であつた筈だ。これは小生自身一目も見ずに葬り去つたわけである。原稿としても二度と手に入らぬものがその

中にはあつた。折も折、アルス書房から同じく小生の「靜かなる旅をゆきつゝ」の改版二千部が出来て恐らくまだ市内の本屋へは廻らなかつたらうと思ふ所に火だ。これは見本だけは小生方にも来てゐた。今四五日たてばこの三種の印税が来る筈で、例にない賑ひを創作社に見ようとしてゐた所へ、ドシン、ポウツと来た。笑ふ事も出来ない。

イヤ、小生など矢張り身を以て逃れたに等しい立派な罹災民の一人であつた。沼津にこそ住んで居れ、原稿稼ぎの生活の根源は全く東京にあつた。其處が焼けて了つたのだ。

それにしても餘震の執拗さよ、一月を経た今日なほ夜となく晝となくやつて来る。まだ小生等には家があり、着物がある。段々寒くなるに、假舎住ひの人達はどうであらう。

終りに今回の事に際しての御同情を繰返し感謝します。罹災者一同に代つてもお禮申します。どうか

お互ひに勞れ度くないものです。(十月二日早曉)

十一月號

先號は散文ばかり、今度はまた歌ばかりの一冊が出来た。歌も並大抵のものではなく、みな力一杯のもののみである。こんなに一度に讀まされては肩が凝るといふ人があるかも知れない。

もつともと思ふ。

然しさういふのは實は僭越である。一首々々(小生はこの數十倍の數を見てゐるわけであるが)讀みながら最初は誠に煩はしくも思ふがやがてはいつか眞剣な氣持になつてゆく。單に「歌」といふでなく、此處に一つ一つの、一人々々の「生活」があると思ふからである。肩の凝るといふ贅澤な人は全部と云はず、適宜の數だけの人の作を引いてそれぞれに熟讀して見るがいい、必ずまた小生と同じ氣持に落ちてゆくに相違ない。

然し、また思ふ、何處まで行つてもこれでは實は困るかも知れぬ。もう一步進んだ處に歌の境地が在

る事をお互ひに自覺したいものである。歌が單に人生の遊戯や慰樂や記録に留つてゐる事は、まことは弊に耐へない事である。全部ではなくとも一部の人たちだけになり是非この覺悟があつてほしい。

前號の評判は素晴らしいものであつた。

平常二行位あしか書かない中央地方各新聞の新刊紹介欄が今度は殆んどみな十行から十五行を費して書いて呉れてゐた。ほんとうにいい記念であつた。

來號はまた悲しい號になる。消息欄に出てゐる様に千葉縣の鈴木菱花君が夢の様に死んでしまつた。枕許を通つてその阿母様すら氣附かれなかつたほどの不意な眠りを遂げたのである。同君の人をおもひ、久しい間見馴れて來た歌を思ふと、われ知らず涙は落つる。

來號を同君と、先に地震でなくなつた横濱の金子花城君とための追悼號としたい。何しろ今は郵便のだらしなき夥しく、千葉沼津間の電報が片道三日

問を要する有様で同地方とも、東京とも、一向に急な打合せがきかないために、どんな風に編輯することになるかまだ判然してゐないが、是非この様にする積りである。なほ、來月早々小生も募參にゆき、東京方面の人たちとも逢つた上、しつかりした事をきめる。

地震騒ぎの後に斯うした事に出會つたため心は一層に驚いた。何とも言ひ得ない氣持でいま一杯である。

振替がまだ停つてゐる。いつ動くかそれも解らぬ。社の經濟がすつかり行詰つてしまつた。押賣をする様でもあり、哀れみを請ふ様でもあるがどうか、表紙裏廣告にある繪葉書を此際是非買込んで頂き度い。社友全體から一人で甲乙いづれかの一部を買つて貰ふと社の一と云つても印刷所の、機械の廻りが非常によくなるのだ。苦心を察して是非さうして下さい。また、これら其處等に書き散らして貰ふ事は「創作」の宣傳にもなるわけだ。

地震に就いての御見舞を其後も諸方から頂いて恐縮した。個人からも支社からもあつた。殊に京都大阪神戸地方の人達の分をば坂部君が纏めて態々持つて來て下された。感謝に耐へなかつた。

夜半から起きて机に向つてゐるともう随分と冷える。小生は明日發で甲州信州にかけ短い山巡りをやつて來る。せめてもの心やりである。此秋は九州が奥州が大きな旅行を計畫してゐただけだと駄目になつてしまつた。では御機嫌よう。(十月廿七日朝五時)

十二月號

追悼號といふほどでもないが、本號には金子鈴木兩君の追悼記を主として載せた。これだけを讀んでも兩君の面目は多少誌上に映つてゐること、おもふ。謹んで兩君の靈を弔ふものである。

いま二三の人が執筆するわけであつたが、矢張り騒ぎの後で落着かぬらしく、最後の締切までに間に

合はなかつた。記事のうち、高久君の「最後と葬儀」とは當時同君から来てゐた三通の手紙から抄出して出したものである。無断で斯うした事を同君にお詫びする。

なほ、金子君の歌を集めて出す筈であつたが、あまりに六號活字ものが多くなるので來號廻しにすることにした。

鈴木君の歌は數も非常に多く、明け暮、それのみ終始してゐたといふ風の人であつたので別に「遺稿」として一冊の歌集を出すことになつた。別項社告の通り、豫約出版である。一枚の葉書を書く手数を面倒がらないで即時に豫約方を申込んでほしい。遅くとも來年の正月いっぱいには製本出來にしまひたいと思つてゐる。この人の短い一生がさうであつた如くに、極めて清淨な香氣を持つ歌集が出来ることゝおもはれる。

追悼記(六號もの)が多かつたため、平常の一頁組、題付組の人たちに我慢して貰つてそれらの歌を全部

來號廻しにしてしまつた。甚だ相濟まないが、許して頂き度い。これは一つは、來月は非常に印刷所のごむ月だし、締切をはずすと繰上げる必要から新年號の豫備としてとつておいた形もあるのである。これらの人たちはよく怠ける様だが、新年號分は右の通りで締切を急ぐから、その積りで新作をも急いでよこしてほしい。

舊い分の振替がまだ動かない。お役所の爲事に對して愚痴をいふのも賢くないが、随分と困つたものである。

それから甚だお手數で濟まないけれど九月一日前に拂込まれて(集金の分も普通拂込の分も)本社の會計部から受取書の行かぬ人たちは途中で紛失したものですから此際急いで各地それ〴〵その振替を取扱つた郵便局に對して申告といふことをして下さい。郵便局に行けば申告用紙もあり、手續をも教へて呉れる筈です。申告する期間は十二月末日限りですからそれに遅れぬ様にして下さい。十月號社告で

送つて頂いた受取書はこちらでは效がない相で近日送り返します故、右の申告書に添へて出して下さい。

誠に面倒至極の話で弊に耐へないが、如何とも致し方がない。若しこのめんどうを厭はるればそれだけの火事に會つたものとして今一度改めてそれだけの社費を拂込んで下さい。因果なことに折も折丁度その八月末に各個人に届く様に八百圓餘の集金が出てあるのでそれが悉く宙に迷ふとなると社として甚だ難儀な立場に陥るのです。

九月一日以後に拂込まれたものは途中で停滯してあるだけで、振替局の開始と共にいづれこちらに届くものらしい故、右の手續はいりませぬ。

繰返して言ふ、どうか社費をば滞らせずに下さい。集金だの何のといふ面倒はつくづくイヤになりました。帳簿を前に、途方に暮れてゐる大悟法君を見るにつくづくさう思ひます。

不景氣な話をよして此間の旅の話でもしませう、

頁の都合で行數が随分あるから。

地震騒ぎのあれこれですつかり頭を痛めてしまつた、息抜きに、無理をしても一寸其處等を歩いて來よう、と出懸けた今度の旅であつた。最初はせい〴〵十日かそこらの豫定で出かけたのだが、行くさき〴〵が案外に深い山の中で、なか〴〵地圖を相手にきめた通りにゆかず、十七日目に漸く歸つて來た。それも四五日を費すであらうと思つてゐた東京滞在を唯だの一泊にして歸つてそれであつた。

大體は本號の「旅信一束」で解つてゐるであらうが、兎に角面白い旅であつた。幾つかの湖水と、幾つかの高原と、なほ幾つかの山岳、溪谷、森林その他をその間に見て來た。そして親しい友だちとも多勢逢つて來た。

旅信は毎日必ず一度つづは書いたのだが、整理されたのを見ると間に二三日落ちてゐる。途中かこちらかで失はれたものらしい。

最後に大澤君と別れたのは九日の朝で霜柱が草鞋を埋めてゐた。實はその前の日別れるわけであつた

が、野邊山が原のとつばなの、千曲川に臨んだ崖の上に一軒だけ立つてゐる茶店で圍爐裡に草鞋を踏み込み、いはゆる草鞋酒といふのを一杯飲んで別れようとするとい鼻先に見ごとな雉子が一羽下つてゐた。「ヤ、素敵々々」とそれを料理させるうちに勧められて座敷に上り、到頭其處に泊る事になつたのであつた。

東京に着いたのは十二日の夕方五時過であつた。豫告しておいた通り谷中の大村君の宅に行くと、「やア」と云つて出て来たのは主人でも文子さんでもない地崎喜太郎であつた。次いで中島花桶も飛び出して来た。聞けばもう一週間も前から、今日は来るか明日は来るかで、大村君の宅には毎日四五人から十人位の人が寄つて私を待つてゐたのださうだ。而かも其處には沼津の留守宅から三通の電報が来て待つてゐた。長男旅人が足に怪我して入院してゐる直ぐ歸れ、といふのだ。直ぐ其儘東京驛に出て夜汽車で歸らうと思つてゐる所へ長谷川銀作がやつて来た。私の顔を見るや否や、キリ／＼と顔の筋肉を動か

したかと思つると其處に突つたまゝ物も言はずに睨みつけてゐる。これは確かに擲られる、と私は思つた。折からまた思ひがけない黒木傳松が這入つて来た。彼はいま沼津からやつて来たのであつた。聞けば旅人の怪我ももう山はすぎた、安心していゝといふのだ。やれ／＼と幾らか四邊の空氣の柔らいだ所へ地崎君が「大關」を擔ぎ込んで来た。そして同君に留守番を頼んで外出してゐた文子さんも歸つて來、主人公も歸り、高久君が來、漸く笑聲が部屋に起る様になつて辛うじて袋叩きからも免れたのであつた。

旅人の怪我は中學校の遊動圓木でやつたもので初めはたゞ關節が外れたものと見、接骨醫にはめて貰つたのだがそれでも二三日非常に痛がる、他の醫師に診て貰ふと骨に痛みがあり血管も大分切れて血が其處に溜つてゐる、もう一二日遅れ、ば大事の所であつたといふので外科専門澤博士の病院に入れることになつたのださうだ。幸ひ今日では大いによろしく、片輪にもならず済むことになりました。

サテ、本號で今年も終る。實に何や彼や事の多い一年であつた。お蔭で私など殆んど一首の歌をもよう作らずに過した。來年はどうか斯うでなくてほしい。

然し、雜誌としてはよく行つた年であつた。年に一度の休刊もないなどはわが「創作」氏にとつて生れて初めての事かも知れない。實は今號など随分怪しかつたのだが先づ／＼無事にゆきました。新年號もせい／＼うまくやるつもりです。

留守したあとゝ、二三雜誌新年號の原稿書き、續いては本誌新年號のためとて面會謝絶の張紙をして晝夜兼行の忙しさです。無沙汰許して下さい。(十一月二十八日朝六時半)

大正十五年

一月號

▼十月二十八日午前六時沼津驛を發し、大阪、岡山、伊保庄、八幡、戸畑、福岡、長崎、大牟田、熊本、鹿兒島、都農(日向)、別府、京都等に立寄り、十二月十七日午後四時半沼津驛に歸つて來た。五十一日間の旅であつた。その間たゞの一日として休養せず、間斷なく身心のいづれかを働かしてゐた。

▼不思議に身體が元氣であつた。歸つて五六日は寢込むことゝきめて來たのに、歸宅の翌十八日、早朝から酒を飲んで留守居漸を聴きながら午後の二時に至り、つぶれて睡り、熟睡して翌朝に及んだ、起きてみれば案外に頭がいゝ。「占めた」とばかりで直ぐに机に向ひ爾後晝夜兼行で今日に及んで居る。ために當然の遅刊と自他ともに豫期せられた本號をも悠々と期日までに出すことを得るに至つた。まつたく望外の幸と謂はねばならぬ。

▼野元純彦、高橋希人の兩君を所謂一頁組に推薦した。兩君とも夙くから異色ある(と共に甚しく出來にむらのある)歌を詠んで來た。どうか兩君によつて、近來沈滞の色を見せてある同欄の歌に生氣あらしめたいものである。この希望は決して小生一人の希望ではないとおもふ。敢て兩君に言ふ所以である。

▼平賀春郊、野上草夫、大村松之助などいふ珍しい名の見ゆるも新年號らしくていゝ。小生等夫婦がよう出さないで残念だが、來號には澤山出します。

▼題附の方にも新顔が見えて居る筈である。これは過去とか現在とかより専ら未來に望みをかけての推舉であると云ふが當然かも知れない。この人たちにもどうかしつかりして貰ひたい。題附組のだからしなさばこれは全く話のほかの様に見受くるので、誰か中で一人でも二人でも活躍して呉れると自然多少とも全體にわたつて動搖を見るかとおもふ。その一人二人の出現を一日も速くと期待するものである。

▼他の欄に就いてももう少しあれこれしたいことがあつたが、どうも急には行かない。順次に面目を改

めて行く様にと心がくるつもりである。とにかく大正十五年の「創作」は今までのそれと確かに違つて來るとだけは信じて下さい。

▼大橋松平君が社中の歌の月目をやつて呉れる事になつた。これは一年も續くかも知れない。

▼表紙を替へてはといふ意見を折々聞くが、木版や何かのことを考へると、矢張りこの方が無事でいゝ。なほ、今まで表紙に出して來た歌は發行近くに寄贈を受けた歌集から、寧ろ新刊紹介代りとしてその季節ににふさひさうな歌を抜いて出したのであつた。今年度は主として古歌を出すことにならうと思ふ。

▼久し振に社中全體にわたる歌會を開くことになつた。今度は全然お祭騒ぎ抜き、落ちついた歌會にしたものである。二三十人ならば無理でも創作社にお泊めしたいが、それを超ゆれば他に宿屋をとらねばならぬ。宿泊料(參圓位)の用意をもして來て頂きたい。なほ、秋には吟行會をも催す。實は初めこれだけの開催にしたいと思つたのだが、それだと出席出來ない人が多からうといふので、併せて春の

歌會を開くことにしたのである。出來るならこの吟行會の同行の多いことを祈つておく。休暇や、お小遣のやりくりの都合もあらうかと早目に豫告しておきます。今から何彼と用意しておいて下さい。

▼中國九州行はなるほど大變な旅行ではあつたが、然し面白いことも面白い旅であつた。そしてどういふわけだか妙に餘裕を持った忙しい旅であつた。それこそ小便に行く時間(はどうか知らないが正直髪をつむ時間はなかつた、五十日を超ゆる間にたゞ一度何處かでつんだゞけであつた、歸つて來ても同じくで蓬髮耳を掩ふたがまゝにいまこれを書いてゐるのだ)をも惜んだ癖に悠々として鴉島に漕ぎ渡り、阿蘇にも登り霧島にも登り(但しこれは中腹の温泉まで)四時間を汽車にゆられて薩州は荒崎の鶴をも見にゆき(但し汽車の中で歌會を開いた)十三里間自動車飛ばして指宿温泉に湯入りにも行つた。來號印象記を書くが今度は手が及ばなかつた。細君も續けて書くさうだ。

▼旅行中お世話になつた人たちに呉々もお禮を申し

ます。右の始末でまだ何處へも葉書一本の禮狀をさしあげず、何とも申譯ありません。正月になつたらば書くつもりでありますが、とりあへずお詫のみ申しあげておきます。

▼小生の第二選歌集(第一は新潮社の「若山牧水集」)『野原の郭公』が改造社から出た。『白梅集』より四十五首、『さびしき樹木』より十八首、『溪谷集』より八十八首、『くる土』より百六十八首、『山櫻の歌』より百九十一首、合せて五百十首が収めてある。よく読んで下さい。來號廣告を出します。

▼賀狀をば全部失禮します。(廿六日)

二月號

▼題附組が珍しくよかつた。誰がどうといふことはないが、總體に生氣を持つて來た。今迄この欄には肝心のこれが缺けてゐたのだ。

▼一頁組にもそれは言へる。相當讀みごたへのするものがあらうと思ふ。熟讀を望む。約束により小生も旅中の歌を洗ひざらひ拾ひ集めて並べてみた。酒席で浮れて朗詠したとか、この土地でのお作を是非

などと短冊をつきつけられて作つたとかいふものばかりで、要するに即興の作である。然しまた即興には即興の味があつてもいゝ筈である。御批判を願ふ。

▼九州めぐりも續きものばかりになつて氣の抜ける虞があるが、二人とも氣忙しくて、それこそ尻をおちつけて書いてをる餘裕が、いまないので。但し、來號には二篇とも書きあげます。

▼歌會出席の申込もぼつ／＼とある。出来るなら來號に全部顔を並べたいと思ふので手間どらないで、すぐ申込んで下さい。あの人が行くなら自分もといふ場合がありませうから。婦人たちだけでも社内に泊つて貰ひませう。たしかこの前の大會の時もさうであつた。但し夜具乏し。着たまゝ睡る覺悟肝心なり。秋の吟行加入申込ももう二三あつた。

▼白旗君は何とも氣の毒のことであつた。あんな不幸な、そしてきれいな人が亡くなつたとおもふと、どうにも氣持の持つて行きどころのないのを感じるのである。知る知らぬに係らず、弔慰金募集に参加して頂くことを切望します。この金で小さな石碑で

も建つることにしようかと初め考へたが、他に必要もあらうから金の使途はすべて未亡人と同地の社友村田、佐藤君たちの意見に任せたいとおもふのです。

▼サテ、茲に偉大な報告を齎らす機會に到達した。

『詩歌時代』の創刊、即ちそれである。

▼斯うした雑誌を出したいものだと思ふことは随分と久しかつた。たとへば本誌などにしても、單に『創作』だけでなく、上に「歌の雑誌」といふ冠詞をつけねば通りがわるいといふ風なことは小生の永く不快に感じて來たことであつた。が、後ではそんなことはどうでもよくなり、もう少し眞面目に、根本的に考へらるゝ様になつた。即ち詩歌そのもの、根柢に就いて考へらるゝ様になつた。我等にさう大きなことは言へないまでも、少くもその時代々々の各詩型に據る日本詩歌界の鳥瞰圖を作つておくだけでも決して無意味ではないと思ひ出したのである。

▼然し、小生にとつてはなか／＼に手に餘る爲事であらねばならぬ。酒に酔つてか、極く内輪の人に對

しては折々この話を持ち出してゐたが、サテ實際に着手するといふ勇氣は出なかつた。ところがこの一兩年、やれ半折會だやれ普請だといふごだ／＼騒ぎが續いて起つた。よし、ついでだ、やつて見ようと、いふ氣になつてしまつたのである。なつて見れば案外に膽も据つて、この分ではどうやら押し通せさうになつて來た。

▼その第一は今度恐る／＼この相談を持ち込んでみた先輩や友人たちが、小生の豫想以上、イヤ以上などといふ言葉は當嵌まらぬ程度に、この計劃を喜んで下されたことである。そして激勵もして頂き、進んで援助もするからとのことであつた。これで全く小生の腰は据つたのである。靜かな呼吸をつきながら、徐ろにこの事業に手を着けたのである。

▼また、このために兎角引込思案の様に見られて居る創作社が多少とも世間的に出て行く事にでもなれば幸ではないか。このために諸君の眼界が廣くなり高くなり得るとすれば、大きな仕合せではないか。また、斯うした田舎からこれだけのものが出る様に

なつたといふことも、愉快ではないか。更に、このために創作社が大いに儲けるやうなことにでもなれば、なんと愉快なことではないか。必ずさうしようとする畫策と決心とが既にちやんと出来てゐるのである。

▼兎に角、現社友一千名の協同事業とも思つて力を添へて下さい。それを豫期しつゝ、小生はいま大きな山河の前に立つてゐるのです。

▼諸君の知れる限りにこの事を披露紹介して下さい。そして投稿購讀を勧めて下さい。購讀は直接購讀です。店には出しません。なほ詳しい事は來號廣告します。菊版百六十頁、定價六十錢の豫定です。

▼諸君自身にも勿論それをやつて下さい。眞面目に勉強するつもりで各種の欄にも投稿してごらん下さい。特別懸賞の歌の投書も自由です。たゞ相當の位置に在る人はこの方は出来るなら遠慮して下さい、ともすると小生困却する場合に出會はないとも限らぬから。

▼このため社内はいま戰場です。細君初め大悟法君

達の眼はめい／＼引き吊つてゐます。物凄い光景です。但し小生だけはの中に在つて依然「のむとねる」の修行に悠々と月日を消してゐます。元來この事業は小生はただ最初計畫し、且つ大體の基礎を建つるだけで、そして今後編輯の主な相談に與る位ゐる事で、他一切は大悟法君其他に頼む事になつてゐたのです。此處一二ヶ月間はさうも行くまいが爲事がおちついて來れば半折會當時等に比べて小生はずつとらしくなります。そして『創作』の編輯に専念します。もう少したてば、小生にも歌など出來だしませう。

▼東京の諸君にも遠くから加勢して貰つてをります。『詩歌時代』に關する東京支社は東京市外、世田ヶ谷太子堂三〇一、中野秀郎君方に置いてあります。彼も亦た夜の目もねずに駆け廻つて居るのです。そして、萬事は實に都合よく運んでゐるのです。

▼先づこれで大體の報告とお願ひとは濟んだ様です。最後に一つ、あれこれで創作社はいま非常に錢の必要を感じてゐます。社費の滞つて居る人はどうか

折返し拂込んで下さい。今度は集金郵便は出しませぬ。なほ、これは申兼ねる話ですが、滞つてゐなくとも餘裕のある人々に、此際半年なり一年分なりの社費追加拂込をして頂くと大いに難有いのです。特に御依頼申します。

▼午前二時に起きていま五時廿分、珍しく春めいた雨の音が家を包んで、灯影はあきらかに澄んでゐます。小生をろ／＼と朝の修行にとりかゝります。書齋に爐を切つたので大きに都合がいゝ。御覽なさい、藥灰の黒きが中に鐵瓶の湯はくらく煮立ち、樽から分けて來たものは透明な壺に満ちて肅然とわが膝の側に立つてゐます。お膳には烏賊に獨活のぬた、煎豆などが備へてあります。豆は昨夜が追儼だつたのです。

▼では御機嫌よう！(二月四日早曉)

三月 號

▼ツイこの間、創作社だよりを書いたばかりとおもふに、もうまたこれだ。實に速い。もつとも先號少々遅刊、今號は幾らか早目に出るといふ様な關係も

あるであらう。

▼可笑しなもので、題附組が段々とよくなつて來る。歌に「動き」がついて來た。蠢動だか、活動だか、とにかくに動いて來た。見る方でも誠に張り合ひがある。新進氣鋭、最も活氣に富まねばならぬ筈のこの欄なのだからこれが本當ではある解だが、どうしたものが今までその逆であつた。來號、本欄の批評を中村柊花君が書いて呉れることになつてゐる。

▼それに較べて、一頁組は出來がわるかつた。僅かに高橋希人、三苦夫人、大橋松平の諸君の在るあつてやゝ生色を保つてゐる形だ。さう毎月佳いものばかり出來やう筈もない道理だが、矢張り出來が落ちると淋しい。

▼出來が悪かつたといへば春光集、ことに岫雲章あたりも今月はひどかつた。女流諸君のもどうしてか今月見劣りがする。正月であつたせゐかも知れない。

▼それに比し、批評雜録は賑つた。來號あたりから斯うした方面に次第に力を入れてゆきます。考へてゐた事が、徐々ながらに實現出來さうに思はれて、心

たのしい。

▼小生等の九州紀行、牛の涎のいつ盡くべくも見えぬ形だが、我慢して下さい。書きかけて中途でよすがの今までの癖だったので、今度は二人とも多少意地になつて書いてゐる傾向があります。時事問題といふでもないのでもア氣長く読んで下さい。

▼大會の申込、これも少々牛涎の形を帯びてゐる。出ねばならぬ筈の人でまだ黙つてゐるのがかなりある。まアこれでも締切日になつてみればわからぬといふところにしておきませう。それでも、かなり珍しい顔ぶれも見えて来た。何とかいゝ會合にしたものである。丁度創作社の附近から田子の浦あたりにかけて桃花の盛りです。これに富士が晴れて呉れ、ば先づ上々です。會場は多分先年どほり臨川館になるでせう、豫告には假に創作社としておきますが。

▼歌會の詠草をば必ず期日までに送つて下さい。當日持つて来たりなどしても受附けませぬ。アノ壁や欄間に張りつけたのを見て歩くなどといふのは何と

も不快ですから。三月二十日できちんと締切り、綺麗に印刷します。そして出来るなら諸君がまだ家を出られぬ前にお届けし、汽車の中などで見て來られる様にしたと思つてゐます。講演はいま交渉中です。講演といつてもほんの内輪の座談會の様なものになりませう。(寫眞機を持つてゐる人は持つて來て下さい)。

▼白旗君の弔慰金、おもひのほかの集りかたで、非常に喜んでをります。斯う集つてみるとその中から矢張り石碑の小さいのでも建て、おきたい氣になります。石川啄木君の、様に大きいことにはとてもゆかぬから自然石の極く小さいのに同君の歌でも一首刻みつけておいたらと思はれるのですが、とにかく目下酒田の方と相談中です。六十三頁に載せた同君の歌は酒田の新聞に出たものさうです。村田佐藤の兩君から送つて來ました。『松の落葉』は小生が忙しい間に、大正十年以後の作から引いたものです。同君の面目はこれだけに見てもよく解るとおもふ。叙景等より人事を詠んだものに佳いのが多い。就中、

叙事的な詠みかたになか／＼優れた手腕を示してゐる。かなり突き込んだことが歌つてあつて而かもきたなくない。何處か飄逸なところがある。耳の聞こぬ癖に上品にこ／＼してゐた故人の風貌が偲ばれてならない。とにかくに惜しいことをしたものである。なほ、使途いづれにせよ金は三月廿日の最終の締切を待ち、纏めて酒田の方へ送ります。

▼『詩歌時代』もいよ／＼本舞臺に出て來ました。本欄の内容は本號廣告にある通りです。既に原稿を頂いた方も澤山あります。が、これはこちらの豫定の三分の二に當ります。まだ、今後に承諾を受くるのが數あります。これだけを三號に分けて收めるのだが、どうして收め得るか、今から心配です。

▼とにかくこの顔ぶれを見ても今度のこの企てがいかに各方面に厚意をもつて迎へられたか、解るとおもふ。今までには無かつたことです。それだけに編輯者發行者は急に肩の重きを覺えてゐます。白狀すれば『斯うまでとは思はなかつた』といふ氣持です。ほんとにどうかして立派な、意義のある雑誌にした

いものです。

▼沼津の在に或る三等郵便局がある。その郵便局に行く郵便物より創作社に來る郵便物の方が多いため、今評判になつてゐます。イヤ全く一人の配達夫がかりきりの様な有様です。これも『詩歌時代』がいかに江湖に好反響を與へたかといふことを語つてゐます。どういふのがこの投稿の中から出て來るか、それも楽しみの一つです。第三號分特別懸賞募集をば本誌來號に發表します。

▼諸君もさかんに投じて下さい。どうも今迄來てゐる中には知つた名前が少い様だ。勉強する氣で詩なり何なり出してごらん下さい。たゞ『創作』の原稿(つまり詠草)と『詩歌時代』の投稿とを同封する事は嚴禁です。必ず封筒を別にし、規定通りにして投じて下さい。

▼初號分締切が二月廿八日、而して初號發行が五月一日になります。これは一に第三種郵便の許可を得たいためです。本は四月早々出來上ります。販賣は堅實を期するために大賣捌の手を借らず、直接購讀

にします。しかも豫約出版風に前金の拂ひ込まれてある部数だけを印刷する事にしてあります。商賣としては甚だ身勝手な、そして氣の小さいやりかたですが、素人の手で、そして纏つた資本のない場合、斯うするよりほかないのです。不自由でせうが以上の様式で註文購讀して下さい。振替用紙をさしあげます。但し強制執行では決してありません。自身でなく、他に御紹介下さるも難有いのです。定價普通號一冊五拾錢ですが初號から三號までを特別號とし、毎號特價六拾錢、三冊分壹圓八拾錢を此際特に郵税共壹圓五拾錢に割引きます。大勉強です。この特別號の間だけでも見ていたゞくと難有い。この購讀申込締切は三月三十一日限りです。なほ、半年分(即ち本年十月號までは)右の特別號を入れて金參圓、一年分同じく金五圓八拾錢です。

▼なんだかすつかり商賣人になつてしまつて少々變な氣持だが、これも暫く止むを得ない。さアいらつしやい。

▼じゃうだんは抜き、先號に書いた創作社の社費の

事で蔭ながらの援助を頂き、感謝してゐます。速く苦しい金の話を抜きにする時期に達したいものです。もう直ぐでせう。

▼小生此頃醫者がりおとづれて血壓の検査、尿の検査、心臓腎臓肝臓などの調べを受けてゐます。積悪の酬い、漸く其處等に表れんとすといつた形でせう。まだ具體的にどうといふ程ではないが兎に角今までになかつた身體の調子です。四月の大會も延ばしたらどうだといふ注意をも受けますが、それ程の事もありません。たゞ、一生懸命になつて目下節酒最中です。病臥するよりなほ苦しい。以上。(二月廿四日朝五時半)

四月號

▼本號一頁組の揃ひかたは見るからに快い。各自の面目は愈々はつきりし、しかも眞剣になつて來た。いゝ心持で見るといふより、見てゐて自から襟を正したくなるのを感じるのである。『創作』の歌が千遍一律だといふ評判など、わたしにはどうしても解らない。この一團から、または一人々々から發して來る

一種の力——生の力とも言へるし歌の力とも言へるであらう——を感じるのは小生一人のみであるのだらうか。

▼題附組もよかつた。然し、まだ若い。また若くあらねばならぬ筈でもある。が、ものを見るにもう少し奥の方を見て貰ひたい。見るにも感ずるにも——即ち歌ふのに——うはべばかりに留つてほしくない。歌を他に(そとに)ありとせず、自分自身のなかに在るとして詠んでゆけば自然輕卒な、浮いたものは作れなくなるのである。なほもう一つにくまれぐちを添へようなら、本欄の歌など、先づ先づ採れるから採つた程度のもが大部分である事を承知しておいて頂きたい事である。これが、採らずに居られぬといふのになる事を望む。

▼「岫雲章」「煙雨集」、香ばしからず、「深山櫻」、甘さは同じだがうまいのは寧ろこつちであらう。

▼喜んで頂きたいのは、原田實君が久し振でまた本誌に筆を執つて下さる事になつた。すつと前の本誌に連載されてゐた同君の「孤つの窓」はまだ諸君の

心にある事と思ふ。あの續きである。穩健聰明な同君の人生觀社會觀にこれから接してゆく事が出来るのである。

▼本誌以外の各雑誌からの「前月歌壇抄」と本誌各欄のそれとを本號から續けてゆく事にした。選者は毎號變るだらう。

▼白旗君の弔慰金の集りだかゞ以外に多くて嬉しかつた。わたしより先づ厚く御禮申します。この金の中から約五拾圓を割いて自然石の石碑を建て、あとを現金で未亡人にお渡しします。石碑の事は村田敏雄佐藤友雄兩君に萬事世話して貰ひます。詳細は次號で報告します。白旗君も定めし喜んで呉れるでせう。

▼『詩歌時代』も愈々出ます。目下本號と一緒に校正が出つゝあり、四五日遅れて出來上る事になりませう。最初考へてゐたより段々事が大きくなり、途方もない立派な雑誌になつてしまつて、編輯者發行者は寧ろ少々困却の態とあります。自然の要求が斯うさせてしまつたので、恐しい力です。それにつけて

も販賣方法がまだ氣になつてゐるのです。それにし
くじつてはどうもならぬので諸君、一統がすべて販
賣係になつたつもりで、大いに賣る事に加勢しては
下さるまいか。千人の販賣係があり一人で十冊づつ
賣つて貰へば即座に一萬部出るといふものです。そ
してこれは強ちにさう困難な事ではないと思ふ。面
倒がらずにやつて見て下さい。すべて申込の數によ
つて印刷するのですが、削刊號其他、初めの間は多
少の餘分を置きます故、よし／＼切に遅れても申込ん
で下さい。表紙はもう出来ました。中に使つてある
カットも面白い。面白いといへば社友の某々兩君が
一人は長詩一人は俳句に推薦せられて短歌には誰も
入つてゐない事です。特別募集の中には若干あつた
やうだ。

▼不健康状態は續いてゐますが、それでも机の側に
寝つきつして居れば、何か知ら書きもし考へごと
も出来ず。これで『詩歌時代』削刊の心配と多忙と
が無事に済んで呉れ、ばそれこそ本當に今までにな
かつた力で勉強を始めます。朝酒はやめました。晝

は半々です。そして生れて初めて日記といふものを
つけ始めました。(三月廿六日)

五月號

▼今年はまだことに氣候が變で、花も遅く咲き速く散
り、それらしい氣もしないうちに春は暮れてしま
うた。現にまだ暑さ寒さが順調でない。太陽の黒點が
何とやら云ふことだが、兎に角に落ちつかぬ氣持で
ある。

▼そのなかでわたしは木の芽の萌ゆるさまを割に靜
かに眺むることが出来た。今度の家は御存じの通り
千本松原の蔭に在る。そしてこの松原は松原とは云
つても、一つの森林である。雑木林である。立ち並
んだ老松の下草に思ひがけぬいろ／＼の樹木が茂つ
てゐる。

▼木苺の芽の早く萌ゆるものであることを初めて知
つた。花もこの森の中ではまつ先に咲いた。——十
二月の頃からいまだに咲いてゐる椿をば別にして
——木苺といつても黄いろい小さい粒の實のなる種
類である。芽も花もそのしなやかな莖たちもこのも

しいものであつた。もうそろそろ實が熟れるであら
う。接骨末(にはとこ)も毒うつぎも芽の早い木で
ある。めづらしくしたら、木が立ち混つて居り久しび
りにその芽を摘んでたべた。榎、棟の芽のやはらか
さ、また檜のわか芽の匂ひ立つた美しさはえも言は
れぬ。この木はわか芽をふくと共に花を開く。花は
うすみどり色のこまやかな房である。また梅の芽の
濃みどりはその葉の黒く茂つたなかに萌ゆるだけ
に一層眼だつ。たぶの木(大樟)はそれとは反對に燃
え立つ様な茜である。蔓草では通蔓草がいちばん早
く、既に花も過ぎた。いまは野葡萄の芽の美しいさ
かりである。

▼晴れ、ば日に一度か二度、自分の部屋を出てこれ
らの草木を眺めながら森なかの小徑をさまよふのが
此頃のわたしの日課である。森にゆくまでもなく庭
のうちにも昨年の春から秋にかけて植ゑた庭木が揃
うて葉を吹いて來た。柿、栗、櫟、落葉松、辛夷、
山椒、柘榴など。竹は布袋竹も縞竹も可愛い、筍を
出した。孟宗にもいま一二本、可笑しいほど小さい

のが出始めた。筍の可愛ゆさを知つたも今年が初め
てである。

▼斯うした散歩がいまのわたしにはせいぜいで、濱
や海はあまりに明るく強く、町まで行くとなるとも
う息が切れて苦痛である。局部的に何處がわるいと
いふでは無い様だが、たゞ全身的にいけないのであ
る。坐ること、椅子に倚ること、歩くこと、すべて
永くは出来ない。あつ、たちつ、ねつ、さま／＼なこ
とをちよい／＼とまげこぜにやつてゐるのである。

自分ながら時には獨りで吹き出します。

▼要するに長年の酒毒と、一昨年來の半折旅行の疲
勞とが一緒にいま身體に出てゐるのである。諦むる
ほかはない。一月二月と甚だわるく、三月の末かけ
て大分よかつたが、大會でまた少々あと戻りした。
でも、このまゝにもう少し慎しんで居れば、まだか
ら／＼にあぶらが切れた様でもなし、程なく元氣に
なりませう。いろ／＼心配していただき、手紙も澤
山いたゞいてゐるので、此處にお禮を兼ね近狀詳し
くお知らせ申します。

▼一番困るのは手紙の書けない事である。前からさうではあつたが、それでもたまにはいゝ氣持で書いたものである。今はそれが全然ない。つまり心に張りがないからのこと、心細く思ふ。用談の手紙、お禮の手紙、戯談の手紙、みな駄目だ。とりわけても御禮狀の事で朝鮮の福島勉君其他に申譯のない事をして居るが、とりあへず雑誌で、お詫びを述べておきます。

▼本號の歌、わたしには相變らず面白い。森なかの木々の芽のふき出づるとりどりの色、匂、勢ひがある様に思はるゝ。たゞ慫慂らくはまだ老松亭々の趣きを見得ぬことである。土江君が尻切れとんぼの文章の中で云つてゐる「世帯勢れ」に對しての「作歌づかれ」はよい言葉である。而してわたしはその疲勞ぶりを少くともこの一頁組の大部分に於ては見出し得ぬものである。みな自づと出て來る力で作つてゐる様に見受けてゐる。たゞその氣宇の大小、技巧の自由不自由、眼の置き場所の遠き近き、等は考ふべきであらうとおもふ。

▼兎に角わたしは諸君に讀書を勧めたい。自分の作つてゐる歌ばかりに頭を突つ込んでゐたのではどうしても自分の歌以外に眼が届かない。そして其處に固い外殻が出来がちである。出來てはなか／＼破れない。讀むには歌書歌集もよいが、歌、歌、歌、と眼を血走らせぬことである。寧ろわたしは小説、それも西洋ものゝ大きなものなどがよいと思ふ。自分の生命の涸渴したのも知らないでたゞ、歌歌としがみついてゐるのは悲惨である。讀書はさういふ場合に於ける清水である。

▼原田實、大橋松平の兩君が共に多忙のため今號休まれたのは惜しい。が、一號や二號のことでないので、ゆつくりと待ちませう。大橋君は休んだ代りに自分が槍玉にあげられた様だ。

(中略)

▼大會もめでたく済んだ。みな餘りいゝ出來ではないが大會記、御覽を乞ふ。大會もいゝが、この次ぎあたり、少し趣向を變へるがよいかも知れぬ。

▼『詩歌時代』直接購讀者にも、東京に於ける四軒の

大賣捌店にも昨日全部送り出した。實をいふとこの雑誌を出したといふ事は例の空想癖も手傳つて重きが上の苦勞を一つ背負ひ込んだ形となり、多少苦笑の態だが、然しやりかけた意義は益々明らかになり、またやつてゆく方法も解つて來た。第三號までがまことに骨で、そのあとはいまやれると思ふ。いつもながらだが、御後援願ひます。(前號に社友で推薦せられたと書いたのは一人は矢作千實君の俳句であり一人は平澤貴美子さんの長詩であつた。特別募集の短歌では西島はつねさんが二等一席に當つてやゝ目ぼしいだけであとはみな景氣がわるかつた。)

▼高鹽青山君の揮毫頒布會が設けられたさうだ。これは元來「さうだ」どころの性質のものではないと思ふのだが、同君の苦勞性から私自身の半折會の事を慮つてか、わたしには全然何の話も無くして企てられてゐたのである。この廣告の事を大村松之助君から云つて來てわたしは初めて知つた。何だか要領を得ないが、とにかくこれは此儘にして置き、來號にでも、高鹽君自身に何か詳しく書いて貰ひませう。

もつとも歌集は創作社から出したいと思ひ、夙づくにその話があつたのだが社に餘裕がなかつたのと、この一二年わたしがごた／＼してゐたのとで、ツイ其儘になつてゐたのであつた。この揮毫會をきつかけにそれが具體的になつて呉れ、ば難有い。いづれにせよ、社としても充分の應援をしたいものである。

▼野に山に、郭公の啼くときが來た。いまその聲を想ひやりながらわが歌よわが心よ希くはその聲の如くあれかしと願ふねがひが切である。(四月廿九日早曉、珍しく雨聲聞ゆ)

六月號

▼久しい時化つゞきの濱で、けふ珍しく生氣のある聲がする。此頃では漁師たちとも馴染んで居るので妙にそのえい／＼聲が親しかつた。一考へ考へた後、蛇の目をさして濱へ出かけた。傘をさすなど、これも近頃珍しいことである。

木や草、鳥などを見ると同じく、わたしは魚を見ることを好む。深い淵、豊かな浪の底などに靜かに泳いでゐるのは無論のこと、小さな溝川に群れてゐる

目高でも可愛い。さかな屋の店さきを見るのも好きである。毎日やつて来る出入の肴屋の小さな荷ですらわたしは出て行つて見るのを樂しむ。旅さきでも魚屋野菜屋の店さきをば自づと注意深く窺き込む癖がついてゐる。思はず通りかゝつた安藝宮島の小さな魚市場の朝など、實にいき／＼と美しく記憶に残つて居る。紅の鱸、漆紫色の鱗など。

濱の網はしらす網であつた。なるほど、珍しくとれてゐる。たぶ／＼にうちあけられた筈が濡れた砂の上に幾つか並べてあつた。然し、しらすは見る魚ではない。寧ろいた／＼しい。漁師たちの恐悦騒ぎをあとにし、わたしは歩きにくい小石原を引返して松原の中の例の小徑に入つた。風のない今日の雨は高々と押し並んだ松のてつべんからまつすぐに降りそゝいである。森をなした雑木の若葉はいまは青葉の季となつた。そのつや／＼しい葉にも枝にもしみじみと降りそゝいである。

▼その偶然の小さな散歩から歸つて来てこの五月だよりの筆をとる。窓さきの瘦せこけた葉の赤い孟宗

竹にも、雨はこまかに降つてゐる。

▼矢張りわたしにはこの雑誌の歌は面白い。上手下手といふことは暫くおき、とにかく益々各自の面目がはつきりして来るのを感じるのである。一人々々、ぢかに逢つてゐる様な氣持が段々濃くなる。

▼少し氣になつたのは、何處となしにすべてが調子を落して歌ふことを始めはせぬか、といふことであつた。調子が落ちた、のではない。わざと落してかかるといつた傾きがありはせぬかと、感ぜられたのだ。若しこれが事實であつたら、用心すべき事である。雑誌全體の調子が何かの拍子にさうなり、不知不識皆してそれをやつてゐたといふ風に見えないでもないのである。それならば、まだしもだがこれを意識してやつてゐるといふことにでもなれば危険である。いまのうちから調子を落してかゝるなど、途方もないことである。

▼うまくこそなけれ、その點では一頁より題附の方がしつかりしてゐるの思つた。みな精一杯の心持である。自然つゝましい氣で讀まれた。が、それに

してももう少し上手になつてほしい。三池君など其處にゆくとうまいものだが、どうもこの人の歌にはうしろの奈落が見えてゐていけない。

▼潮みどり、柴山武矩、久しぶりの名前である。それにして和山山蘭だの菊池知勇だのといふ名が思ひ出さるゝ事である。和田君は先日越前君と大いに飲み、エライ寄せがきをよこした。その元氣を歌の上に出して呉れ。

▼中村政雄君の批評は少なからず力を入れて書かれたものである。幾日かを費したといふことであつた。而して同君はこの批評を書くべく歌を熟讀したことにより、目下着手しようとしてゐる獨逸文科の卒業論文のために少なからぬヒントを獲たさうだ。

(中略)

▼前號の廣告は矢張り不充分のものであつたが、高鹽背山君の揮毫頒布會の行はるゝ事とその會費で同君の歌集を出版する事とは確實である。改めて制定された規約は本號廣告面の通りである。就いて見て欲しい。

▼同規約のうちで最も、事は申込者に對し歌集を一冊づつ贈らるゝ事で、これは金額などの問題でなく、會にも歌集にも甚だ親しみを覺えしめる事と思ふ。生憎くとわたし自身と同じ様なことで諸君をいぢめて来たあとなので何彼とやりにくからう様に推察さるゝが其處を我慢してわたしのと同様の好成績を擧げさせていたゞく様、私からも折入つてお願ひする次第である。同君の歌集に就いてはわたしにも心苦しい事があるのである。今から六七年前、創作社叢書として加藤東籬、和田山蘭、菊池野菊、高鹽背山、中村松花君等の歌集を順次に出してゆく計畫を立て、うち加藤君のだけを第一編として出版したが、それと共にわたしの生活が内外共に急に詰つて来て、叢書どころか『創作』自身をすら發行してゆけない状態になつたのであつた。そして自然叢書の話は立消になつてしまつた。その後和田君は自身で『酒壺』を出した事諸君の知らるゝ通りである。菊池君はそれ以前に『落葉樹』を出して居る。残るのは高鹽君と中村君との分であるが、うちにも高鹽君のも

のをば出したいものと考へ、沼津に移つて多少また落ち着いて来たを幸ひに製本費の見積書を耕文社に作つて貰つたりしたのであつたが、やがてまたわたくしが自分自身の事に専心せねばならぬ事情になつたので、延びるともなく延びて来たのであつた。幸ひ斯ういふ企てが起きたとすれば、わたしとしても甚だやりよい。お互ひに協力して出来るだけ速く事を成就せしめたいものである。創作社の企てとしてこの事に参加して下さる事を望みたい。申込は高鹽君宛でも社あてでもよろしい。早速始めて下さい。高鹽君はわたしの様にづぼらでないから申込次第すぐ書いて送らるゝでせう。同君の書は同君の歌と同じく枯淡ななかに滋味を含んだものである。申込者氏名を誌上に出したいが此頃名前を並べる事が續いたので、これをばあと廻しにし、纏めて出すことにしませう。

▼『詩歌時代』もいま丁度三號、雜誌の嶮にさしかつてゐる。いかにも苦しい。心配のあまり、無謀の企てであつたと叱つてよこさるる人もあるがわたしと

してはやらすに居れない氣持もあり必要もあつたのである。兎に角此處一辛抱です。此處を押し切ればあとは樂であると思ふ。雜誌はその反對に益々よくなり、第四號あたりからが同誌創刊についての眞意となつてゆきます。

▼幸にわたしの健康が順次に恢復しつゝあります。これさへあれば大丈夫です。くるしきやりくりをくろみうる頭の健康は自づとまた歌をも詠み得るものと信じます。現に此頃ぼつ／＼と作つてゐます。本號に出したのはその一部、他二三の雜誌にも發表されます。

▼身體が少しきいて來れば來るで、また別様な忙しさです。いづれにせよ、樂ではありません。但しそれも『詩歌時代』が落ち着くまでで、さうなつてしまへば今度こそ本當に永年、少くも此處十數年來こひのみ願うて來たわたらしい生活、眞個のわたしの生活の裡に自分を置きます。ツイ其處に眼に見えては居るのです。病氣か天災のない限り、其處までもう何の道草をも食ひませぬ。

▼本號兩三日遅刊の筈、諒せられよ。(廿九日、卅日) 七月 殊

▼何處か違つた所で書かるゝ筈であつたこの創作社だよりを矢張りいつも自分の机の上で書くことになつた。

▼といふのは、餘りの多忙に氣が腐れるのでその息抜きの意味と、今一つは近來大分恢復して來た自分の身體を試して見よう心とで、この二十一日までに大體の編輯を濟まし、校正其他をあとの人に頼んでおいて、小さな旅行に出かけたのであつた。先づ濱名湖を船で渡り、途中館山寺に參詣、夕方氣賀町に着いて吉野榮藏君を訪ひ、その夜厄介になつた。先頃小學校の校長をやめて土地の實科女學校に勤めてゐる同君も一日なまけて一緒に歩かうといふので、翌二十二日、先づ奥山村の半僧坊に詣でた。非常な盛り場を想像してゐたに案外にも木立の深い山の中で、門前に並んだ宿屋など、世離れのした寂びかたであつた。それより遠州と三河との國境をなす陣座峠といふを越えた。明るい、氣持のいい峠であつた。

半白の兩人が競争しながら山莓を摘んでたべたりした。吉野君は半白どころか六七分通り白い。わたしはまだこのごろ急に眼だつて來たといふ程度である。稱して「時代白髪」といふ、蓋し「詩歌」を略したるもの。峠をおりついた所に黄柳野といふ十戸ばかりの村があつて麥刈つてゐた。恐らく今後のゆめに折々現れて來る村であらう。其處を過ぎてまた吉川峠、長いくだりを降りついで豊川を渡れば新城町、金澤修二君を訪ふと、丁度店先に出てゐた姉さんの萬子さんがわたしを見据ゑて立つ事約數十秒、『修二、たいへん／＼』と奥の間に駆け込んで行つた。

▼翌日、わたしは一人となつて鳳來寺山の麓の門谷村に赴き、其處の宿屋に泊つた。佛法僧を聽かむがためである。この前にも泊つて居るのでいきなり山上の寺まで行つて厄介にならうかと思つたが、近頃急に佛法僧聽きが流行して寺にも毎晩の泊り客があるといふので遠慮したのであつた。宿屋もよく満員になるといふ事であつたが、仕合せとその夜はすい

てゐた。どうせ二晩三晩は待たずばなるまいと想うて来た佛法僧は案外にもよく啼いた。晩酌のまだ終らぬうちから啼き始め、折柄の月夜に夜つびて啼き續けた。そしてその晩書かうと思つてゐたこの創作社便も書けなかつた。

▼サテ、斯う書いてゐるとたゞの紀行文になつてしまふ。端折らねばならぬ。翌朝、洗面所で顔を洗つてゐるとツイ横の部屋から出て来た背の高い、痩せた青年が何やらわたしの方を見てゐる様な氣勢であつたが、まだ齒も磨き終らぬ横合からいきなり『牧水先生ではないか』と問ひかけた。驚くべし、同じく昨夜鳥聴きに來て泊つてゐたといふ竹中皆二君であつた。兄さんの理一郎君には逢つてゐるが同君には初めてであつた。共に山に登り、都合では山の寺にとめて貰ふつもりであつた所、豊橋の金持たちが大勢登つて來るといふので諦め、せめて宿屋でもう一晚と歸つて見ると宿屋にも新しい客が押しかけて來てゐた。苦笑しながら長篠に出で、電車にて湯谷温泉に到り奇遇の一夜を靜かに語らむとするに、此

處もドヤ／＼、詮方なく終點の川合驛といふまで到り、其處一軒の宿に入る。苦笑變じて酒となり、その夜や、過す。竹中君曰く、『これも先生自身の罪ですよ』と。四年前初めて鳳來寺に登り佛法僧を聴き、その紀行を書いて『改造』に發表した。電車や土地の有志がうまくそれを利用宣傳して斯うなつたのだといふ。恐るべき事ではある。翌日、新城に立寄り、豊橋にて竹中君と別れ沼津に歸つた。實は或る用件にて名古屋まで行く筈であつたが、疲れが見えだしたので、うるたへて歸つて來たのであつた。歸つて一昨日昨日と寝込んで今日漸くこれを書く。動いたが悪いでなく、動けばどうしても例のを過す、それがいけないのだ。哀れなものだ。

▼終にあやしき編輯便となり終つた。他にたいして書く事件が無かつたと思つて下さい。來號補足する所があります。唯だ、高鹽君の半折會申込が七月一杯である。餘日が乏しい。お忘れなく申込んで下さい。(六月二十八日)

八月號

▼素晴しく暑い日である。元來私は夏の暑さを愛する方で、弱るなどいふことは曾つてなかつたが、今年は少々參つた。身體のせゐもあらうが、沼津の夏そのものも今年はちと變つてゐる様だ。第一夕立が無い。

▼諸君は如何。自分の飼ひあげた繭だから見て呉れの、晝休みに一寸出懸けてとつて來た蕨だのと送つて頂いたり、上州黒瀧山よりとか、上高地よりとか、十和田湖畔よりとか、ダイゲンキニテイマフジサンテンニアリ」とかいふの、盛んにやつて來る處を見ると、全く大元氣らしい。元氣はいゝ。元氣に限る。元氣のなくなつた人間は見るといやだが、見ると、當人はなほ切ない。

▼一頁組は相變らず面白い。賑かな元氣、靜かな元氣、とにかく元氣を持つて居る——例外がないではないが、それに較べると題附組以下はさびしい。

▼一二の雜誌に出てゐた本誌の歌に對する批評を載せて見た。他山の石ともなる所があつたら仕合せである。

▼驚くべく悲しむべきは嶺花伊藤利介君の訃報である。而かも思ひがけぬ不慮の死であつた。前の白旗浩蕩君も耳の不自由な人であつた。そして共に不遇の半生を過して來た人たちであつた。何彼と心を痛ませらるゝ事が多い。土橋君が自づと社の代表の様な風になつてその葬儀に列して呉れたことはせめてもの心やりである。令弟利末君の兄思ひは我等の眼につけてゐたことであつた。どんな氣持で今度の事に接せられたか、氣の毒に耐へない。嶺花君の歌は來號纏めて出します。

▼『創作』の上にも一二新しい試みを企てむとしてゐるのだが、何しろ私の不元氣のためはか／＼しく行はれない。來號あたり、何か一つ位の發表出来るかとおもふ。

▼企てといへば、新年號だかに書いた信州地の吟行會は一時中止します。これも私の駄目なためと許して下さい。四人はど既に申込があり、他にも楽しんでゐた人があつたに、甚だ残念だが、止むを得ない。折を見て再企します。

▼高鹽君の歌集は原稿が纏った。印刷は村松中野兩君の靜光社でやる。私はいま序文を書いてゐる。たゞそれに就いて例の揮毫會への申込が甚だ奮はないのは淋しい。申込締切をもう半月だけ延期します。この八月十五日までに本社宛なり高鹽君宛なりに申込んで下さい。

▼詠草や社用を私あてに送らるゝと間々紛失したり遅れたりします。封筒には必ず創作社御中とし、傍に詠草在中とか社用とか書きつけて出して下さい。

▼小生は駄目でも編輯室は元氣です。數日前笹田君上野君今西惠の三人は富士に登つて來ました。大悟法君は三四日中、旅人と軸子の學校の休みになるのを待ち、連れて登ります。そして毎日みんな水泳ぎです。

▼奈良の高垣實君、東京の八木錠一君から送つて貰つたダリヤ、カンナ、グラヂオラス、裾野の鈴木秋灯君、中泉の鈴木利夫君から頂いた山百合鳴子百合が今花壇いっぱい咲き亂れてゐます。百合の匂ひは斯うして書いてゐる書齋まで流れて來ます。富士

には登らずとも、明け暮れこの花に對してゐる事は楽しい。

▼何だか書くのがきまりがわるいが、毎日いたゞいてゐる暑中見舞のおたよりなどに對しすつかり失禮してゐますが、許して下さい。來年あたりからこそはこの惡癖を矯めて自分みづからいゝ氣持にならうと楽しんでゐます。

▼庭草の茂みに蟲が鳴いてゐる。もうすぐ秋ですね。(七月二十九日)

九月號

▼前號で珍しい暑さだと書いたところ、暑い筈だ、四十二年目の温度だといふ、文字通り生れて初めての暑さに出會つたわけである。不思議とその暑さの裡にあつて小生の健康は次第に恢復して來た様だ。暑さにめげて不養生をようしなかつた結果だと見る方が適當かも知れない。諸君の方はどうでした。

▼諸君、半年あまりにしてまた例の半折揮毫行脚に出かけねばならぬことになつた。理由は今號には書きかぬ。來號には多分書けるであらう。行く先は

北海道、出立は九月十五日か二十日、途中二三ヶ所寄り道をして九月末か十月初め、札幌に着く。北海道は初めての土地ではあり、出來るだけ廣く見て來たいとおもふ。あちらでの行程は札幌できめることになつてゐるが、あちこちと二ヶ月近くかゝる事になりはせぬかと思はれる。

▼ために次頁の「社告」おねがひにある様なことになつた。一頁組、題附組の人たちには兎に角、其他の人に相濟まぬことに思ふが、平常も忙しい時には大悟法君に下見を頼むこともあり、大體の手ごころは解つてゐるわけだから、平常とたいした違ひは起らぬであらう。ことに歌を見る大悟法君の見識には小生も敬服してゐるので、この兩號の間に却つて面白い現象が出來るかも知れない。寧ろ心を新たにしてい作歌し寄稿せられむことを望む。

▼この前の様に旅先で小生が見てもいゝのだが、今度の行く先は遠くもあり、小きぎみに幾つかの所を飛び巡らねばならぬかとも思ふので、思ひ切つて右の通りにしたのであつた。

▼創作社だよりのともすれば愚痴つぼくなるのを厭ふので出來るだけさうした事をば書きたくないが、どうもさういふわけに行かぬのを悲しむ。謂はば一つの雑誌のこの欄は一軒の家にとへてお勝手とかお納戸などにも比したいところで、表面に解らぬ苦しい事の語り交はさるゝ所であらうかとおもふ。

▼昨年小生は殆んど家をそとにして飛び歩いてゐた。ために自身の創作はもとより雑誌『創作』の事も顧みる暇が無かつたと謂つていゝ。自身の事はとにかく社友諸君に對して相濟まぬ事に思ふ心が強かつた。で、來年からは「とひそかに心に期してゐた。そして今年となつた。なると共に偶然いろいろの機會と材料とのかち合ひから多年空想してゐた各詩型による詩歌の綜合雑誌の創刊を思ひ立つた。一生に是非一度やつて見たいと願うてゐた事業の一つであつた。思ひ立つと同時に着手した。これは確かに機會がおのづからにさうさしたのであつた。而してまたこれは思ひの外に心を使ひ金を使ふ爲事であつた。そしてそれと同時に夙うから願をかけてゐた

小生の健康が丁度時を得顔に頼れて来た。そのため非常な意気込でとりかゝつた『詩歌時代』の方の爲事にすら充分力を注ぐ事が出来なかつた。

▼『詩歌時代』の發行は要するに小生自身の事業ではあつたが、それと同時に創作社とか『創作』とかのためをもかなり思ひ入れての企てであつた。これが兩々うまく並立して行けば『創作』の世界もかなり今までよりは廣く明るくなつてゆくと思つてゐたのである。そして一方新しい方の基礎の固まるまで一方には暫し忍んで貰はうといふ様な気分も混つてゐたかも知れない。

▼半年もたてば一方の基礎は固まると思つてゐた。その半年はたつた。然り而してその半年のたつを境に小生はまたあやしい健康を携へて惶しい旅稼ぎに出かけようといふのである。世の中の思ふに任せぬ、まことにおもひの外である。然し、自分の思ふことを思ひどほりにやつて見ての上の結果である。甘受するほかはない。

▼要するに昨年小生の念じた『創作』の方の「來年

からは」を一年だけ延ばしたと取つて貰へれば難有いのである。もうこそ小生も觀念した。一意創作と『創作』のために盡すほか、他に何もなくなつた。願ふころもなく他に待たるゝ所もなくなつた。

▼と言つて來ると昨今年の『創作』はまるで火の消えてゐた様に聞えるが事實はどうであつたらう。他はとにかく一頁組——何と云つても此處が本誌の代表だ——の活躍はどうであつたらう。從來に見なかつた、とは言はずとも、少くも例年に比して優色はあらうとも遜色はなかつたと言つていゝ思ふ。第一、世間でそれを認めて來た。

▼岫雲章から詠草にかけて傑出した作の出なかつた事は遺憾だが、これはどうも致し方がなかつたとも言へるし、また小生の熱心が足りないのではなかつたかとも考へられ、相濟まず思ふ所である。

▼希望の一二を言ふと先づ雑誌そのものをも少し複雑なものにしたい。次いで詠草組から何々集あたりにも少し注意を拂ひたい。つまり、もう少し深切をつくし度い。先づこの二つが一番重なるものである。

▼愚痴ついでに、もう一つ、附け加へて置かう、さう何度も言ふべき事でない。先々月だが社費滞納の集金郵便を出した。全部の金額は一千四百五十幾圓かであつた。今まで斯んなに溜めた事はないのだが

『詩歌時代』の金や其他で紛れてゐたのである。丁度金が欲しくて咽喉から手の出る時であつたので、これは却つて溜めてゐてよかつたと思ひながら、その集つて來るのを待つた。而して愈々期限の切れた時までに集つた總額を幾らだと思ひ給ふ。五百三十何圓に過ぎなかつた。この調子で、雑誌ばかりでやつて行かうとしたつてやつて行けるものでないのである。

▼唯だ然し、そんな調子なら乃公も今度失敬してやらうと思ひ立たれてはたまらない。拒絶する意向を持つて集金を待つて居る人があるとしたら速かに退社を申出てほしい。集金の手數だけの事を考へても苦痛である。

▼サテ愚痴は切上げる。來月なるだけ早く編輯を済まし、大元氣で未知の曠野北海道へ渡つて行く。北

海道の社友諸君よ、どうか氣持よくこの厄介千萬なる旅客を受取つて下さい。謹んで請ひ祈る。

▼庶務を執つてゐた笹田君は先日點呼で國に歸つたなりまた病氣になり其儘家に留つてゐる。

▼詠草には封筒ばかりでなく原稿にも名前を書いておいて下さい。小生の手に渡つてから封筒を探してももう遅い。

▼變な季候のあとである、お互に自重することに致しませう。(八月廿八日)

十月號

▼忘れぬうちに言つておく。世には千遍一律と稱せられてゐながら我が創作社々中にはかなり變つた手法で作歌する人が多い。例へば竹添履信、三橋隆臣、大悟法利雄、土江苔歌、大橋松平君等である。今號の大悟法利君のなどもすると物議のたねとなりさうなところを持つて居る。これは矢張り同君でなくては出來ないことで、これはこれでいゝとわたしは思つて居る。たゞ虞れるのはこれを一つ眞似てやらうかといふ人の萬一にも出て來はせぬかといふこと

で、それは非常に危険である。平凡なのを真似るのならまだいゝが、折うした變つたものを真似ようとすると全くあぶない。水とも油ともつかぬものが出来上る。變つたものをしておのづからに變らしめよ、強ひてひとまねして變物ぶることは止すことにしませう。折々思ふことだが、まだ書かなかつた。いま一寸書いておく。

▼サテこの創作社だよりをば妙なところで書いて居る。岩手縣盛岡市齋藤旅館の三階に於てある。時は九月二十三日午前六時半、一しきり音をたて、あつた時雨が過ぎて雲の下から岩手山がうす墨色に見え出して來た。

▼いづれ行脚日記を書くが、一昨廿一日朝沼津を立つた。その日福島どまり、昨日此處、今日はこれから青森に向ふ。一泊。廿四日夜札幌に着く。そして其處を起點として北海道に亘つての行脚が始まるわけだ。札幌が廿八日まで、次ぎ岩見澤、十月一日迄、次ぎ旭川、四日までは、きまつてゐるがあとはまだ未定である。明後日札幌に着いたらば次ぎ次ぎ

と豫定が立てられるであらう。そして多分十月末まで駆け廻ることになるであらう。歸りはまたこの東北本線により、青森、五所川原、盛岡、福島の各地で半折會を開いて頂くことになつてゐる。なか／＼樂でなささうだが、そんなことを言ふと賢が當る。

▼右のごとく十月四日以後の豫定は解らないが、お手紙など下さるならば左記へ宛て差出し下されば各地へ轉送して貰へます。

札幌市大通西十五丁目 干田迅一郎君方

同市南五條西十一丁目 谷口波人君方

▼以上書きかけし所にお膳來る。一杯、來客、乗車、今は陸中陸奥國境の分水嶺を越え、柏と栗と胡桃との雑木こも／＼にうち連れる高原の中を汽車は走りつゝあり、錦木胡桃の紅葉、溪をさしはさんで鮮かである。畑に見ゆるは粟と蕎麥と大豆とのみ、前二者はいま盛んに刈り取り其儘畑中に束ねて立て竝べつゝあり、刈つて後、熟さしめむとするのであらう。

▼『詩歌時代』をば十月號限り廢刊します。而してそのあとに大きな穴あきぬ、穴を埋めむとての今度

の行脚なり。詳記を省く。

▼目的は他にあれど勿體なき行樂の旅なり。第一、この事によりみんなに逢へるがありがたい。『山蘭がつらをつらつらおもへらく涙を垂れしつらにあらぬか』の涙顔いよ／＼うら／＼かにして、重田行歌をぐつと色男にしたら斯うもならうかと想はるゝ天野多津雄君とは郡山で初對面であつた。福島では中目野雨君に逢うた。十年前には藤原東川、大橋松平等と角逐した人である。今は福島民報編輯長として地方の尊敬と混雜とを受けながら相逢へばピンからキリまで歌の話である。昨日は花巻で福地房志、盛岡で岡田文一、吉田安太郎君等に逢うた。岡田吉田兩君、大正五六年の頃『創作』で活躍した人達である。小田島孤舟君の歌は久しく拜見してゐたが逢うたは昨夜が初めてであつた。今日着く青森には『ソデシ、ソデシ、ソデシナ』(左様です、左様です、左様ですなアの意)を今も恐らく連發するであらう加藤東籬翁を初め藤原柯芳、原むつを、淡谷悠藏、高田螢汀、船水公明君等今では少々創作社人名辭書式の昔馴染

が待つてゐる筈である。

▼オ、綺麗、林檎が畑に満ちて熟れてゐる。正直なものだ、此處はもう青森縣三戸驛であります。丁度十二時。これより食堂車へ參ります。(九月二十三日正午、車中にて)

十一月號

▼今度の創作社だよりもまた妙なところから書く。十勝國札内驛在、途別温泉黒田旅館といふの奥座敷からである。

▼といふと景氣よく聞えるが、まことは實に恐ろしい温泉宿で、壁落ち柱傾き、便所はあるが洗面所は無い、といふ所である。元來は昨日今日、美唄から歌志内あたりの炭坑めぐりをしてゐる筈であつたのだが、流石に積日の疲勞が出て、身心ともに動きがとれなくなり、ことに妻など、一昨々日夜、帶廣町(札内驛より一つ西に寄れる町)の進藤雪子さんかたに於ける當地方社友招待會(池田町に菊池蒼村米光澄秋村山光二の三君あり止若町に桑折如水君があり帶廣町に雪子さん)にすらよう出ずして同地の神部

ドクトル(沼津の人社友神部孝君の兄さん)の手當を受けるといふ始末で、この上の強行軍は非常に危険だと思つたので、美唄方面受持の世話人諸君には氣の毒であつたが急に豫定を變更し、一昨日夕方、此處に來たのであつた。帶廣に滞在したかつたが丁度第七師團演習後の觀兵式が同町に舉行され宿屋も民家も兵と客とで一杯になる時であつた。

▼帶廣町の人たちもこの温泉に就いては知る所が無かつた。沸し湯だといふからいづれきたないには相違ないが他に思ひ當りの場所もなし兎に角温泉といふのをとりえに其處に行つてごらんになつたがいゝでせうといふので取りあへずやつて來る事になつた。來て見れば、右の有様である。若し雪子さんの御主人進藤氏が送つて來て呉れなかつたならば我等夫婦は顔をつき合せて泣き出したに相違ない。奥座敷三十二疊の部屋の隅に(これは八疊づつ四室に仕切られてゐるのだけれど間の襖が云ふ事を聞かないから先づ三十二疊一室と見なすべきでせう)悄然として坐つた二人の姿を想像して下さい。

▼といふと如何にも陰慘だが、また陰慘でもあるのだが、昨日一昨日はとにかく、今日は割合にいゝ氣持になつてゐます。といふのは宿そのものはとにかく、宿の前後の景色がとても素晴らしい。前には十勝平野を距て、遠く石狩國境の十勝岳石狩岳三國山等の連山がびつたりと雪をかづいて低く豊かに並んでゐる。裏はまた素敵である。庭つゞきに殆んど原始林とも見らるべき深い林となり、いづれも一抱へ二抱への檜の木、せんの木、やちはんの木、いたや楓、桂の木、朴の木、あかだも、落葉松、其他名も知らぬ雑木が今を限りと紅葉してゐるのです。それで漸く氣持も助かり、斯うした編輯便をも鉛筆の走りがきながらに書く勇氣が出て來ました。妻の身體も一兩日の安靜が利いたか大分よろしく、今日もおつゝけ神部さんがオートバイで駈けつけて來て呉れるでせうが、今日はもう聽診器の代りに盃を持つて頂かうかといふ調子です。

▼九月廿三日青森一泊。廿四日札幌着廿八日迄滞在。廿九日より十月一日迄岩見澤、二日より五日まで旭

川、その後、増毛、深川、名寄、紋別、各一泊、網走二泊、池田二泊、帶廣四泊、而して此處、といふ順序に經廻つて來てゐます。北海道の地圖が手近にあつたら開いてみて下さい、いかに惶しい旅であるか、解ります。明後日當地發、石狩の炭山地方を巡り室蘭に飛び、札幌に戻り、小樽に寄り、多分來月上旬内地へ歸り、前號既記の各地を廻つて、サテ、沼津に歸り着くは二十日にもなりますか。考へてみるとけふは十月二十日沼津出立後、丁度ひと月目に當ります。

▼實は昨日、書けるだけの紀行を書くつもりでしたが、細君同様布團に潜り込んだまゝで終日動けず、とにかく創作便だけは書かなくてはと今日折柄の好晴をたよりに起き出で、辛うじて右のみ認めました。明日若し書けたらそれこそ一頁だけでも書きたいものと思つてをります。とにかくに友の情と酒とを力に終末までめでたく漕ぎつけるつもりであります。以下擱筆。(十月二十日午後三時半、十勝途別温泉にて)

昭和二年

一月號

▼サテ何から書くべきか。

▼北の方の長い旅から歸つて来たのはこの六日の夜であつた。その数日前、青森縣五所川原町で別れて来た加藤東籬君が先廻りをして二三日前から創作社で待つてゐた。そして九日だけに歸つて行つた。越えて十日の夜、沼津に大きな火事があつた。市の三分の二、しかも市街中目貫の場所を瞬く間に焼いてしまつた。恐ろしい西風の晩で、松原の騒ぎ物凄く、また必ずそれに伴ふ駿河灣の怒濤の唸りが我等の家をみつちりと包んでゐた。ために、夜の十時とか、ら燃え始めたといふこの大火を初めはちつとも我等は知らなかつた。何となれば我が家はその烈しい西の風上に在り、而かも畑中の一軒家で、たけり狂ふ松原や濤のとゞろきの裡にあつては半鐘一つポンプの音一つ聞えはしなかつた。漸く氣のついた時、さし

たる事とは思はなかつた。何となれば風が強いため火焰はすべて地上に吹き伏せられてゐたからだ。それでも何となく氣になるのでよく寢入つてゐる大悟法君を起して見て来て貰ふことにし、わたしはまた書齋の床に潜つた。歸宅以來、所謂長途の勞れが出て晝間も床は敷きつ放し、加藤君との談話も多くは寢ながらの状態に在つた。其處へ血相變へて大悟法君が飛び歸つて来た。『先生、大變ですよ。沼津全體が焼けてますよ!』と言ふ。大きな事をいふと思ひながらも起き上つて先づ元氣つけの二三杯をひつかけ、上野君をも起し、三人して出かけた。そして一歩市街地に足を踏み込んで、呆氣にとられた。

▼まだ焰をあげてゐるなかを大體の見當をつけて駆けつけて見ると耕文社はもう影も形もなかつた。松下君を初め三四の職工たちが茫然と佇んでゐるだけであつた。

▼わたしの疲勢からまだ原稿は渡してなかつた。然し、もうその日限であつた。折も折、十二月でもあつたのだ。狼狽へて編輯にかゝつたが、サテ新年號

の印刷をどうしませうと耕文社の方に持ち込む勇氣はなかつた。數日を過し、止むなく静岡市の方へでも持つて行つて當座一二冊だけ印刷しようかと、その話をして見た。もう少し待つて呉れといふのでまた二三日まち、兎に角、矢張りわたしの方でやりませうと耕文社の青川君から言つて来たので驚きもし喜びもしたのであつた。聞けば或る小さな印刷所の工場全部を借り受け、職工だけ自家のを使つて、前々から縁故のある印刷物だけは片付けようといふ元氣であり厚意であつたのだ。大いに感謝したが、然し、印刷は『創作』だけでない、他に多くのものを、時も時だし、引受けてあるに相違ない、其處へ平常どほりの頁數のものを持ち込む事はあまりに無遠慮であり、第一無理であると思つた。其處で頁數を減ずる事にし、編輯のやり直しにかゝつた。

▼斯うした場合が前に一二度あつた。そして常に題附組一頁組に我慢して貰つてそれらを預るか削るかして来てゐた。で、今度は詠草から何々集の方へ手をつけようとしたが、五首のものを三首に、二首の

ものを一首に減じてゆくことは實に苦痛で、且つ困難であつた。思ひ切つてこれは一度だけを全部これらを預ることにしよう、とあれこれ苦しんだ末にきめてしまつた。

▼預りにせられた諸君に對しては誠に氣の毒だが、一ヶ月の事ゆゑ、我慢して頂き度い。二月號にはそのつもりで手加減をして二ヶ月分を載せるといふ事にします。

▼出来てみれば解らぬが、頁數こそ少いがこの新年號は甚だ重要なものにならうと思ふ。珍しい顔ぶれもあり、氣のせみかいつもより一體に出來が、様である。もう此處等の程度になると急に上手になるのどうのといふ事はないものだが、それでも時によりその意氣込の差はあるものである。その意氣込の強弱は忽ちに歌の上に響く。ことにいつも云ふことではあるが、今度など特に各自の詠風がかつきりと分れて、めいゝに自己を稱へて相驕つて居る所など實に氣持がい、どうか、正月休みではあるし、ゆつくりと熟讀してほしい。斯ういふ場合に残念に

もわたしに歌がなかつた。實のところあれやこれやでわたしはいま歌どころでないのであるのだが、來號には少しでも出す。

▼來號迄印刷に不自由するものと思ふ、締切をぐつと早める。御注意。

▼念のために言ひ添へておく、頁數も少く詠草もお預りしたが、誌代や社費には變りはない。例月の通りである、誤解のない様に。

▼三池薦於、大島武雄の兩君を一頁組に推薦した。共に永い間の人たちなので今更その歌風に就いて云々する必要はないが、三池君は才に於て秀れ、大島君は徳に優つて居るとも謂ふべきであらう。前者はともすると空に走りすぎ、後者はあまり圓くなりすぎる弊をも持つ。共にまだ若いし、今後の努力に俟つべきである。一頁組が賑かになるのは嬉しい。と共に題附組はさらだに、の感がないでもない。少し、憤慨してほしいものである。來號あたり、この方へ集の方から二三推薦したいと思つてはゐる。

▼作歌數一覽表は石橋満君の丹青に成るものであ

る。彼は毎月々々骨折つてこの統計を作つて呉れた。興味あるものである。

▼北海道行脚記、この調子で書かれたら二三年はかかりますネ、と笑はれたが、まさかさうもなるまい。まア、それこそゲルンジイ君牛の誕のだから〜と書いて行くことだ。

▼先月號にはこの十數年來缺かしたことの無い創作社便をすらすら書かなかつた。旅の惶しさと察してほしい。惶しいのはこちらの氣持だけの事で、旅行中、各地とも實に勿體ないほどの厚遇を受けて来た。ことに社友諸君の我等に對して表はして下さる態度心持其他、いつもの事ではあるが、まつたくお互ひに涙であつた。

▼年賀廣告は例年のとほり集つたが、時節柄且つ印刷の關係から掲載を見合せました。拂ひ込まれた料金をどうしませう。拂ひ戻してほしい人は一寸葉書を下さい。葉書の來ぬ人のをば社費の方に繰り込んでおきます故、この次ぎ社費拂込の際、然るべく算用して下さい。

▼聖上陛下の御昨今、恐れ多いことであるが誠に御いたはしい極みである。我等はたゞ拜察し奉るだけのこと、何とも力の及ばないのを嘆き悲しむ。また、斯うした異常時に現はるゝ我等が國民性をも難有いものに思ふ。相共に謹んで御平癒を祈り奉るものである。

▼毎朝、新聞が待たれてならない。我等よりもつと遠い田舎にゐる人はなほさらのことであらう。實際たゞならぬ氣持である。

▼とにかくに年は改る。いつものことではあるが、來む年は去にし年よりよき年であつて呉れ、の念願は年と共に深くなるのをおもふ。ことにわたしは今年世にいふ四十二の大厄であつた。不養生の仕放題をしておいて、よくこの大厄までも持ち越して來たものとおもふ。勿體ない事である。さう〜は『來年こそ、來年こそ』を繰返すわけにも行くまい。さう思ふとさうに心が痛む。

▼今年度に於ける諸君の厚誼を感謝します。それに酬いるといふではないが、來年度は確かに『創作』を

もよくしてゆきます。丁度、さうした機會にも際して居る様です。

▼末筆ながら、旅行中の各地に於ける諸君へ、また大火に際し早速御見舞ひ下されし諸君へ、厚く御禮申します。

▼何卒、よき年を迎へて下さい。(大正十五年十二月廿三日午前五時半)

二月號

▼印刷所の工場がまだ本普請でないのと、活字が全部新しくなつたため、組版その他に手間どり、五六日の遅刊となります。

▼然し、活字の新しくなつたため、今までよりずつと綺麗に出来るだらうとおもふ。ことに歌一首を一行に組む様にしたので、今後行數にも餘裕が出來ます。もつとも、今號は先號の埋合せに歌のみ多く入れましたけれど。

▼歌一首を一行に組む様にしたので、今後一首をなるべく二十七字以内に書いて下さい。

▼今まで一頁組といつてあたのを第一詠草、題附組

を第二詠草と呼ぶことにします。

▼今號の第二詠草はどうしたものかいつもより面白かつた。何處となしに活氣があつた。この調子で進まれむことを望む。

▼第一詠草も相變らず面白い。たゞ少し濫作の弊がある様で、出来るだけそれを締めてゆく事にします。大悟法君のなど、五十首も出てゐるがこれでもずつと締めたものなのです。溢れ出づる力を捨てよ、無理に押へよとはいはない。たゞ徒らに作らむがために作る傾向をよしたいと思ふのです。

▼わたしの北海道紀行を一回だけ休みます。一月のなかばから悪性の風邪に罹り、今なほ服藥中の有様で、根のつまる爲事をようしませんでした。來號は二度分書きます。「酒と歌」は大阪毎日新聞の文藝部で「今年度に於ける自分を語る」といふ題目で各方面の人から話を集めた中の一つなのです。歌のことが出てゐるので引いて見ました。

▼柴山君の『海彦山彦』が出ることを喜びます。高鹽君の『峽間』は印刷所の怠漫のためひどく遅れま

したが、わたしの序文をば夙うに校了にしましたこと故、もう程なく出来るでせう。いづれ誌上に紹介はしますが、出来るなら社中の人たちにみんな読んで頂きたい位に思つてゐます。

▼越前翠村君の病氣はその後はかゝしくありませんが一時より大分見直したとのことです。同君のため社中の有志が見舞金貳百七拾八圓五拾錢を集めて贈りました。

▼社の原稿用紙を註文し代價はあとで送る旨言つて来て大抵忘れてしまはるゝ傾向があるさうです。僅かの金ゆゑめんだうでせうが矢張り前金註文といふことにして下さい。郵券代用でもよろしい。

▼社費、詠草を若山牧水個人宛に送らるゝとまゝ行衛不明になる虞れがあります。必ず創作社宛にして下さい。

▼昭和といふ年號をわたしは好みます。今年あたりから本當に身を入れて勉強したいものです。この二三年、わたしは自身を少し酷待しすぎました。何も好きこのんでやつたわけではないのだが、止むに止

まれぬ事情から、押し通して來たのだが、とにかく無理は無理でした。因果な事にわたしにはまだ巨額の借金がある。そのため今後もなほ無理をせねばなりませんまいが、多少ともその間に餘裕を置きたいと思ふのです。

▼その癖、このごろわたしは妙にさびしい。自分自身が寂しいばかりでなく、ぼんやりと思ひ浮べて來る知人の誰彼もみなひとしなみに寂しいものに思はれてならないのです。やつぱり歳のせゐでせう。子供の様な大人、大人の様な子供、苦笑せらるる事が多うございます。

▼一月いつばい、とりわけてもぼんやりと馬鹿の様になつて過しました。手紙の返事などどうぞゆるして下さい。

▼今年の寒さはまつたく別です。風邪を引かぬ様にして下さい。(二月三日)

三月 號

▼報告と愚痴、その範圍から脱してゐる歌が一體幾らあるであらう。

▼何々の山に登つた、途中で斯う／＼した景色を見た、楽しんで日曜にこれこれの事をした、斯う／＼いふ事を考へてゐるがなか／＼思ふ様にゆかぬ、漸く亭主をねせつけたとおもつたら赤んぼが泣き出した、等々、殆んどすべてが單なる報告であり、愚痴である。これらはその報告と愚痴とを公衆に示すことによつて安價な自慰を食つてゐるとも見ゆるのである。さうしたものにどうして自個獨特の感動なり氣魄なりが出るであらう。而して、其處にどうして眞實の歌が生れて來るであらう。

▼浮れて作つてゐる時は止むを得ないとしても、清書して封筒に入れる前になり、その詠草をよく凝視してほしい。そして、せめてその自分の缺點なりとも認めてほしいものである。

▼相當に解る人たちの作品を批評したい心は常に湧いてをる。それをよう果さないで、誠に心がめがしてをる。いづれ始めたいとは思ふが、先づとりあへず社友諸君の仲間うちで自分の好ましい人に作品を送つて批評を求めぬなり、相互批評を申込むな

りして下さつては如何であらう。批評される人もする人も得る所あらうとおもふ。

▼中島、野元兩君の詠草の置場所は原稿到着の日取の關係であらうなりました。

▼大悟法君が今月十二日出立、大分に歸省したついでにとていま九州の各地を廻つてゐます。各地でお世話になつてゐることとせう。わたしよりもお禮申しあげます。

▼高鹽君の『峽間』は一兩日中愈々製本出來の旨靜光社の中野秀郎君より今朝報知がありました。

▼酒には苦勞します。正月からの風邪がどうも思はしくなく、種々特異な症状が表はれ、結局酒精中毒から來る心臓の衰弱が原因だといふ事になり、懇々と攝酒の勸告を受けた。終にさうした時期が來たのだと自分も諦め、非常な勇氣で今まで朝晝晩とやつてゐた朝晝の二度をやめてしまつた。二三日たつた。さうすると今度はわたしは突然一種の痴呆状態に陥つてしまつた。といふより、中學の時見た物理實驗室で真空の試験をするとして玻璃器の中に一羽

の雀を入れ徐々として空氣を抜く。その時の雀の苦惱がとりもなほさず右の場合に於けるわたしの苦しみでありました。でも切齒し我慢し四五日は耐へ忍びましたが終に一種の危険を感じて、また、もともくあみになりました。斯くして二三日、雀は幸に空中に放たれました。但し、その都度の量をば減じました。すつかり元氣になるまで、接客、宴會の酒をば全廢することにしました。(二月二十六日午後)

四月號

▼『心の花』三月號に(前川佐美雄君執筆)「前月歌壇」として各誌の歌の批評が載つてゐた。本誌に就いては左の如く書いてある。

大悟法利雄氏

さささと遙かに浪の音きこゆ今宵もふけてい
たく冷ゆるに

かういふ歌が五十一首も並んでゐる。恠う調子を下げたか、れば百首二百首の歌作も容易であらう。この歌にしてももつと縮めてかゝらねば駄目である。字句の批評はその上でのことである。

若山喜志子氏

つばらかに夕日あびつつ羊の群動くともなく動きあるなり

月寒種羊牧場の歌である。初句「つばらかに」は問題がある。三句の名詞止は少し窮屈である。が恠ういふ歌は境地が難しいのだからと或る點迄の同情は出来る。一首としてもかなり詠みこなせてあると思ふ。

一體創作には大悟法利雄、高山三千樹、三苦守西、三苦京子氏などいふ人々に面白いところを持つてゐるが餘りに低調な爲に折角の擱んだ歌が臺無しになつてゐる。これは牧水氏の影響であらう。國民文學は詩が足りずに歌が堅い。創作は詩があつても調子が低くて歌が弱い。この二つの考察肝要たるべし。

また『常春』三月號には本誌一月號の合評(五人執筆)が出てゐる。これは相當長いもの故、中で高山君の作に對する分だけ此處に引いてみる。

降りたくてたまらざりしと言ふがごと今日久々

に雨の降るなり(三千樹)

(靖)「降るなり」といふのが、軽い調子のこの歌としては重すぎる。「降りくも」といひたい。

(榮太郎) この歌のおもしろさは童話的な發想にある。これがほんとうの童心から出てゐないので大人が子供らしく作つたといふ趣もありありと看取される。現在の歌壇の重々しく固苦しい行き方とは違つた味をもつてゐるのは結構だと思ふが非難はまぬかれぬ。

(秋人) これは香川景樹のいはゆる「わざとらしき」をさなめきやうであつて嫌味以上の嫌味をすら感ずる。おのれの心境をそのまま表現するのはいいが、かうした淺露な興味は得てこの派の人々の陥り入り易い最大の病所である。でろれん祭文以上の怪しげな存在でもある。大人が子供らしい情感をもつといふことは必ずしも童心の保有といひがたい。かうした態度の不純を痛感しない限り、這箇の機微はわかるまいと思ふ。

(金一郎) おもしろいといへるかもしれないが、

作者が眞剣に打ち込むといふ態度がないので、好感をもてない。

▼大悟法君の右の歌を一概に低調だと見てしまふことにはわたしは賛成しない。概念的にまた形式的に調子を強めて見せてある歌などより斯うした自然な、作らない中に眞實の調子といふものは籠つてあるものだと信ずる。大悟法君の昨今の歌を上乗の作だとは決して思つてゐない。寧ろ我等にも不満がある。が、現在の同君としての特色はあつた作の中に出てゐるのだと思ふ。空つ調子を張り上げたもののみが所謂「調子の高い」ものでは決して無い。「これは牧水氏の影響であらう」とわたしは一人で背負つた譯だが、その事なしとは敢て言はぬ。耳痛き言葉である。この痛さを分け持つていただければ幸である。

『常春』の高山君の歌の批評は、これはこれだけ一首引いて來ては少々無理である。然し此處に高山君の一面が出てゐないではない。従つて同君の受くべき批難の一部もこれらの批評の中に無しとは言はれ

ぬ。他はとにかく金一郎君の一言は當つてゐる。

▼兩誌の批評の自から一致する點は「創作」の歌は低調だといふ事になる様である。大悟法君の歌の所で言つたが如く一概に低調だとしてしまふ事には決して同感出來ない。然し一般に斯ういふ見解が行はれてゐるとすると我等もまた一考して見る必要があると思ふ。

▼世評はとにかく、わが社の歌に對する缺點に就いては始終わたしが言つて來てゐる事である。それが或る點では世評と一致して居る。改めてお互ひに考ふべき事であらう。

▼自由すぎる、子供つぼすぎる、といふ様な事が一方からは言へると思ふ。これらの特長は現時の常識的な形式的な引込式な窮屈な歌壇にあつては甚しく眼だつものであるかも知れぬ。眼ざはりであるかも知れぬ。我等は我等の趨かうとする所にまだ何等の障礙を感じてゐない。と共に年一年大人になつてゆく事も必要である。その人はその人なりの生長を期する事が必要である。單に眼の前の現實感興にのみ溺

れて先の見えない人があるとするれば、それは不幸である。

▼單に本號だけに見ても加藤君や小豆澤君の様な歌があるかと見れば竹添君高橋君の様なのがある。中村君があり、大村君があり、三橋君があり、高山大悟法三苦君たちがあり、喜志子やわたしの歌がある。みんなてんで違つてゐる。わたしはこれらを見る事を好む。そしてそれらの個性の歩一步と深んで行く事が右の様な世評を見るにつけても一層に祈られてならぬのである。自省、自重、自愛が祈られて

▼知つたかぶりは禁物だが、眞實に歌を知る事は必要である。空々乎として作つてゐないで、それらにみづから噛みしめて作る事が必要である。

▼さういふ事を考へて來ると『實際』創作をももつとよきものにせねばならぬ感が今更の様に湧いて來る。御存じの通りこの二三年わたしは旅ばかり歩いてゐた。旅でぐつたり勞れて歸つて來ては二三月

休養する。多少直ればまた出かける。さういふ状態

のもとに本誌の編輯を續けて來たのである。その間に諸君はわたしに構ひなく小休みなき精進をして來られたのである。大きな聲をして、もつと勉強しようなどと言へた義理でないのである。負ふ所まことに多く、謝罪し感謝せねばならぬことばかりである。

▼實はもう一度わたしは旅に出る事になつてゐる。夙うに出かける解であつたが、身體が利かずに延びてゐた。四月末か五月初め、朝鮮に出かける。約一ヶ月の豫定で、北海道の様に永引くことはしませぬ。朝鮮の社友諸君に待つて、貰つてゐるので氣がせくが、此處もう一ヶ月の休養をとつて元氣に發足します。而して今度を限りとして斯ういふ旅行をば全然よします。もう行く處もなくなつたし、第一身體が駄目だ。これを打ち切りにして、それこそもう岩の様におちつくつもりである。あれもやりたし、これもやりたし、今までに殺して來た希望をそれを期として一度に崩え出さしたつもりである。

▼五月號を編輯して出かけ、六月號をいつぞやの様

な自選歌號とすることにしたい。就いては最終頁の社告を見て頂き度い。即ち第一詠草組（一頁組といつたもの）の人は一人十五首（十五行分）を自選し、第二詠草組（題附組といつたもの）の人は一人九首づつ（九行分）を自選してよこし、其他の人の選をば大悟法君に代つて貰ふのである。

▼同時に社告してある様に今度「質疑應答」「課題詠草」の二欄を設けた。いづれも前から考へて来た計画のうちの一つである。朝鮮から歸つて始めたいとおもつてゐたが、相當時間のかゝる事でもあるし、序にいま發表したわけである。有益に且つ興味深く此等の欄の發達してゆく事を祈る。たゞ不真面目にならぬとも限らぬ憂ひがあるが、その事の無いのを望んでおく。平賀君は松江高等學校國語教授である。

▼高鹽君の『峽間』が愈々出た。心配してゐた装幀も誠に氣持よく出来、喜ばしい事である。來號は多分同書批評號にならうと思ふ。

▼なほ此處に喜ばしい報告は、我等の仲間内に同時に二冊の雑誌が發行せらるゝ事である。東京の『ぬ

はり』大阪の『文學』これである。創作社は兎角内輪ばかりを相手にしがちで、所謂歌壇的世間的に位置を求むる所が少なかつた。一面これは淋しい事でもあつた。いま斯うした雑誌が我等の中から出て『創作』の足らぬ所を補ひ異色を加へ、新進の意氣を以て自由大膽に各方面に發展して行くとなれば甚だ心強いことである。ことに『ぬはり』は大いに歌壇的に活躍する意氣込であるらしいから、一層この事が期待される。唯だ雑誌の創刊及び經營はその臺所に於て甚だ苦しいものである。どうかこの意味に於ても社友諸君全體の後援をお願いしたいものである。各誌の性質其他は廣告に就いて御承知を願ひたい。

▼本號所載のわたしの歌は『改造』『苦樂』『講談俱樂部』『文藝春秋』の四誌三月號から轉載したものである。

▼誌上の何々集とか創作詠草とかいふことにはあまり氣を使はないで頂き度い。その月々の出来不出来で自由にあゝもし斯うもして行きたいからである。

さうしてゐるうちに個性の確立して来る人の作だけは自然と解つて来るわけである。

▼古び乾びて鋭いのは難有くないが、幼く柔くて鋭いのは尊い。さういふ歌が昨今の何々集あたりにちよいと見えて来た。たのもしい事である。瑞々しい力を覺ゆるのである。

▼ちよいと此頃本誌制定の原稿紙を使はぬ人が出て来た。没書にするといふわけにもゆかず、一層これが愉快でない。どうか忘れないで原稿紙を使つてほしい。

▼感興往來の都合で時に三首五首規定より歌の数が多くなるのは先づよろしとして、それ以上をよこされるとうんざりする。さういふ人の作に限つてまた不思議と佳作に乏しい。

▼本誌三月號十九頁と二十頁とが刷り違ひになつてゐた。即ち十八頁の終り神山裕一君の「武藏野の或る町と題し我が町を歌ひ……」は二十頁の最初にかゝり、二十頁いさを君の歌は十九頁にかゝるのである。

▼大悟法君はこの十七日、松葉杖をつきながら九州から歸つて来た。松葉杖は黒木傳松君と共に熊本城見物の際、馬に嚙ぢられかけ、飛びのいた拍子に足をいためたのださうだ。人もあらうに同君を嚙ぢらうなどと甚だ愉快なる馬だが、傷は幸にたいしたことなく、この二三日、杖なしで歩いてゐるやうだ。

九州各地の歡待に酔つて、瘦せ細つて歸つて来た。▼丹後地方にまた大地震襲來、例の峰山町に近い社友坪倉重美君の故郷では父君及び二人の妹さんが大負傷し、家屋其他に非常な打撃を受けたといふ。お見舞を言ふのにも困る位ゐる氣の毒さを覺えた。

▼社にはこのごろ珍客續きである。二三日前越後の堀内彦陽君が本願寺參りの歸途に立寄り、半日話してゆき、昨日夕方、滋賀岐阜愛知諸縣の蠶種視察を終へたといふ中村松花君がやつて来た。廿九日には藤原染子さんがお子さんづれで見えるさうだ。明日天氣なら試験休みの子供たちを連れ中村君と湯ヶ島温泉に一二泊がけで行つて来ようかと思つてをる。

今日は小やみない雨であつた。然し、いゝ雨であつた。家のめぐりの桃が今日一日で二三分通りほころびた。二月から三月にかけて、今年の氣候はまことに變であつた。梅も遅れ、桃も遅れた。

▼屋後に眞竹を植ゑた。前に植ゑた孟宗は誠に貧弱で、且つ枯れたのもあつたが、今度のはなかく見ごとで、よくついて呉れさうである。竹はいゝ。早くこれが林になり、落葉が積り、その上を歩きながら歌を考へる様なことになりたものである。

▼お行儀をよくしてゐるせゐか、たいへん元氣になりました。今日など、中村君の相手をしながら一日でこの社便を書きあげたといふ勢ひです。(三月廿六日夕)

五月號

▼恒例の頓首叩頭を以てこの社便を書き出さねばならぬ事を悲しむ。それは先號出した社告をもう一度出さねばならぬ事である。六月號だけだと思つてゐた自選代選號を七月號迄延ばさねばならぬ事である。初め三四十日で済むと思つてゐた朝鮮旅行の日

程がわたしの身體の調子其他を氣遣うて呉れた同地の福島勉君たちの計らひですつと延びたのと、もうこれきり何處へも出ないと思ふ所から中國九州の一部にも寄り道をする事にした。ゆゑ、この様な變更を見る事になつたのである。

▼自選組は寧ろこれを喜んでゐるであらう。代選組にやゝ氣の毒だが、大悟法君の歌を見る眼はなかく、に確かである。萬々見こぼしの無い事をわたしは信するが、諸君の方でもそれを信じていたゞきたと思ふ。

▼然し兎に角に斯ういふことはいけない事と思ふが、事情どうにもならないのである。但し今度朝鮮から歸つて來たらもう安心である。何の氣遣ひもなく『創作』の事に専念する事が出来る。わたしもそれを樂しみにしてまたまた長途の旅に上るわけであるのだ。

▼五月四日當地發、五日廣島着、同市田中町七〇番地三浦敏夫君方に八日まで滞在、更らに大分宮崎地方に立寄つて十六日釜山に渡りいよく朝鮮行脚が

始まる。大體の日取ではそれから六月いつばいかゝる事になつてゐる。今度は一ヶ所から次ぎへ移るに相當の餘裕が置いてあるので身體は大分樂だと思ふ。若し渡鮮中わたしへお便り下さるならば、

六月一日までは

福島勉君方

全羅南道珍島

市山盛雄君方

六月廿四日までは

釜山府湓仙町西本願寺内 水室潔君方

あてにてそれゝ御手紙下さい。但し其處にその間留つてゐるのでないので拜見するのに多少時間がかかるものと思つて下さい。

▼行先各地との打合せ(これは大體済んだ留守中の手當等で此處數日半狂亂の忙しさを續けて居るが、割合に楽しい氣分で事に當つてゐる。

▼その中で不思議と歌が出來た。「鮎釣りの思出」は『文章俱樂部』五月號に、「ひとり言」は『ぬはり』に「溪間の春」は『中央公論』六月號にそれゝ發表さ

れるわけである。

▼『ぬはり』といへば同誌も大分景氣がよいとの事である。誠に喜ばしい。また村松道彌、中野秀郎、熊田宣隆君たちの『路上』も復活するさうだ。俄に親類が増えた形だ。

▼サテ此處で不景氣な事を書く。先日集金を出した。型の如く支拂拒絶で返つて來たが、餘りに多いので試みに此等を寄せて見ると驚く勿れ六百貳拾六圓五拾七錢となつた。此處數ヶ月の間に(中には舊いものもあるが)これだけの雑誌をたゞ棄て、來たわけである。これでは幾らわたしが旅稼ぎをして廻つたところで印刷所の借金の無くならう道理はないのである。今までわたしは、あの人には氣の毒だ、あの人は惜しい、などと幾度かこの支拂拒絶を見ぬふりして來てゐた。が、考へるにそれもこちらの思ひすこの悲哀をも感じたので、今後一切この事無しにする。つまりこの集金郵便といふものに一切わたしは眼を通さない事にする。時が來れば集金を出し拒絶なら

ば名前を略く、それを一切無感覺に庶務の手一つで行ふ事にするといふ事に改める。但し盡すだけの手續をして下されば無論こちらもそれには應ずる。どうかその様承知しておいて下さい。

▼今號は第一詠草組の顔振がちと淋しかった。たゞ京子さんの活躍は目ざましい。第二組集組には眼だつたのがあつた。長谷川、谷口、野口、高島君等の中顔どこが時を同じうして起つたのなども春である。若い人たちにはもつと活氣があつていゝ。來月さ來月と御無沙汰だが八月號分では大いにこちらを驚かす様勉強しておいて下さい。

▼『峽間』評をわたしも書くつもりであつたが、間に合はなかつた。出立迄にか旅先でか書いて六月號には出す。

▼朝鮮紀行は毎日葉書に書いて出すことにする。鉛筆の走りがきではあらうが、さきさきで書いて行かうと思ふ。これが續いてをれば靜かなるよき旅であり、斷えたらばのみすきのかなしき旅であると想つてゐて下さい。どうか本當によき旅であつて呉れか

しと祈らるゝ。

▼いま一息、いま一息と押し来て来た半折行脚の事業であつた。それが愈々今度で千秋樂となるのである。おもへば實に感無量、合掌せらるゝ心地である。どうぞ元氣で歸つて来るのを待つて、下さい。(四月二十八日)

七月號

▼朝鮮咸鏡南道元山府春日町(といふと港の背をなす丘陵の中腹に在る住宅地です) 荻濱氏の別荘にてこれを認めます。

▼早いもので朝鮮に入つてもう一月と十日ほどたつたわけです。その間、遠く全羅南道の珍島といふ島にも渡り、あちこちと定められた日程に従つて歩き廻り、去る十三日京城を立つて金剛山に入りました。入つて第三日目溪の水を飲みすぎたせゐるか路傍の小亭に鮮童の賣つてゐた麥酒を飲んだせゐるか、その夜烈しい腹痛と下痢とを催し大いに苦しみました。一兩日じつと靜養してをればよかつたのですが、きりつめた日程なのでそれを狂はすまいと無理をしてそ

の翌日内金剛から温井嶺を越え、外金剛へ入りました。そして其處で愈々つぶれて温井里といふ温泉の宿屋に寝てゐましたが運悪く江原道と全鮮小學校教師五百名からの講習會が其處で開かれ、宿いつばいに詰め込まれた諸君の騒ぎ方は一方ならず、且つ土地に醫者のあない心細さもあつてまたまた腰を押つたて、去る十九日當地まで辿りつきました。そして「真人」同人である葛木梓君や早稻田の校友である荻濱信夫君たちの世話になつて今日までこの朝鮮式の温泉(オンドル)の部屋に寝て來ました。おかげで大分よろしく、今日は起き上つてこれを書かうかといふ元氣も出て來ました。明日よりはまた此處で講演會歌會揮毫會宴會をつとめて二十七日京城へ歸ります。京城滞在中に仁川に行き、七月の三四日ころ釜山に引返して其處で三四日滞在の上内地へ引上げます。平壤や慶州を見物する筈でしたが、もう身體が利きません。下之關から大分、延岡と廻つて郷里坪谷村に母を見舞ひ、愈々沼津へ歸りますのは七月の二十日前後にもなりませうか。

▼朝鮮はわたしにはみな珍しく見えました。内地で考へてゐた朝鮮や所謂鮮人と違つて、すべてが至極明るく柔らかく且つ長閑でありました。うち見たところ全てが夢の國お伽噺の國としか見えません。がその裡に矢張りいたましい現實の潜んでゐるのを認めぬわけには參りませぬ。とにかくわたしはすべてを面白く見て廻りました。周圍二十餘里、七平方里にわたるといふ奇怪至極の山容をもつ金剛山をも先づ完全に見て來ました。流石に面白いとおもひました。身體をいためなかつたならば實に愉快であつたであります。

▼今度の渡鮮はもともと揮毫行脚が目的であつたのですが、いつか知らぬ話をして歩く行脚となつてしまつた傾向があります。各地とも熱心に聽かるとので自づとこちらも己れを忘れて話すといふ事になり、先づわたしの知つてをるだけの事をば諸君の前にぶちまけて來たといふ感がしてをります。随分とこれはいろ／＼の意味で苦勞なことでありましたが、わたしはいまこれに就いて少なからぬ満足を感じ

えてをります。及ばずながらも道のために盡したといふ氣持も動いてをるのです。

▼何處へ行つてもさうですが、社友諸君のわたしを待たせて下さる熱誠は全く言葉などに述べつくせぬものがありました。どうして斯うであらうと思ふといつてもわたしの臉は熱くなりました。

▼残念なことに紀行がその日に書けませんでした。可笑しい様ですが、實際葉書一本書いてをる餘裕が無いのです。幸ひ家内が丁寧な日々のノートをとつてをりますから、それを種にまたぼつぼつと書いてゆく事にします。家内も馴れぬ土地で弱つてはをりますが寧ろわたしより元氣です。

▼八月號はともすると多少の遅刊を見るかも知れません。そのつもりでおろして下さい。では左様なら、今日は四十何日目といふ久し振の雨が降つてゐます（六月二十三日午後一時）

八月號

▼今度は内地、別府温泉龜の井旅館にてこの社便の筆をとります。朝鮮最後の地釜山を立つたは七月十

一日夜、十二日朝下ノ關にあがると直ぐ當地へ來ました。

▼先づ吉例のお詫びお願ひごから申します。わたしは明十七日大分市に開かるる歌會に出席、直ぐその足で日向の延岡に向ひます。其處で四五日、郷里坪谷村に入つて六七日、それで長かつた今度の旅も全く終るのですが、坪谷から直行して沼津へ歸るにしてもどうしても月末になります。歸つたからとてこの勞れ果てた身體ではオイソレと爲事に着手する餘裕などあらうやうもありません。必ず一二週間は床を延べてね込むことになりませう。スルト、久しくやらなかつた「八月號休刊」または「八九月合併號」などといふものが表れて來るに相違ありません。

▼それがいかにも残念に思はれますので、ついでのことにもう一號だけ、六七號と同様の状態で編輯發行したいと思ふのです。唯だ第一第二詠草はもう自選では間に合ひませぬ故詠草の初めから定められた數だけの歌をとつて一回分とする、といふことにしたいのです。かなりの迷惑とおもひますが、どうか

眼をつぶつて承知して下さい。

▼その代り、わたしの半折行脚もいよゝゝこれでおしまひとなりました。もう何國へも出かけませぬ。これから漸くわたしの書齋生活が始まります。生れて初めての氣持で机に向はうと思つてをります。他のすべてと同じくおちついて心を向け得なかつた『創作』の事にもそれと同じ氣持で當つて行かうと思つてをります。どうせ急にどうといふことにもゆきませぬが、とにかく多少の期待をこの冬あたりからの『創作』に持つて下さい。

▼身體の疲れといへば實にひどいものです。この十日あまり、前頭部、兩脇の下から乳にかけ、また下腹部から股間にかけて、皮膚筋肉がしびれ切つてをります。兩脚の凝りかたまた甚しく、席を立つ時には兩手をついてでなくては痛くて立てませぬ。長坐に耐へえずまた永く横になつてゐるのも苦しい。せいせい息を切りながら辛うじて此處まで漕ぎつけて參りました。十二日大分に行つて見ると歌會までに五日間の餘裕があるといふ。これ幸ひと別府へ立ち戻

り、龜の井旅館の浴室附四室一棟といふ離室を借り切り、せめてもの心やりに悲しき贅澤をしてをるわけです。沼津へ歸ればもつともつとぐつたりするでせう。家内の方も同様で、此處に着くときから二六時中口をあいて眠つてをる様子です。

▼人間といふものは可笑しなものでふとした行きがかりから妙な事に夢中になつてみたり、せねばならなかつたことをとんと忘れてゐたり、まことに可笑しなものですね。ことにわたしの様なほせ性には別してもさうした事が多いやうです。いい年をして恥しい話です。

▼幸ひとわたしは全てを受入れる性質を持つてをるやうです。すべての經驗がすべて無駄でなかつたといふ氣持を持つてゐます。さう思ひますと、今迄の過去がありますだけこれからの朝夕が何だかたいへん楽しんで待たれる思ひです。それこそうらははつかしい様な氣持でこれからの日を迎へてゆきたいものと思つてをります。

▼朝鮮ではひと月前に九十度からの暑さでしたが

今日は此處でも九十一度とやらに昇つてをります。霞んだやうな兩眼をあけてぼんやり庭の樹木を見てあますと、久しく味はなかつた夏の哀愁といふ風のものをはのかにほのかに感じます。早く沼津へ歸り度い。(七月十六日正午、別府龜の井ホテルにて)

九月號

▼長い旅より歸つて来て今日で三十二日目、あやしき机に向つてをります。まことはチャブ臺を布團の上に置きたるものです。覺悟してゐた以上の勞れが出て、歸つてからずつと寢込んでゐたといふわけです。

▼脚を初め身體のところ／＼がしびれて痛む旨をば先號に書きましたが、それが嵩じて終には歩くことも困難になりました。或る土地の醫者は脚氣だといひ、或る土地では腸疾患だと診断しました。それを押し／＼して沼津へ歸りつきましたは先月の末、隣家へ挨拶にゆくこともようせず、寢込んでしまつたのです。

▼此處でも診断がなか／＼一定せず、漸くこの十

日ほど前に「過勞若しくは營養不良から來た神經衰弱」といふことに一致しました。何といふ不景氣千萬なる名前ぞや。

▼然し、これならば小生自身うべなはざるを得ませんでした。朝鮮に樹木少く、従つて水に乏しく、實に怪しき溜り水を皆して争うて飲んでをるのです。

所謂醉覺めの水で、小生はまたこれを食り飲む傾向を持つてゐます。ために早速おなかをこはし、彼地に居る間常に音楽を奏しながら歩いてゐたといふ形でした。酒を飲めば物をたべぬが小生の癖とて物をば喰はず奏樂を断たずでは身體の持てやう道理の無いわけでした。

▼單に脚が痛むのみならず、頭がすつかり駄目になつてをります。昨日あつたことだか一月も前にあつた事だか、いま逢つたのは誰であつたか、一切要領を得ないといふ状態に在ります。仕入れるのに相當骨を折つた病氣のことゝて、オイソレと直りさうにもなく、醫師とも相談の上、二三日うち、近くの温泉に行つてゆつくり養生して來ようと思つてをります。

す。單に朝鮮で仕入れた病氣といふでなくいやな行脚を始めて以來の積り積つた疲勞が斯うした形をとつて表れて來たものと見るべきであります。

▼二三日うち、多分伊豆國田方郡船原温泉船原ホテルといふへ参り、二三週間滞在するつもりです。どうかせい／＼罵倒なり何なりのおたよりを寄せて下さいまし。

▼右の有様にて、朝鮮九州地方の社友諸君を初めどちらへもまだ葉書一本よう書かずにあます。どうかゆるして下さい。

▼不景氣な話は以上にて切りあげます。なほ右様申しましてもどうぞ御心配下さらぬ様に願ひます。ゆつくり身體を休めさへすれば直ることなのです。これといふ根據ある悪病が宿つてゐるのではないのださうです。(血液検査其他、充分調べました。)實際、この四五年、少々身體を酷待しすぎました。われながら自分に申譯ないことに思つてをります。

▼以上の様に書いて來ると朝鮮ではいかにもひどい目に會つてゐた様にも聞えますが、甚ださうではありませんでした。今までに知らぬ旅の味をもあぢはうて來たのです。いづれ紀行に書きます。歌も兎の糞の様にぼつり／＼と出來ました。これは來號まとめて本誌に發表します。

▼歌といへば今度行く温泉ではその後の歌集を編みたいものなどと考へてゐます。『山櫻の歌』以後のことで、丁度右の精力浪費行脚時代の作に當つてをりますが、案外な數を作つてをるかも知れず、また案外な玉をその中から拾ひ出し得ないとも限らないなどと考へてゐます。このごろ悉く不眠症にて、ねられぬまゝにその名を何とつけようかなどと苦勞してゐます。

▼質疑應答欄の原稿が一向に來ないやうです。あまりにむつかしく考へず、親しい友人に話しかくる様な氣持でどん／＼質疑して下さい。こちらでもよう

答へぬことは正直にさう言ひますし、またあまりに幼いものはお預りにしないとも限りません。

▼今號まで選歌の一部を大悟法君に頼みました。これからはもう何處へも行かず、ゆつくりと小生自身それ〴〵諸君の歌を拜見することになります。これは旅さきでの楽しみの一つでありました。

▼何だかたいへん不景氣な社便になりましたが、ゆるして下さい。好きな温泉に浸れば立たない脚も直ぐ立ちませうし、この石頭も柔くなりませう。早くよくなつて、落ちついて歌が作りたい。サテ、その後世間に素晴らしい歌が出てをりましたか。一向歌壇といふものに御無沙汰してゐたので一切見當がつかないが、何はともあれ久し振に歌といふものを作つて見ますか。

▼辛うじて右だけ書きました。(九月一日)

十月號

▼今度は極めてかんたんに。

▼どうもよくない。船原温泉に二週間ほど行つてゐたものゝ、そして其處の湯が甚だ今の身體にいゝこ

とをば承知しながらも、何としても寂しくてたまらず、また自宅に逃げ歸つて来て寢込んでをる。温泉もいゝけれどまだ今のところそれよりも醫師の方をたよりとせねばならぬのです。

▼と云つて、要するに「大きな疲勞」にすぎないので、のんきに靜養さへすれば直るのです。心配しないで下さい。

▼朝鮮での歌を全部まとめて出さうとしたら、あちこちと書きちらしてあつたゝめ、急に纏めることが出来ませんでした。來號出します。

▼歌集も、考へてみれば『山櫻の歌』から四年目かに當るので、早く出版したいと思ふがこれもあちこちと散らばつてゐるので編輯に大骨らしい。然し、寢ながらの爲事にぼつぼつとやつてみませう。

▼しみ〴〵と自分の机に向ふといふことを私はこの二三年間放棄しておいた。悲しい事であつたが、止むを得なかつた。これからその二三年の分をも取り返すつもりで一心に嚙りつきたいと思ふ。

▼終りに長友古泉千樫君の逝去せられた事を遅れ乍

らにお知らせし謹んで弔意を表する。

十一月號

▼自分に作らぬ時にはひとのものにも興味の無いものである。が、それにしても昨今の諸君の歌はひどい。一人残らずよかれとはよう言はぬが、せめて一人か二人毎月出色の物を見せて呉れると誠に難有いと思ふ。

▼此頃『創作』の歌に對する世間の評判が極めて悪い。察するにこれは牧水個人に對する感情が多分である様で、そんな事は問題にするに足らぬ。牧水には牧水の信念があつてすべての事をやつてゐる。が、諸君の歌の創作社々友として近來ひどく弛緩してゐる事も否まれぬ。亦た各自に考へて貰ひたい事と思ふ。

▼潮みどり子がなくなつた。今月十三日の事である。歳三十一。長谷川銀作君に嫁してより殆んど病氣で過して來た様なもので本人は無論、長谷川君にも誠に氣の毒であつた。

▼右の始末で、丁度本號發表に當つてゐた同女の選

歌も豫選だけで終つてゐたさうだ。そのまゝ本號に發表する。従つて入選者に短冊も贈れない事になつた。來號をば同女の追悼號として出す。又その歌集をぬはり社から早急に出版する事になつた。詳細は來號に書く。

▼みどり子の歌で二三年前の『早稻田文學』に發表された物を御存じのかたあらば大至急東京市外東中野上之原七六七、長谷川銀作宛お知らせ願ひたいと思ふ。

▼わたしの健康も大分よくなつた。廊下散歩から庭内に移り、二三日前から漸く前の松原を歩み得る様になつた。この分では程なく草鞋ばきで天城山あたりへ出懸くる事が出来ませう。従つて怠け切つてゐた一切の事にも精出し得ると信じます。病氣と、怠屈とはほんともう懲り〴〵した。(二十七日)

十二月號

▼いつかこれで十二月號の社便を書くことになつた。わたしにとつては何彼と事の多かつた年、早く暮れて呉れるがよいかも知れぬ。

▼雑誌十一冊を手許に揃へておいて言ふのではないけれど、歌の方でもあまりめばしい記録を留めて來なかつた様におもふ。何かなし淋しい年であつた。

▼折も折、この十二月號は潮みどり追悼號となつて出るのである。

▼潮みどりに就いては各執筆者諸君の感懐にも見えてをる様に、とにかくえらい人であつた。諸君の原稿を讀んで、編輯者は先づ泣いた。

▼追悼號執筆諸君に厚く御禮申します。なほ『みどり歌集』は既に刷り上つて目下製本中であるといふ。今月中には出来るのである。出来るなら社友は勿論社友を通じての知人諸君の手にも一冊を備へてほしい様に思はるゝのである。縁者の身として差控ふべきことも知れないが、今のところ縁者だけになほ斯う言ひたいのを思ふ。

▼同女の歌で、未發表であつたものを集めて今號に載せておいた。反物紙の裏とか、よそから來た手紙の封筒の裏とかいふ様なものに書き放してあつたのが多く、これだけ集むるにもたいへんな手數であつ

たさうだ。まあ然し、これだけ集つただけでも慰ま

る。發表しようとして作つてあなかつたゞけにその缺點も長所も共によく表れてあるとおもふ。其他詩の様なもの、日記感想類、すべてよく纏めてなかつたので、とりあへず眼についたゞけを歌のあとに加へておいた。故人の眞面目ならざるはない。

▼この遺稿のために、女流諸君の詠草を來號廻しとした。許して下さい。來號分と一緒にして出します。

▼同女の永眠に就き、我等夫婦にまで丁重な御くやみを頂き、忝うございました。略儀ながら此處で御禮申します。

▼なほ『水鏡』の岩谷莫哀君がこの二十日になくなられた。永い間の重患に耐へて來て終に此處に及ばれたのをおもふと實にいたましい。いづれ遺稿が出るであらうからそれにより故人を紹介したいとおもふ。

▼兎に角に今年は淋しい年であつた。年ごとに繰返す言葉であるが、それこそ來年はもつとどうにかした年であつてほしい。

▼自分のことばかり言つてゐた。諸君の今年はどうであつたか。とにかく相共に來年を祝福したいと思ふ。

▼『流るる水』（『野蒜の花』改題）といふものを書き出した。これは謂はゞ社友諸君へ宛てゝのわたしのたよりの様な氣持で筆をとるものである。この社便もそれであるが、こちらは雑用が主になりがちである。一方はたゞ爐を圍んで閑談するといふ風のものであらうか。

▼質疑應答がどうも問ひも答へも幼稚極るもので甚だ面目ないが、お互ひにめくら千人の中の人々として斯うしてほつゝ進んで行くことに致しませう。遠慮せず質問をよこして下さい。但し、こちらでお預りするものが無いとは限らぬと承知しておいて下さい。また同じ人のみの質問も困る。その邊、然るべく加減して下さい。

▼吉例により年賀廣告を募ります。實はこれは十一月號で募集すべきであつたのをツイ失念して、たいへん急なことになつたが、振替で申込むのが遅れさ

うであつたら先づ葉書で申し込んでおいて振替を拂ひ込むといふことにして下さい。規定、次頁の通り。

▼なほ振替の話、今月は年末ゆゑ社費を拂ひ込んでいたゞきたい。多忙の人、郵便局に遠い人は葉書一本下さらば集金郵便に托します。集金をひどく嫌ふ人がある様だが、考へやうによると甚だ便利なものでもあるのです。面倒なのは拂ひ込む人より集金用紙にいろゝゝと同じ様な文字を幾所にも書き込まねばならぬこちらにあるのだが、其處は諦める。唯だあの紙がそのまゝそつくり返つて來るのを見るのは、慣れてゐても、愉快でない。一考を煩はし度い。

▼『ぬはり』出でて早いもので既に半歳、随分賑かになつて來た様だ。此處で困る事は『ぬはり』と『創作』との双方に歌を出してゐる人で、誰々はどちらに何首發表されて、どういふ待遇だ、それにこちらでは斯うだといふ風の壁訴訟を聞く様になつたことで、これは選者としてまた編輯者として甚だ困る事で且つ愉快でない。『ぬはり』の方でも困つてゐるであらう。で、斯ういふ事にした。歌は必ず一方に

いかに出さぬこと、といふ事に。これは一般社友のみでなく、大きな人たちにもその様にして貰ひ度い。その方がお互ひさつぱりして氣持がい。

▼來年度から本誌の寄贈名簿を改めます。縮少しますので、従來行つてゐて行かなくなる向きが若干あるわけです。行つても行かなくてもよきさうなものです。念のため此處に書きつけておきます。

▼昨夜また沼津に火事が、しかも一夜に三ヶ所（一ヶ所は小火）あり、一つは松原續きの千木濱のお寺だつたので、一寸驚きましたが松原に移らずに濟みました。斯うなると、池はよく掘つた。

▼此頃、漸く濱まで出懸けられます。床屋へは俵にて通ふといふ所。

▼サテ、いかにも歳末號らしい社便になりました。これにて、おしまひ。（廿三日午後二時）

昭和三年

一月號

▼これで今年の最後の編輯を終つた。

▼この一二年、わたしは殆んどうちをそとに過してゐたので、そしてもう來年からこそ何處へも行かないで机に嚙りつけるから、と思ふとこの今年の最後の編輯といふことが妙に身にしみるのである。まことにその間社友諸君に對しては何彼と相濟まぬことをしてゐたし、自分自身ではまた半年も寢込むほどの病氣をしてしまった。さういふ意味に於ても今年の十二月から來年の一月に移るといふ平凡事がまことに常ならず考へられてならぬのである。謂はゞいい機會に正月が來て呉れたといふ氣持である。どうかこの氣持はその場限りのものでないものであつてほしいと自分ながらに祈らるる。一年一年のものでなく、一生に何度かの大きな正月であつてほしいものだと思はるゝのである。

▼何事もむだではなかつた、と思ふ癖を此頃わたしは持つ様になつた。と同時にこれから先に對しての自負自責の念も自づと深くなつて行く様な事になるであらうと思ふ。

▼妙な社便になつた様だが、ついで故、もう一つの此頃の癖をも書きつけておかう。それは、自分自身を自然の一部だと思ふ様になつた事である。くだらぬことを言ふな、と貶しめ給ふな、解り切つた事の様でこの事はなか／＼解りにくい事であつたとわたしは信じてをる。そしてよくこそ斯う思ふ様になつたと自分自身に感謝して居るのである。この心持、解つて呉れる人はよく解つて呉れるであらう。自分は自然の一部である、また、自分は自然の裡に在るといふ氣持、である。どうかこの氣持が歩一步と深んで行つてくれ、ばい、と祈つてをる。

▼第一、第二詠草のあたりに多少の變動があつた。今度は數も多いし、こと／＼しく紹介するのを見合せ、寧ろそれ等移動した人たちの間でめい／＼われとわれみづからに承知合點して頂き度いことに思

ふ。

▼氣のせぬか、集のあたり、ことに女流の人たちの作に甚しく清新の氣の動いてゐるのを感じた。第一第二詠草のあたりと比べて面白く讀まるゝことであらう。平賀、重田などいふ珍しい顔ぶれの出したのも新年號らしい。

▼實はこの新年號から何か新しい企てをして見度いと思つてゐたのであつたが、何分にも手が廻らなかつた。そしてその代りに(といふでもあるまいが)皆の歌を多少甘く採つておいた。前にも言ふ様に、これからは全く本誌の編輯その他に専念することになるので追々と何かよき催しが誌上に行はれて行くであらうとおもふ。

▼たゞ、今號でも第一頁から十頁までの詠草などは相當眼立つものであらうことを信ずる。これもまた甘過ぎるなどいふことにならうも知れぬが、甘さ結構ではないか。わたしはどうかしてその作者のよき特質を見出さうと努めてゐる。缺點も眼につかぬではなからうが、それを採すより先にまづ長所を讚

美したい。とにかくにこれだけの歌を本誌が持ち得ることは幸福である。

▼今號、中島咲子さんの選歌を出す筈であつたが、選者の都合で中止することになつた。なほ質疑應答欄を來號廻しにした。投稿した人たちにお詫びします。

▼『潮みどり歌集』が見ごと本となつて出版せられた。前田孝愛君の裝幀なども立派なものである。そしてなか／＼堂々たる歌集となつた。わが社の外でもよくこの一冊を讀んで呉れた様である。残本の盡きぬうち、發賣元へ註文していただきたい。その紹介を自分で書きたいと思つてゐるが、本誌には終に書けなかつた。

▼何彼とまた申し譯の社便となつた様だ。が忙しくて何も出来なかつたと書き得る様になつたことをば寧ろ喜んで頂き度い。今ではもう脚の方は殆んど大丈夫です。たゞ、頭は、いけない。昨日一昨日の事を痛快に忘れたりして平然として居る。選歌などにも今迄の二三倍程の努力と時間を要する。然しも

う病人の域をば確かに離れた。

▼謂はゞその日稼ぎの身で半年も寝てゐたといふことは並ならぬ痛事であつた。その痛さがこの年末といふ奴と一緒にやつて來た。ことにお勝手のあたりの風景は誠に慘たるものがある様だ。而してその御勝手にだ。偉大なる奴が二つ鎮座してゐる。四斗樽だ。ひとつは三四年來常用のもので廣島縣の産、創作社とは縁の深い酒である。もう一つは社友村上可卿君が醸す所のもので、思ひもかけず昨日送り届けられた。この二つの樽の前に朝に宵に影の如くに佇立する所の一個の人物を想像して見給へ、即ち『自然はわが裡に在り我は自然と共に在り』といふ世界が自づと其處に開けて來るのである。

▼ともかくにも新年はめでたし／＼と祝ひ納め度い。どうか諸君も面影ながらにこの二つの樽の前に佇立したつもりになつて共に彌榮の喜びを擧げてほしいものである。(昭和二年十二月廿七日午前四時)

二月號

○不思議と今月は子供誕生のめでたい歌が澤山あつ

た。夫々の詠草を通じて十人を越えてゐたであらう(もつともその歌の誌上に出ぬものもあつた筈だが)めでたき月であつた。

○その癖、佳作もまた歌の數としても、少なかつた。これは暮と正月の影響と思ふ。

○質疑應答も少々あてられた氣味であるが、先づ此儘で續けて見よう。なほ、先月休んだ分を何處かへしまひ忘れて、その後の分をとりあへず今號に出しておいた。先月分のは探し出して來號に出します。

○運わるく、本誌編輯の最後になつてわたしは風邪を引いてしまつた。咳と頭痛とに耐へながら實はこれを書いてゐる次第である。ために自分の歌を作つて入れるためにあけておいた第一詠草最後のページががらあきのままになつてしまつた。不體裁だが、止むを得ない。今まではよく他の雜誌に出したものを月遅れにして本誌に出してゐたが、今年からはよさうとおもふので、それを埋草に使ふわけにもゆかぬ。來號あたり、うんと作つて出させよう。作りたゝ氣がしてゐたので、必ず出來ると自信してゐたの

であつた。

○やることにだらしがなくて、わたし自身にもなさげなく思ふ。何處に勤めてをるではなし、ひまな様に見ゆるか知れぬが、實際はわたしもこれではなかな忙しい。始終何彼と追はれ續けてゐる。考へねばならぬこと、おもふ。

○梅がいま満開である、松原のなかの椿も大分咲いた。いゝ季節であるに、ろくな散歩遠足も出来ないで残念である。病氣以來何彼とちゞみ加減で、不景氣である。どうかしてこの不景氣をよき方面に轉回運用してやりたいものといま考へてゐる。

○『潮みどり歌集』の批評がまた來號に延びた。書くには必ず書く。身に近かつた人だけに却つて書きづらいのを感じてゐる。

○作るのもだが佳い歌が讀み度い。社内の人のにも佳いのあるにはあるが、まだ何處やら形が小さい様で、満足出來かねる。其處に行くと萬葉である。あれを、聲あげて讀んでゐると、全く心がせい／＼して來る。社外のたとへば各社の有數の人たちの歌

をも近年とんと讀んでゐなかつたので、これから精々讀まして貰はうと思つてをる。

○大きな聲で讀みあげれば讀みあぐるほど愈々堂々として來る秀歌を諸君作らうではないか。顯微鏡近眼鏡式のはうるさくていけない。

○自分の新歌集にもほんの一寸手をつけたばかりで、なげやりになつてゐる。これも速く纏めたい。題は『黒松』としようと思つてをる。千本松原の松を名に借りるのだ。

○サテ、これで止す。賀状を頂きつばなしで濟みませぬ。實は年の暮に三包ほど葉書を買つて來てはあるのだが、封のまゝなのです。

○詠草、社用は必ず創作社宛のこと、牧水宛にするに遅れるかなくなるかします。なほ詠草は出來るなら開封にして下さい。若しさうでなかつたら封筒に『創作詠草』と必ず書いておいて下さい。但しその中には詠草のみ封入の事、用事は別にして下さい。でない、その用事は遅れます。課題歌は別封に及ばず、但し、必ず別紙に認め、普通詠草と一緒に綴ぢ

ぬこと。以上、何でもない事です。氣をつけて下さい。

○ぬくかつたり寒かつたり、いやな天氣が続きます。それにやられてくつしやん／＼をやつてるわけです。(一月三十日、午前十一時)

三月號

▼「流るゝ水」を書きだしてからこの「創作社だより」に書くことが無くて困る。

▼第一、第二詠草欄はさうでもないが、その他の欄はその月の出來榮によつてあちこち動かして行かうと思ふので、さう承知してゐて下さい。

▼從來の質疑應答のほかに「批評添削欄」といふ風のものを書くことにした。これは普通の詠草中から歌を引用してもいゝのだが、特に斯ういふ歌を批評添削して貰ひたいといふ向きがあらうと思ふので別にそのための歌を送つて貰ひたいと思ふ。出來るならその作者だけでなく一般の讀者のためにもなる様にと思ふのでそれにふさはしい様な歌から先に採用して誌上に載せて行きたいと思ふ。規定は下の通

り。

▼本號掲載の平賀君の返事なども單に質問者のみならず其他の人たちには是非讀んで貰ひたい。

▼越前翠村君がまた病氣だといふ。ために本號に載せる筈であつた同君選課題歌はとりやめになつた。

▼今月、歌がまた出來なかつた。社友諸君からお叱りをば受けてゐるし、作るつもりではあるのだが、どうもいけない。もう少し頭の直るまで遊ばしておいて下さい。

▼どうも少し歌の採りやうが甘いやうだし、且つ歌のほかのものを漸次に載せて行かうと思ふので、來號あたりからずつと歌の數を少くすることにします。

これはいつも思ふことだつたが、愈々實行したい。と共に詠草歌數は必ず規定通りにして下さい。多く書いてあつても廿首以上は拜見しませぬ。(たゞ、第一、第二詠草の部だけはこの例外と見て頂きたい。)

▼この間の夜、箱根山に野火が頻りに燃えてゐた。晝間は、ことにこの二三日のこの山の霞んで居る姿は見てゐてうらかなしい心を誘ふ。富士も霞む。白髪

を生やしてゐて春愁でもあるまいが、たしかにさうしたものがいまわたしの心をひどく重くしてゐる。
 ▼草鞋が履けたらなア、としみ／＼思ふ。まだ脚が痛いのだ。が、これで三月號は済むし、無理を承知で、ひよつこり何處かへ出かけるか。そんな事を思ふと、早や身體の其處此處がむづ／＼して来る。アア、アア、といふ心持だ。(二月二十八日)

四月號

▼社の三方を圍んである桃畑の花が今日あたり、眞盛りだ。

▼鷺野老夫妻を初め三浦敏夫、杉本萍吉、藤原東川の諸老が一齊に奮起した。三橋隆臣君ではないが、まさしく「春は來にけり」である。

▼不景氣なのはわたし一人だ。第一詠草の尻が九首分あくからせてそれだけお作りなさいと利雄さんが憫れむ如くに言ふ。よし／＼九首位ゐ、校正の出るまでには作りあげるよ。

▼先日の伊豆歩きの時もノートを一冊新しく買つて、これに百首は確かに書きつけて来るぞと威張つ

て出かけたのであつたが、なにごとぞ、もとの眞白なまゝで持つて歸つた。唯だ、第一頁の頭に沼津一〇六二番と電話の番號が出立前に書かれたまゝに残つてゐた。自宅の電話番號をもよう覚えぬといふ頭に、歌を作れば少々無理かも知れぬ。

▼伊豆行は面白かつた。が、悪い癖でよそに出たりひとの顔を見たりすると一方を過していけない。いまわたしは朝二合晝二合夕方四合／＼めて一升(枺目)が違ふと言ひ給ふな、この液體の特質だ)が毎日のきめである。よそに出ると忽ちそのきめを破つてしまふ。そしてそれが今直ぐ身體に來る。もう暫く何處へも出ず誰にも逢はずで過すことにせねばならぬ様である。東京にも用事もあり皆にも逢ひたいが、我慢します。

▼批評添削欄の原稿は澤山來た。それを見ながら進んでこちらから物を言ひかけた様なものゝ無かつた事を遺憾に思ふ。第一に餘りに幼稚、第二に不眞面目。第一の方は止むを得ないが第二の方は困る。辛うじて本號に掲げた分だけを探ることにした。

最初の事で様子が解らなかつたといふ點もあつたらう。逐號、いゝものにしてゆきたい。質疑應答欄の方は全部お預りにした。

▼今月上旬、大阪の大島武雄君方に大悟法利雄の弟と稱して訪ねてゆきこれより田中冷灰子君を訪ねてゆくから旅費を貸せと云つて寄つた男がゐた相である。無論、僞者である。前にも似た事があつた。用心して下さい。同じく諸方をねだつて歩く歌人上りの(これは著名な)某が二三日前何度目かに社にも來た。これは警官を煩はした。

(中略)

▼では、左様なら。(三月二十八日)

五月號

▼濫作はよさう。いつまでもそれをやつてゐたでは作者自身に進歩が無いとしみ／＼思はれて來た。何の反省もなく、たゞもう安易方で手軽にポイ／＼と片附けて行つたのではまつたく何百千首作つたところで無意味である。それも五七七と指を折つて作る程度の初歩の人ならば練習のためといふことも

あるが、兎に角もう右や左の見える人たちがいい氣になつて唯だ作りさへすればいゝで夢中になつてゐるのは一種の自己催眠で、はたで見えてゐてみじめである。いゝかげんで眼を覺すことにしよう。但し一首々々どつしりしたのが澤山出來て困るといふのなら、これは自づからまた話が別になる。若いうちの難有さで、さういふことがあつてもよい。唯だ、所謂濫作だけはつゝしまう。

▼『批評と添削』『質疑應答』ともに大汗であつた。世に愚問愚答といふ言葉があるなアと思ひ／＼書いたことであつた。幼いが、唯だ眞面目ではあつた。次第にさうなつてゆくことを望む。平賀君は丁度郷里に歸省中だつたりしたので今月は原稿を送らずに書いた。

▼暫く中止してゐた『前號では』の原稿をまた募集したい。唯だ歌だけを抜くのもいゝしそれに意見を加へるもよい。わざと長さなどに制限を置かずにおく故、自由に書いていたゞきたい。これも眞面目第一である。どうも斯うしたものになると、言ひたい

ことを言ふのでなくて自分を見せるためにものを言ふとか、妙にひねくれて言つてみるとかいかいふ傾向が生じがちであるが、その事無きを祈る。(知らない人があるかも知れぬ、本誌前號ではどの歌がよかつた、誰々のがよかつた、また、拙かつたといふことを書くのです)

▼弱つたのは課題歌の選者たちが、賞品の短冊を書かぬ事である。間に立つて社の庶務係が大弱りである。止むなく賞品贈與の事をば中止します。今迄の分には仕方ないからわたしでも書いて送らせてませう。

▼わたしの健康もいよ／＼よくなつた。この三四月は毎年來客の多い季節なのだが、その中で悠々と爲事をしとげて來た。たゞこの數日は少しやりすぎた形で、昨日今日だいたいぶ勢れが出て來た。二三日、此處の濱から見ゆる伊豆の大瀬崎に行つて魚を釣つて來ようと思ふ。

▼唯だ歌が出来ない。強ひて作りたくない氣持なのだから先づ此儘にしておきませう。(二十九日午前四時。)

六月號

▼用事より先に――

幾度も言つたと思ふが、原稿に自分の名前を書き落す人が少くない。極く特色のある書風だと、それによつて先づ間違ひのない見當がつけられるが、それも多勢のなかのことで覺束ない。忘れずに名を書いて下さい。それから誤字脱字が甚だ多い。一々摘發して見ようかと思つたが、諸君の名譽のために先づ見合せた。大きなことは言はない、高等小學卒業程度で、もしつかり書いて下さい。

▼もう一つ。これはともすると無意識でやることかとも思ふが、どうも摸倣の歌がおほい。先號、先々號に出ためぼしい人たちの歌は直ぐ眞似て作つてよこす。わたしの様な頭のわるい奴にまで解る位あだから、かなり烈しいものと見ねばならぬ。これは極く好意的の、一種の崇拜熱の變化とも見れば見らるゝがそれも程度問題である。例へば、三苦守西君の歌が好きだといふので、そつくりそのまゝ、同君の詠みぶりに眞似たのでは眞似られた人が先づ迷惑であ

る。その人の作風のよき所を自分でよく飲み込んで(消化して)それをだしにして更によくした自分自身のものを出すことはよろしい。うすつべらな眞似(これはまた不思議と、多少とも氣のきいた様な人にも多い)はよしたがよい。

▼質疑應答は今月は來なかつた。その代り、批評添削の方は百通あまりも來て、こちらをうるたへさせた。中には例の變なきたないことを云つて來る人がある。斯ういふ人は(それは主として若山牧水を罵倒したものであつたが)他を罵る前によく自分自身の事が恥しくならぬものとわたしは不思議に思つた。返事すべきものなら喜んで返事するが、所謂政事ゴロ式の斯ういふ手合には構つて居られぬ。心から牧水に不満ならばどん／＼退社してほしい。

▼もう一つ、社費。

▼牧水が歌をつくりました。昨日と一昨日と二日にわたつてゝある。アートン(ダイゴンボトシヲツベのことなり)があまりがみ／＼催促するので大いにふんがいして作つたわけである。作つて見れば、ま

んざらでもない。まだ／＼牧水氏も飲める資格があると思つた。

▼喜志子女史はおとうさんが危篤で一昨々日信州に歸りました。長兄、母、妹と次ぎ／＼にこの一二年の間に失つてゐるので、まことに氣の毒です。(廿九日)

七月號

▼今號は、始めた時の調子がよかつたせゐるか随分と大甘に選んだ様である。これではいけないと思ひながらどうにもならなかつた。澤山とられたから上手になつたなどと思ふべからず。

▼印刷所の都合で、終りかたになつてひどく急がせられたゝめに、わたしの『流るる水』はお流れになつてしまつた。また『前號では』は急にどき／＼と集つてこれも思ふ様に載せ切れなかつた。漸く眞面目なものになつて來て、嬉しい。自由な、忌憚なき、而して無垢な批評をどし／＼寄せて下さい。たゞ『質疑應答』がどうもいけない。まるでわたしたちにケンカを吹つかける様なもの、これを種に自分の博學

をひけらかさうとする様なもの（まさかさうでもな
いとは思ふが）のみであつた。歌はどうしたら上手
になれるかとか、萬葉は讀破したが一向作歌が上手
にならぬ様だがどうしたらいいか、といふ風の質問
はまつたく我等を惱殺するものである。『批評と添
削』も澤山來た。これは期間を限らず、出來るだけ
澤山の人のを出して行きませう。わたしも楽しく話
せる氣持だ。たゞ、時々脱線する事があるかも知れ
ないが、ゆるして下さい。

▼先日、東京で神原克重君の『棚雲』の出版祝賀會
があつたさうだ。それに沼津から誰も出席しなかつ
たと云ふので、不審や詰問を受けたが、我等はその
會に就いて何等の通知をも受けてゐなかつたので、
出席出來よう筈が無かつた。もし行けぬにしても祝
電位ゐは打ちたかつたに、残念であつた。

▼喜志は信州に歸つて老父の病床に侍すること一週
間、不思議と病人に小康の様子が覚えて來たので一
先づ沼津へ歸つて來たが、矢張り駄目で、一昨々日終
に永眠の報あり、あわて、また出直して行きました。

この事に就きいろ／＼とお見舞のおたよりをいたゞ
き、難有うございました。代つてわたしよりお禮申
しあげます。

▼雨は嫌ひでないが、梅雨となると、ことにその曇
となると、たまらない。キチガヒになりさうな氣持
で、たゞ／＼ダイドコロのピンのそばに忍んでをり
ます。降るならどんどんと降つて呉れたらいい。

▼サテ、今日もその曇だ。松原の松の梢で、鴉の野
郎、カアオ、カアオと啼いてゐる。

八月號

▼歌にその人の氣品の出で來る様になるのはなか
／＼むつかしいものだが、わが社中には割にそれが
多い様だ。これは内に心をひそめて——妙に『歌』
『歌』とから騒ぎをしないで——靜かに作つてゐるせ
ゐだとおもふ。これがもう少し深くなり重くなつて
呉れ、ば難有い。

▼氣のせめか、今度は第一第二詠草組が揃つてだれ
てゐた。頭に残つてゐるのは竹中理一郎君の位ゐの
ものだつた。

▼『質疑應答』はわたしの分をば大體みな出したと言
つてよい。ろくに舌も廻らぬくせに屁理屈をこねて
獨り踊りを踊つてゐる様なのはみな捨てた。斯うい
ふのに限つて五枚も十枚も何か知ら書きたて、居
る。近所迷惑でもある。

▼『批評と添削』はその代りほんの一割位ゐしか出來
なかつた。實はこの部の原稿を書きにかゝると一緒
にわたしは腸をいためて寝込んだからであつた。

▼どうもわたしは季節を感じすぎる。梅雨のころは
毎年いけない。昨年つづれたのもこの雨季であつた。
そのくせ雨は嫌ひではないのだから厄介だ。

▼歌も大いに出來さうだつたので、家の人たちにも
大いに威張つてゐたのだつたが、いよいよよとなつて
間に合はなかつた。氣持だけはまだ残つて居る様だ
から、出來始めたら出來るであらう。今號は舊作を
並べて、あけておいた餘白を埋めた。

▼今月は非常に社中に不孝が多かつた。矢張り季節
のせめだつたらうとおもふ。いたましいおもひであ
る。

▼『東京日日新聞』邦坊漫畫旅行沼津の巻にわたしの
あやしき肖像が出てゐた。これは初め當地の同紙販
賣店から引つ張り出されて邦坊君のお相手をさせら
れたのだが、見てゐるうちにあまりにいた／＼しく
なつていつか同君の介抱役を引受けた氣になり、而
して要するに自分獨りで酔つてしまつた様な事にな
つた様であつた。おとなげなしとな笑ひ給ひそ。

▼梅雨もあけたしするからこれより大いに元氣にな
ります。其處の山、彼處の溪と心には浮ぶが、まア
寝ながら地圖でもひろげて楽しむことだネ。

▼喜志子の父の不幸に就きいろ／＼御弔詞を頂き難
有うございました。二人して厚く御禮申します。

九月號

▼誠にはづかしい話であるが、わたしはまた寢込ん
だ。昨年と同じく脚が痛みだしたのである。それに
食慾といふものが全然なくなつてゐるので身體の衰
弱がひどい。甲州の下部温泉はさういふのにいゝと
いふので奮發して出向いてみたが、丁度夏蠶の終つ
た所だとかいふことで甲州邊のお百姓がつかけて

ゐてエライ騒ぎであつた。みな追込客で、一人で一室とるなど不可能だといふ有様、ほうほうの態で逃げ歸つた。そしてそのために急に病勢を増した様な形となつた。

でも昨年よりは軽い。昨年は一と月あまりも廊下を這つたものだつたが、今年は庭内位は歩ける。すつかり寢込んでをられ、ばい、のだが、毎日幾時間かは机に向はねばならぬ。爲事がみな時間ものだからである。

然し、御心配無用、醫師も今年のをば極く軽く見てゐる。もう少し秋ついて食欲でもついて呉れ、ば直りませう。お見舞状等、御辭退申します。

▼見舞状といへば暑中見舞など澤山頂いてをりながら一切御返事出来ませんでした。許して下さい。その代り、といふまでもないが寫真を入れて置きました。これは或る雑誌社からの註文で撮つたのですが、ついでに利雄さんともりました。朝晩に喧嘩のしどほしで居りながら、何の因果か、顔が似てゐる。

▼越前翠村君が八月四日、青森縣の西津輕郡で亡く

なりました。創作社とは深い縁故のあつた人なので、感慨深いものがあります。同君の事を初め、先月號で報告した故人たちの事に就き、追悼記風のものを書くつもりでゐましたが、病臥したため駄目になりました。一人二人の事でも來號には書きませう。

▼それからこれは庶務よりの申出、社費をどうか正確に(期日も金額も)拂ひ込んでほしいとのこと、これは少し注意して貰へば斯んなことを言ひつ言はれつすることも無いのにと、残念におもひます。

▼いま、縁先の小ながれの芹の茂みにばしやくといふ音がする。行つてみたら池の鯿が逃げ出して來てゐたのです。寧ろ親しい思ひでそれを捉へてまた池へ入れてやりました。

何や彼やで、今號は少し遅れます。あせりましたが、及びませんでした。久し振の遅刊でした。

卷 末 記

○本卷には短歌の拾遺と雑文とを収めた。

○短歌は歌集所載以外の作を少年期から年代順に輯めた。輯めるには出來得る限りの手を盡したが、ここに収めたのはその全部ではない。原稿または切抜等に特に抹消の印のついてゐたものは掲載を見合せたし、またさうでないものも、例へば書簡の端その他に書きつけた假初のたはむれ歌等で詳しい註譯をつけねばならないやうなものなどはこれを割愛した。

○初期の作品は延岡中學の校友會雜誌及び當時の廻覽誌「あけぼの」「野虹」等から輯めた。作の年代はそれぞれの作の終りに附けておいた。これは他の雑文も同様である。

○雑文のうち「耳川と美々津」は未發表のものらしい。これは肉筆原稿で、前半を缺いてをる。「汽車の中にて」も未發表、そしてこれは書出しだけで、後は中止したものである。「石川啄木の臨終」は大正十二年四月十四、十五兩日の讀賣新聞に掲載されたもので、それよりもつと以前大正三年一月の「創作」に發表した「石川啄木君の歌」(本全集第九卷所載)の後半と殆んど同じものであるが、この方が獨立したものとなつてゐるのでこれを採録した。「大會前記」「大會後記」といふやうなものはすべて創作社友大會の記事で、他の人々の手になつた大會記と共に發表したものであるから、そのつもりで讀んでいただきたい。「歌日記」中の歌は歌集の歌と相違してゐ

るが多いが、すべてこの方が原作なのである。「解説」は某少年雑誌のために執事されたものである。

○自著の序文跋文は單行文の形式のまま本全集に入れたもののそれと重複するのはすべて省略した。

○「創作」編輯便は非常な量になるので、止むを得ず大正三、七、八、十、十三、十四の五年間分を割愛した。しかしそれ等は掲載のものと大體に似たやうな内容であるから、先づこれだけで大した遺憾はないと思ふ。なほ掲載した年度でもこれ以外に餘白埋めとして書かれた断片的のものなどは矢張り割愛するのほかなかつた。初めのうちは「創作社より」となつてをり、途中「編輯所便」となり、後には「創作社便」となつてゐたが、それらは一々ことわるまでもないと思ふので、單に何月號とだけにしておいた。(なほ第二卷(明治四十四年)にも「机邊より」として編輯便類似のものが出てゐるが割愛。)

○口繪寫眞の一、向つて右は關口春華(源之助)氏、中央は大見桂嵐(達也)氏である。二は前列向つて右より三澤霜月(豐)、土岐湖友(善磨)、佐藤綠葉(理吉)、藤田紀水(進一郎)、後列、安成貞雄、若山牧水、仲田勝之助の諸氏で、三月十七日の撮影。三は信州北佐久郡本牧村に揮毫行脚中。四は歿後間もなく沼津千本松原に建設された歌碑である。(天悟法利雄記)

(兩角製本)

昭和五年八月二十九日印刷
昭和五年八月三十一日發行



牧水全集 第十卷

著者	若山牧水
發行者	山本三生
印刷者	竹内喜太郎

東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地
東京市牛込區櫻町七番地

發兌

東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地

改

東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地
電話芝(43) 〇二二二
電話芝(43) 〇二二二
電話芝(43) 〇二二二
電話芝(43) 〇二二二

同
竹
西
N
三

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

南屋松坂屋古呂
竹中書店
電話中一三三〇

NO
¥ 70

[Faint handwritten text and sketches, possibly musical notation or a diagram, spanning across the pages.]

